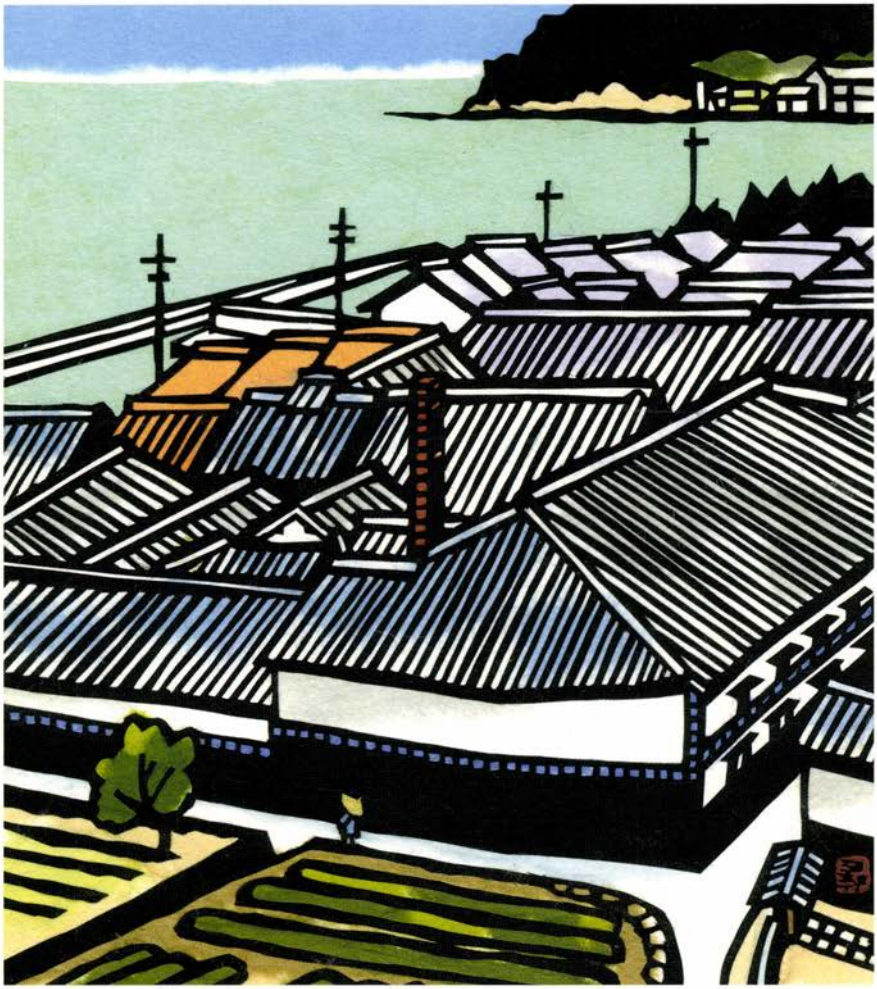
川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
平成二十一年九月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻九八八号



日川協加盟

No. 988

九月号

第15回 川柳塔まつり
川柳塔創刊85周年記念大会

《同　人　総　会》

と　き　　21年10月12日（祝）午前10時～11時
ところ　　ホテルアウィーナ大阪　3階　　生駒の間
　　（近鉄上本町・地下鉄谷町九丁目下車・TEL 06-6772-1441）
議　事　　平成20年度事業経過報告・同決算報告・会計監査報告
　　平成21年度事業計画・同予算案・役員人事・その他

《各賞表彰式・記念句会》

と　き　　同　日　　午前11時開場・午後1時開会
ところ　　ホテル・アウィーナ大阪　4階　　金剛の間
表彰式　　路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・檸檬賞・一路賞・
　　各地柳壇賞の表彰式を午後1時から行います。
おはなし　「嘘の効用」　帝京大学教授・吉本興業顧問　竹本　浩三　氏
兼　題　　「招　　く」　番傘川柳本社　田中　新一　選
　　「シングル」　川柳文学コロキュウム　赤松ますみ　選
　　「長　　い」　川柳塔社　政岡日枝子　選
　　「回　　る」　川柳塔社　川上　大輪　選
　　「歳　　月」　川柳塔社　板尾　岳人　選
事前投句　　「　顔　」（9月4日締切）川柳塔社　河内　天笑　選
　◎各題2句・欠席投句拝辞　◎出句締切　正午（午後4時半終了予定）
会　費　　2,000円　当日いただきます。（記念品　呈）

《懇　親　宴》

と　き　　同　日　　午後5時～7時
ところ　　ホテル・アウィーナ大阪　3階　　葛城の間
会　費　　7,000円（会席料理）
宿　泊　　ホテル・アウィーナ大阪　　8,000円（朝食付き）

《翌　日　観　劇》

と　き　　10月13日（火）　開演　12時45分　終演　15時45分
ところ　　吉本新喜劇　なんばグランド花月　☎06－6643－1122
会　費　　4,000円　要予約、先着25名様にて締切ります。

＊事前投句および懇親宴・宿泊・翌日観劇のお申込は**チラシに刷りこみのハガキ**（御希望の方は事務所）にて9月4日（金）までに本社事務所宛、お送り下さい。
＊懇親宴・宿泊・観劇のご送金（句会費除く）は同封の振込用紙でお願い致します。

主催　川　柳　塔　社
大阪市天王寺区大道1丁目14番17号201
〒543-0052　☎・FAX 06－6779－3490

大阪市電

河内天笑

大阪市交通局の職員及び退職者が運営する「川柳大阪」（会長・長井善純氏）の創刊八〇〇号記念川柳大会が八月八日川柳塔社後援の下、大阪市立中央青年センターで盛会裡に開催された。

単純に遡っても戦時中に創刊されたことになり大した歴史のある会で、川柳塔社の常任理事も多数輩出している。現役では坊農柳弘、川端一歩氏、元常任理事には塩満敏、玉置重人氏は活躍中であり故児島与呂志、高須賀金太氏等、名物川柳人が目白押しだ。呑助がずらり並んでいるのも見事である。

兼題「レール」の披講に先立って私の学生時代、堺の出島から大阪駅前の旭屋書店前まで十二円五〇銭で行けたこと、今里ローターリーまで往復二十五円だった懐かしいことや、その頃（昭和三十年前後）相愛女子大学の国文科の教授をされていた元同人の戸田古方氏が大阪市電の車中で一定期間「川柳講座」を開き川柳の大衆化に尽力された事などに触れておいた。（森下愛論氏に確認済み）元常任理事の故神谷凡九郎氏は戸田古方さんの講座がきっかけで川柳を始められた事もお聞きしている。私が川柳を始めて間もない頃、戸田古方選「予報」の題で、「稚内一〇〇〇ミリバール風力二」を天位に抜いて下さった事を記憶している。ご自身の手書き句集も頂戴しているがどの作品も軽味の利いたのが多く、私のこんな剽軽な句をお取りになった事も十分頷ける。当日最も印象に残った作品に、岩佐ダン吉選「記念」の天位の句

八月は六日九日十五日　　森本弘風

の一句で日本人として忘れてならない日を鮮明に簡潔に詠まれている。この日八月八日は妻の誕生日でもあり、これまで何もプレゼントしていない事も気にかかり「真珠のネックレスどうや」とお伺いを立てたところ「そんなん要らん、これがあるから」と出して来たのが真珠のネックレス。三男が小学校の修学旅行のおみやげにくれたお伊勢さんで買った物で、かれこれ三十年近くなるが冠婚葬祭にはずっとこれを愛用しているらしい。

この日の朝ＪＲでとっても嬉しい出来事が二つ重なった。各停から堺駅で快速に乗り替えたところ、昼前の割には混んでいる。中の方へ押し込まれて行ったところ小学校らしい男女の兄弟がさっと立って「どうぞ」と席を譲って呉れた。感激した私は坊っちゃんの頭をなでて「おおきに」天王寺でも一度「おおきに」の手を振った。そして次に環状線に乗ったところアラフォーの上品な女性が「どうぞ」と席を立ってドアのところへ去った。「今日はなんでこない優しい人ばっかりに会うんやろ」と喜び合うことが出来た事も併せてご報告する。

ええことの重なる時は気をつける　　天笑

座右の句

人恋し人煩し波の音　（栞）

私の句

その先が書けぬ手紙の二三日　金子　美千代

川柳塔　九月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田　尋「坂　越」

■巻頭言　大阪市電……河内天笑……(1)
後期高齢者のつぶやき……波多野五楽庵……(2)
川柳塔（同人吟）……河内天笑選……(4)
川柳塔の川柳讃歌(57)……木津川　計……(47)
自選集……(48)
温故知新……(51)
水煙抄……川上大輪選……(52)
愛染帖……新家完司選……(72)
麻生路郎句抄……(76)
檸檬抄「楽　器」……牛尾緑良・高田美代子共選……(77)
誹風柳多留一一篇研究 49……(80)

後期高齢者のつぶやき

波多野　五楽庵

作家であり劇作家である井上ひろし氏の処女戯曲に「うかうか三十・ちょろちょろ四十」という脚本がある。当時二十四歳だった彼にとって三十、四十歳は想像的年代である。

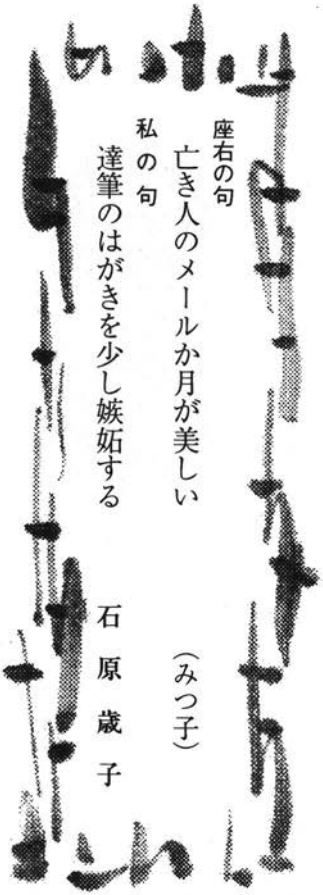
もし、今の私が書くとしたら「あくせく七十・とっくに八十」となる事だろう。

その上、後期高齢者なる名称を付けられた。後期があれば終期もあるだろう、と診療報酬の説明書を見ていたら、厚生労働省のエリートは後期高齢者のために有難くも次の一項を考えていた。

医師が一般的に認められている医学的知見に基づき、回復を見込むことが難しいと判断した後期高齢者について、患者の同意を得て医師、看護師、その他関係職種が共同し患者及びその家族等とともに、終末期における診療方針等について十分に話し合い、その内容を文書等にまとめた場合、医師、歯科医師は「後期高齢者終末相談支援料200点を算定する」とあった。これには次の説明がある。

患者に対して現在の病状、今後予想される

一路集
「予　定」……川崎ひかり選…(82)
「新　聞」……加島由一選…(82)
「ぴったり」……安土理恵選…(83)
初歩教室「グループ」……鈴木公弘…(84)
秀句鑑賞
同人吟……森本弘風…(86)
水煙抄……中村金祥…(88)
■エッセー　川柳の翻訳と国際化……井上桂作…(89)
■エッセー『川柳雑誌』と鶴彬……木本朱夏…(90)
八月本社句会……(92)
各地柳壇（佳句地十選／門脇晶子）……(96)
柳界展望……(113)
九月各地句会案内……(114)
■編集後記（ひとこと／江島谷勝弘）……希久子・朱夏・恵子…(116)



座右の句
亡き人のメールか月が美しい　（みつ子）

私の句
達筆のはがきを少し嫉妬する　石原歳子

病状の変化等について説明し、病状に基づく介護を含めた生活支援、病状が急変した場合の延命治療等の実施の希望・急変時の搬送の希望並びに希望する際は、搬送先の医療機関の連絡先等、終末期における診療方針について話し合い、文書等にとりまとめて提供する。

簡単に言えば今、死の境に居る患者さんに死の覚悟をさせ、その同意を得る事が必要で意識を喪失している前にと言う事で、突然死の場合には200点を算定できない。㈠あなたはもう治癒しませんと告げ、㈡その時に延命処置を希望しますか、と尋ね㈢急変した時はどこへ搬送されたらよいか、搬送された病院の先生と亡くなるまでの診療方針について相談しなさい。と言う事である。

医師、歯科医師は患者さんが亡くなる事を見通した上で判断しなければならない。言うなれば神の見知がなければ不可能で、このような企画をする厚生関係の役人は、神の如き頭脳で我々を指導しているのである。

平成二十一年六月に開催された国会で保険法改正の事も討議されたが、明年の四月にはまた変更させられそうだし、民主党が政権を取ればどのような事になるのだろう。姥捨山の時代に移行しつつある後期高齢者のつぶやきである。

川柳塔

河内天笑選

珍客へ腕を振るっているレシピ
放任で育てたとんび戻らない
どんどん食べてばんばん溜まる皮下脂肪
老犬とわたしゆらゆら散歩する
ねばねばを食べて百歳まで粘る
結び目を緩めて余生謳歌する

松江市　銭山昌枝

孤独だと思ったことのない小石
まっさきに逃げ出すことを考える
はないちもんめ売られていった女の子
これ以上ガンバレなんて言わないで
向日葵の上でゴッホを探す蟻
耳の虫鳴いて退屈しないボク

羽曳野市　三好専平

いたわりの言葉が傷をつけていた
いい嫁になろう一度の縁だから
気づかって小さな傷は埋めておく

神戸市　山田婦美子

幸不幸胸三寸の勝負どこ
目を伏せばいつも描ける母の里
節一つ越せば新たな道がある

田辺市　岡本昇

ばあちゃんは畑に出るとしゃんとする
とうちゃんはかあちゃんの前しゃんとする
かあちゃんは何時でもしゃんとしています
にいちゃんは彼女来る日はしゃんとする
ねえちゃんはメール打つ時しゃんとする
永田町にしゃんとした人見当らぬ

尼崎市　春城年代

いさぎよく脱ぎ着のできる季がめぐる
伊吹山のお花畑の足跡よ
眠剤を絶って清々しい目覚め
老境の起き伏しにある緩い坂
わたくしに課した試練とあけ暮れる
ご近所の戸を繰る音に順があり

羽曳野市　吉村久仁雄

歩が金になって品格気にかかり
ひもとけば寂しがりやが組む徒党
終章へ蛙ぴょこぴょこ歩を止めず
腰曲がる母のネギ切る揺るぎなさ
カーナビの底に冥土の地図がある
こんにゃくもタケノコもいい刺身好き

鳥取県　佐伯やえ

みごとに咲いてみごとに散った沙羅双樹
肩の蝶番なおして秋の風をまつ
生きる張りここに畑がある限り
きき飽きた不況に着せるものがない
痛い時いたいと言える友がある
筆談をする悲しさよ秋の雨

堺市　加島由一

ルビー婚恋は延長戦になる
大穴が当って消えた偏頭痛
表向き夫唱婦随という形
甲斐性のなさを笑っているダイヤ
社長以下練習どおり頭下げ
折に触れ子に語り継ぐ始発駅

弘前市　髙瀬霜石

金儲け下手な同士で飲んでいる
家計簿はとうの昔に氷河期だ
百人に百用意する褒め言葉
金持ちと悪人趣味が似ています
算盤は使わないけど死語じゃない
ありがたいことだ自然に目が覚める

吹田市　山本希久子

きゅうり　そうめんさっぱりと夏を越す
ひと言が多くてひと言が足りぬ
白黒のテレビと私の昭和
正直に答をくれる塩砂糖
果てしなくあの世へ一本道続く
秋を迎えに行く自転車を飛ばす

枚方市　小林わこ

若ぶった友も白髪で安堵する
阿呆やなあ風が届けた母の声
悲しい日涙と共に髪洗う
少しだけ回り道してみませんか
ぷっつりと切った御縁を悔いている
二兎を追いとうとう一人ぼっちです

枚方市　伊達郁夫

切り抜けた嘘から口が錆びてくる
触れそうな距離で届かぬ君と雲
大花火よりも頼れる人でした
敵消えて男が枯れていく美学
あの人にまた逢えるかも回り道
髪一本こころの一部だと思う

藤井寺市　髙田　美代子

堂々と歩けと影に叱られた
話しかけないでギョーザが匂うから
ハーモニカ一本持って旅の空
美しい娘をもって安まらず
地味な色着こなせたのは若い頃
それだけの事がどうにも許せない

大阪市　板東　倫子

ゲリラ梅雨オタマジャクシも降って来た
マスコミはけたたましくて無責任
華ありき嵐もありき尉と姥
藁草履編んだと言えば皆笑う
憂き事の積りし色か梅雨の空
宇宙の雄スペースシャトルエンデバー

河内長野市　山岡　冨美子

白黒をつけぬ大人の知恵もある
百年に一度と出遭う痩せ蛙
礼儀作法教える人が居なくなり
御神籤が吉で油断をしてしまう
世代間格差小顔に長い脚
自力V消えて浪花の燃えぬ夏

藤井寺市　鴨谷　瑠美子

夏時間よい思い出を大文字
色々な貌をわたしも持っている
白い雲ロマンチストになりすます
トンボ舞う盆が来るよと知らされる
今年また蛍を見ずに終りそう
身勝手に女に戻りたくなった

堺市　志田　千代

米朝の絶妙の間の芸に酔う
粗相なく食べるきれいな箸づかい
朝顔よりゴーヤの花を数えてる
討たれ弱いと知った八方美人
淋しいがつるまないのが私流
株屋さんも保険屋さんも来なくなり

三田市　北野　哲男

サンマ焼く匂いがしてる駐在所
赤字でも打出の小槌妻が持つ
一つ屋根独立圏が三つある
冷や奴これで馬力が出るかなあ
身の内の泡を束ねた大欠伸
時々は山を動かす浮動票

大阪市　谷口　義

夏だけはいつも本気でやって来る
肝臓も腎臓も働いている
運動不足なのでコロッケ買いに行く
共犯者が待っていました水呑み場
詫び状に記念切手を貼っておく
丼の好きな息子はやりやすい

大阪市　古今堂　蕉　子

おいしくて安いお店が好みです
水浄化世界に誇る技術です
プラネタリウム星を見てたか寝てたのか
ロボットが海で泳ぐと駄々をこね
泥の船沈めぬように漕ぐ二人
おもしろいともうるさいなとも言われ

京都市　高　島　啓　子

友達と水二杯飲む喫茶店
肩書きのない水道の水を飲む
勝負服水を一杯飲んでおく
水を飲みすぎたか指先からしずく
馬老いて薬と水が欠かせない
納豆をかきまぜ見返すと決める

西宮市　緒　方　美津子

生きなさい神は手掴み許してる
うたたねのBGMになるテレビ
米のパンさっそく一つ買ってみる
嫁いびりしたら姑は自滅する
躓くときてくれる人逃げる人
放浪でなく主張です青テント

藤井寺市　太　田　扶美代

謙遜をしすぎる人にご用心
お見事という他はない物忘れ
お次の方どうぞとペンギンが言った
花に水遣りわたしにも水をやる
父ははの話ばっかりする夕陽
くぎ煮いただきサツマイモ差し上げる

鳥取県　細　田　裕　花

アスパラが毎日二人分伸びる
リタイアーの夫をしばしウォッチング
時を経て褪せたジーンズなり二人
歳月は痛み苦みを玉に変え
ひまわりとコンビは組めぬ月見草
一言がオウンゴールとなる誤算

鳥取市　加　藤　茶　人

悲しさと別折箱に詰める通夜
何故生きる問答をして出ぬ答え
三歩後殺意を抱いて影を踏む
儲けても税使っても税の網
コラーゲン女性へ心地良く響く
もったいない湯舟に浮いている抜け毛

橿原市　安　土　理　恵

ガラスの指輪愛は脆いと思し召せ
足跡を消すためそっと戻る道
昼のワインもう発酵をするわたし
スリーサイズ当てた当てたと大ジョッキ
ともかくも明日の米があるゆとり
結論の前にゆっくり茶を入れる

尼崎市　山田耕治

ジムに行って流した汗の倍を飲み
流されるギター麻雀ルイヴィトン
西の窓にゴーヤの影が伸びていく
元気です鐘の鳴る丘世代です
キリギリスのライブを蟻が聞いている
先生がまさか警察でもまさか

大阪市　伊藤博仁

肥えてきたもう勿体ないと言いません
天下御免お墨付き持ちトキが飛ぶ
来たついで水子地蔵に手を合わせ
質流れ指輪は人を選べない
ああうまい自分でほめるしじみ汁
いいとこへきたと薮蚊がよって来る

鳥取市　近藤佳子

純粋の蓮華蜂蜜届けられ
蓮華田は牛が家族であった頃
雪山を越え仕合わせの郷に入る
百選の水と遊んでいる蛍
元気出せしっかりせよとお灯明
友も長らえて毎日でんわくれ

宇部市　平田実男

茄子トマトいただきますと言うて挽ぐ
仕事よりお金が欲しい天下り
お隣の屋敷へまいた癪の種
川柳のお蔭で褪せぬ自分色
花嫁の過去が角隠しをはみ出
善人と言われ馬鹿たれとも言われ

枚方市　安達忠央

朗らかな嫁でしゅうとめつい笑顔
おてんばで嫁に行っても仕切ってる
純粋な心さがしてまだひとり
止まり木の隣としゃべりだす勇気
あけすけに言うた反応気にかかり
にっこりとしたが笑ってない瞳

鳥取市　岸本孝子

おんぶした孫が近頃意見する
酔うたびに大きな話聞かされる
分かってはいるがない袖振れません
街中にモデルハウスが建っている
線一本点の一つに辞書を繰る
マスクだけ売れて終った流行風邪

鳥取市　岸本宏章

心配は政界よりもタイガース
世渡りの下手なモデルにされている
長生きを目指せば国に嫌われる
苦労して盗んだ芸は色褪せぬ
たっぷりの汗が私によく似合う
鬼の面借りねば人を裁けまい

松山市　高橋宏臣

反抗期遠いむかしは木に登る
闘魂を滲ませておく土ふまず
複雑な過去を引きずり黙秘権
疑問一つ握手はそっと左手で
妥協した手だな乾いた右手だな
携帯の変換ミスにあるジョーク

弘前市　櫻庭順風

田舎人市立学校卒業す
小作人小作人たりいつまでも
小作人地主の塀を見て作業
軍隊の苦労厭わぬしたたかさ
南から軍事郵便一度きり
南から悪運強く帰還せり

鳥取市　山宮愛恵

決心がついた治った不眠症
狂言の笑いと月を持ち帰る
成りゆきにまかせて月が美しい
固まった契りにうまい大ジョッキ
生き抜いてちくわ大きな穴になる
私は下方修正して生きる

富田林市　中井アキ

気配りが過ぎてしんどくなってくる
泥坊のようにUVカット帽
ステーキが薄いと文句言っている
母も逝き里の階段軋み出す
酒とろりすべて白紙にしてくれる
ピンチには狐うどんを食べている

弘前市　高橋岳水

銀行に絆を持たぬ資金繰り
大振りは出来ぬ凡夫の単打主義
八月の巡る数だけ増す懺悔
墓だけの故郷となった風の盆
わらべ唄どこかで亡母の声がする
肩の荷を下ろすと進む骨粗鬆

鳥取県　山下節子

マッカーサーのパイプ戦後の一ページ
目には目か説教少しくどすぎる
エコのためひつぎも紙になるそうな
あの時がチャンスだったと後の悔い
言い勝って幸か不幸か長い夜
難聴でピントの合わぬ会話する

弘前市　福士慕情

信号が変って僕が動けない
また少し壊れはじめた記憶力
詰め放題欲をギューギュー詰めにする
飴よりも鞭がときどき欲しくなる
天気予報当りガッカリするゴルフ
会いたくない人が隣の席にくる

大阪府　澤田和重

いつ死んでもいいとは本音言うてない
挫折して見えないものが見えてくる
馴れ初めに触れると夫婦ゆずらない
七夕に初恋の人思い出す
無駄骨を折ってしまった早合点
お茶までの誘い想定内に入れ

さいたま市　星野育子

名刺の残が気になる昨日今日
骨切りのリズムかろやか食そそる
先頭はイヤで最後尾も嫌い
花泥棒育てた人を踏みにじる
排ガスと喫煙罪は五分と五分
生きている人に合わせてする法要

豊中市　藤井則彦

変わったなと見つめる妻の髪かたち
料亭より旨いと嫁を持ち上げる
おはようの笑顔も虚し募金箱
医学書の愛読者ほどすぐに病む
アラフォーの選手が育つタイガース
嫁はんと言うてるうちはご円満

鳥取市　倉益一瑶

オクターブ上げて涙をふり落す
道草をしてひとまわりでかくなり
泡吐いてアサリはとても噂ずき
セールスのもしももしもに揺れている
薄情になって曲ってきた背骨
立ち泳ぎのまま流されてゆく日暮れ

出雲市　富田蘭水

はね返すバネをめあてに生きている
遅れまい棹はしっかと川底に
しっかりと大事な今を無駄にせず
お先にと一言心ぬくくなる
梅つける昔の人の言う通り
薬のむ半分毒と決めている

西宮市　片山忠

反るように歩きひんしゅく買っている
誰の罪歯抜けになったアーケード
散髪をしても頭は古いまま
悪態をついて自分の舌を噛む
嫉妬などできぬ歳だと舐められる
閉店セール仇のように買いまくる

砂川市　大橋政良

物忘れ笑うしかない老夫婦
ネクタイの裏にへそくり溜めている
充電をしようやき鳥屋が見えた
行間の赤ペン叱っているようだ
ポケットで打算のソロバンをはじく
変化球変化するのは僕のほう

竹原市　時広一路

日本語のトップと思うアリガトウ
独りには勿体ないと風呂の湯よ
名も知らぬ猫と眼が合う硝子越し
様々なみどり集めて山のどか
年がら年中変らぬ顔で石地蔵

竹原市　石原淑子

パワフルな日日を支える細い骨
崖っ淵不思議な力もらいうけ
蓮の花咲く頃想う寺のあり
ありがとう今年も逢いにオニヤンマ
雑踏の中で小さな秋を観る

竹原市　岩本笑子

寄り添うて猫の昼寝に付き合おう
優しさと玉ネギ炒めカレー通
葉桜の道で見つけた雨ガエル
窓全開にしてトンボの通り道
味噌汁が辛いと思う今日のうつ

美祢市　安平次弘道

図書館で仕入れた知恵を売り歩き
充電中我楽多市に見る命
外面が良くて気にせぬ忘れ物
かたちだけの命至難だなと思う
決め事があって自由が守られる

東かがわ市　川崎ひかり

身の丈を生きて可もなし不可もなし
聞かぬふりアンテナだけはピンと立て
美人でも年相応のしわがある
入れ歯には手強い相手梨りんご
ジョークにも少しホップを効かせとく

東かがわ市　伊勢八重子

語り継ぐ風化はさせぬ八月忌
たまに逢う嫁姑で仲が良い
内面は言わず語らず顔に出る
もう少し開いて見たい心の目
下り坂歩幅合わせる共白髪

東かがわ市　清川玲子

眼科歯科老いがどんどん加速する
失言のたびに眼鏡がくもり出す
水連の花と緋目高競い合う
待ちかねた雨も続けばあきられる
横文字になじむ頃から若返る

東かがわ市　原賢

生の字を幾度書いたか闘病記
朽ちてゆく身体に鞭を打って生き
年金を薬に変えて生きている
ゼロからの数字に賭けてみる勇気
決断がつけば足どり軽くなる

松山市　宮尾　みのり

半年がこんなに速いカレンダー
生きている限りいい事探さねば
千円を送るに高い民営化
皺一つない七十が嘘っぽい
意地悪を徹子の部屋で見てしまい

松山市　古手川　光

給付金選挙の頃に忘れられ
打ち上げる花火も弾まない不況
頂いたメロン素通りして孫へ
マスコミが騒ぐ蝉しぐれを思う
過疎進む里でカナカナ聞く日暮れ

大洲市　中居　善信

作業着は汗の匂いのする木綿
泣き虫で涙脆くて辛辣で
優しさも短気も僕の素顔です
実直で裏も表も何もない
薪で焚くお風呂わが家のエコ暮らし

西予市　黒田　茂代

切符買う心はすでに会場へ
摺り足の美学に酔うた能舞台
いつの間に緑　狭庭の石に苔
ファッションも日焼けも未だ気にかかる
つば広帽子日傘差すより楽になる

高知市　小川　てるみ

露草を挿して涼しい風が吹く
真っ当に生きて素顔のラストラン
晩学のあせりを笑う記憶力
苦楽半々手を携えて来た絆
百歳の素顔尊敬しています

高知県　小澤　幸泉

たった一パイでやさしい父の顔になり
棺の前でやっと親しくなりました
つまずきの石をまたいだままで生き
耳鳴りの奥に浄土が待っている
親ゆずりイヤな言葉に耐えている

唐津市　山口　高明

苔寺の枯山水は寂の中
早発ちの熊野古道は霧の中
御自身で掘った墓穴と気付かれず
心ない言葉吐いたと自己嫌悪
娶る気も嫁く気も無くて親泣かす

唐津市　坂本　蜂朗

隠れんぼいつでも妻を探してる
午前二時音を殺して缶ビール
古稀だって未使用の愛持っている
方言の敬語で古里暖かい
知らぬから大きな顔で言えた嘘

唐津市　樋口輝夫

改革の看板大きく揺れに揺れ
爺を見て大袈裟に泣く孫の知恵
新入りが名刺ばらまく縄暖簾
幸せなふりをしている昨日今日
今ここに何しに来たか引き返す

唐津市　市丸晴翠

一病を宥めすかして往く八十路
生物のヒト科ひっそり土となる
マンションが楢山となる大都会
愚痴吐けば笑って聞いている遺影
マニフェスト終ってみれば絵空事

熊本県　髙野宵草

四十年医師の薬で長寿する
老い二人夕餉が済めば寝床敷く
湯槽から今日の疲れがあふれ出る
仕合せは痩せる食事と運動と
庭に出た留守をテレビが騒ぎ立て

熊本市　永田俊子

信じないが運勢欄の誘い水
門限のけじめ守った古時計
べからずが解けて自由の破れ傘
上向いて歩けなくなったよろけ独楽
ガラガラポン馬鹿正直の外れくじ

熊本県　岩切康子

新鮮さ誇る胡瓜のトゲが刺す
改札を通せんぼする印字ミス
世帯じみてきた夫の旅土産
磨き残し日々溜っては石になる
裕ちゃんの歌に自分を振り返る

シドニー　坂上のり子

核不拡散日本がリード出来る今
人懐っこい行きずりの猫だき上げる
フラダンスの手習いをしてはしゃぐ午後
色々の人に逢うたびもらう知恵
これからをどんなに咲いて散れるのか

黒石市　相馬一花

くどくどと身の潔白を主張する
美人だと絶叫止めぬ三面鏡
参考書売るほど買ってサクラ散る
ためらうと癖になるから決断す
山勘が冴えて稼いだ草競馬

黒石市　佐藤古拙

アンテナを張り身構える管理職
柩にはバイブルそして万葉集
恐竜が亡ぶヒト科があとを追う
仁王像父をおもわす怒り肩
羊水に浸ってきいた子守唄

十和田市　阿部　進

ほめられて血圧までもあがります
介護保険高くてほんま困ります
スーパーができたおかげで店じまい
過疎の村寺もお医者も困ります
里帰りワラビにふきにふきのとう

平川市　小寺花峯

摂氏三十度旗がなびいて波千鳥
手間いらず元手もなくてゴマをスル
気力なら亀にも勝った老いの坂
選挙ポスターみんな当選する笑顔
夫婦茶碗互いに欠けて夫婦酒

弘前市　今　愁女

派遣切れの牽牛織女悲しませ
無理な改良西瓜は丸い方が良い
箱型の西瓜割りなど滅相な
哀愁をとどめ越中風の盆
胡弓の音哀し越中おわら節

弘前市　岡本花匠

サイタサイタサクラに育ちやまとだま
三重連ＳＬに沸くＯＢ会
一病と生きて意外な八十路坂
厄除けを父に聞いてる九一法
被爆者証保持で本音を語る友

青森県　須郷井蛙

農作業軍手は呼吸してくれる
遊園地子供のいない縄電車
腰痛も土と語って癒される
いい男ぐずぐずしてたらみなとられ
評判の店を同業も覗き

青森県　松山芳生

モナリザの微笑出せる娘に育つ
風呂敷に包んだいのち配る母
もう母になる日を知っているレモン
泣きに来た海がゆったり笑い出す
落書きの街並にある未来絵図

国分寺市　野﨑　勝

生きた道青写真とはかけ離れ
見舞う度母が素直になっている
ポンポンと揚げて宇宙も過密気味
土地訛り住めば子供は直ぐ染まり
味なんて判らないから発泡酒

八王子市　播本充子

Ｂ型の妻にいつもは通じない
すんなりとローンが組める公務員
やっぱり楽だ二男三男の嫁
オバサンが迷うランチＡＢＣ
赤ちゃんがねむいねむいと泣いている

東京都　清原悦子

レース編みひとつ仕上げた雨続き
放流のメダカ流れに消えて行く
土鈴の音土産話に花が咲き
廃校の思い出そそる四季の花
のど飴が売れる乾いた街に住む

東京都　岸野あやめ

梅漬ける甕洗剤を近づけず
梅の水揚がり雷さんを待つ
水くさくなった西瓜と世間さま
給付金エコポイントと矢継ぎばや
有難や裁判員にならぬ年齢

横浜市　菊地政勝

少子化の誤算年金慌てさせ
妥協して許し合ってる共白髪
つまずいたお蔭まわりが見えてくる
金婚へ喜怒哀楽の走馬灯
貧乏が辛抱強い子に育て

横浜市　小野句多留

ごまかしてエヘラエヘラの日向ぼこ
若者に合わす歩幅が無理をする
薄化粧で通せば世間広くなる
選挙して早くお楽になりなさい
日銀の短観生の声がない

川崎市　三浦きぬ

気が付けば懐かしい顔みなあの世
楽器一つマスターしない今に悔い
眼を閉じて新緑の気を胸一杯
火葬後に骨が残るかよくも痩せ
待つ人が居ると見上げる天の川

富山市　島ひかる

雨雲の衣をまとう劔岳
風の盆の切手が誘う風の盆
ちゃん付けで呼び合う古稀のクラス会
カレーライス　ライスカレーにある違い
一年の早さ余命に知らされる

可児市　板山まみ子

つん読をくずしたいもの雨つづき
雨も良い家事をしなくてよい人に
年金をもらって生きるまだ生きる
初対面作り笑いでしのいどく
会うだけのつもりがやけに馬があう

静岡県　薗田獏沓

無一文おのずと肚が座ったぞ
高齢者証書書替え来いと言う
同居してじっと我慢の親の位置
まあまあと足して二で割る手打式
恐いもの見たさ女の薄化粧

犬山市　吉田幸子

シミチョロが大手を振って夏を行く
笹百合が欲しくて登る崖っぷち
機械なら見捨てられてる膝故障
ラッパ飲みペットボトルの会議室
草取りへ蚊の歓迎に合う餌食

犬山市　金子美千代

賞金を見込み奮発したドレス
リハビリの母へ光が射して来る
九十の母の頑張りお手本に
欠点もひっくるめての友と言う
婚活へ本腰入れる派遣切り

犬山市　関本かつ子

健康な汗の匂いとランドセル
ボーナスの話聞いてる耳そうじ
なで肩の母子浴衣が良く似合い
モーニング右も左も老夫婦
冷房車痩せも肥満も構いなし

愛知県　早川遡行

雑学の海を泳いできた河童
風呂掃除ぐらいしなくてはと思う
はらいせに蹴った小石が跳ね返り
衣裳みるだけでも価値のある舞台
食べて見れば毒か珍味かすぐ分かる

京都市　三宅満子

眠れぬ夜ラジオを友に夢心地
旅の宿薬自慢で盛り上がる
気に入った写真遺影に残しとく
静養の入院何故か忙しい
新監督作戦裏目負け続く

京都市　桝本宏子

料理好きルーツは母の五本指
手紙には祈ってますで締めくくる
髪形も行く末もまだ定まらぬ
噂話深いところで立ち泳ぎ
肝心な時下を向く悪いくせ

京都市　西村益子

スーパーで小銭すっきり整理する
メモを持ちスーパーデビューする夫
仏壇に愚痴をこぼして手を合わす
何時からかきょうだい揃う墓参り
シャッター街やっと見つけた喫茶店

京都市　坪井孝一

青空が小さな嘘を笑ってる
平凡でも辛抱努力忘れない
否応なし日課となったプランター
騙されても笑顔の酌はみな仲間
関白宣言あれから地獄始まった

亀岡市　井上森生

青雲の昔が今に蘇る（高校同窓会）
遼君のひたすら励む笑みに惚れ
朝顔を咲かせて孫の帰省待つ
歯磨きは老いてますます念入りに
大吉のおみくじ嬉し祈願寺

長岡京市　山田葉子

それからは自問自答が増えました
快復期なんとうれしい無駄遣い
回れ右弱気の虫を吹き飛ばす
パラソルをくるくる噂けむに巻く
会いたい日銀河鉄道乗りにゆく

大阪市　池上清治

可愛がるほどにまあるく育つ嫁
嫁姑仲が良いのは美しい
嫁に行く娘に望む並の幸
カラオケは合の手くればしめたもの
インフルでマスク溢れる通勤車

大阪市　小谷集一

不整脈好きと嫌いの乱れ打ち
プライドが火花を散らす初対面
小細工を止めると視界広くなる
空振りは三回できる運試し
曖昧に生きて図太くなる心

大阪市　吉村一風

人間の知恵試される大不況
いつの間にか妻のリズムに乗っている
不況でも花はきっちり夢くれる
風みどり五臓六腑にゆきわたる
痛いとこ突かれて楽し無礼講

大阪市　福岡末吉

許容枠絞るわが家の財務相
指切りの感触いまも忘れない
穏やかな口調でじわり責めてくる
坦坦と暮せる日日に感謝する
思い遣る人の心を子等に説く

大阪市　平嶋美智子

晩弱く朝はとっても達者です
目ざめてもお日さん起きてから起きる
誰も知る易しい言葉探してる
百歳体操習い腰痛ひきおこす
タフな米寿とあっちこっちの会で会う

大阪市　熊代菜月

気の合った相手に合わす旅しおり
日向ぼこ米寿の母の老い上手
くいだおれ太郎は今も愛想よし
パラリンへ夢をつないだ車イス
紫陽花に慰められたウツの朝

大阪市　榎本舞夢

お人好し御節介して損してる
お誘いも無いけど電話待っている
お月様両手にすくい露天風呂
願い事叶えられそう青い空
今までの自分と違う明日を行く

大阪市　坂　裕之

物言わず配慮の出来るでかいやつ
前へ行く気力蓄えチャンス待つ
損得を言ってるうちはまだ青い
ここ一番勝負強さが足りません
待つよりは攻めて負けても悔いは無い

大阪市　奥村五月

インフルと言えば休暇はすぐ取れる
今日だけはもう一杯と年金日
朝食はバナナと決めて妻寝てる
雑魚の群れ生きの良いのも混じってる
鉛筆を握ればできぬ五七五

大阪市　小糸昭子

女とは時には天使時に夜叉
私にはその他大勢組似合う
猫の方が良く知っている好きな人
何もかも腹に飲み込む度量欲し
かたつむりも亀もゆっくり完走し

大阪市　川原章久

連れ合いが無いのか鳩が鳴いている
気晴しはデパ地下へ行きつまみ食い
追い風に急かれ出て行く医者通い
まだ言える家族全部の誕生日
物音にすぐ目をさます妻認知

大阪市　岩崎玲子

お手本は肩の凝らない友の笑み
晩学に目覚め余生で足るかしら
向い風強く感じる更年期
病む心チェンジ求めて空仰ぐ
晩酌で雑念洗い流す妻

大阪市　澤田定子

今日一日無事を祈って家を出る
熟睡が加齢と共に遠ざかる
物語実らぬ恋にひきこまれ
来年は多く咲いてと枝を切る
中国の放映日本の医療感謝する

大阪市　中村叡子

父さんに供えお下がり食べ肥り
デイサービス優しくされて孤独なり
あちこちに忘れぬためのメモを貼る
姑さんの下さる品は先ず期限
紫陽花が世話が足りぬと色悪し

終戦日静かに思いめぐらさん
染め忘れ妻の白髪に言葉のむ
川雑を繰って先人峰高し
積んどくの本がつぶやく夢の中
顧りみてよくぞよくぞの長い道

大阪市　川端一歩

梅雨寒の憂さ払いたく美容院
わだかまり解けて紫陽花雨に映え
雨の中犬には犬の用があり
美の一字心に飾り夢を追う
長寿への夢ひたすらに徳を積む

大阪市　中村れんげ

身の内に忍の一字を秘めている
仁王さん笑わす手立てないやろか
健康で幸せですと言う笑顔
返答に困った時の苦笑い
京みやげ千枚漬のあの白さ

大阪市　津村志華子

恥じらいを少しのこして年重ね
愚痴こぼし合うのに集うティータイム
いい人で涙脆くて頼みよい
予期しないまさかの火の粉ふりかかる
悔いのない一日でした手を合わす

大阪市　西川更紗

平熱になってギャングに戻る孫
めっきりと酒量の減った父の背な
念入りにブラシをかける子の晴れ着
台風になるかも知れぬ女文字
山門の前までバスで行く遍路

大阪市　大川桃花

漢方薬自家栽培をさすネット
健康にうるさい母のシソジュース
温泉の効用調べゆるむ腰
ニガウリのつると元気を競う朝
我れ勝ちに蕾ふくらすミニのバラ

大阪市　津守なぎさ

人前は関白として立てられる
温室のいちご夜露を恋しがり
子の寝顔みれば今宵も切り出せず
履歴書の書き方ばかり上手くなり
ピッチャーのモーション盗む技に長け

大阪市　伏見雅明

過去の嘘その上に積む今日の嘘
負け犬の尻尾に青いリボンつけ
波風を立てて世間の目を集め
ドラム叩く青春の音すばらしい
万札かそうでないかはすぐ分かる

大阪市　岩崎公誠

大阪市　近藤　正

他人のこと非難するより身を恥じる
生きてます鼓動が強く訴える
イージス艦海賊退治には不向き
やがて古希やっと年寄りくさくなり
彬忌を首長うして百日紅

大阪市　原田すみ子

あの時になぜそうしたかわからない
わからぬ事わからぬままで多分逝く
ライバルを祝いながらも湧く闘志
自給率低く水買う国に住む
水くさい話しがちの義理の仲

大阪市　森田明子

紫陽花に恋して雨が降りやまぬ
コーヒーを飲みつつ見てる雨は好き
雨上がり銀色の月一人占め
キリギリスきみは歌っていればよい
法律がいつも後から追いかける

大阪市　野田栄呼

亡き母の顔が映っている鏡
百均にいそいそ無駄を買わされる
ちょうつがい弛んで愚痴が多くなり
洒落っ気はまだまだあって元気です
地場産が良くて賑わう道の駅

大阪市　升成好

演技賞さしあげましょう笑い皺
都合いい思い違いは笑っとく
身の程を知った歩幅で転ばない
狭い庭なのに何でも植えたがり
下馬評の通りに馬は走らない

大阪市　榎本日の出

山ほどの洗濯すめばすぐおやつ
丁寧語やめた頃から親友に
極楽へ行けば退屈続きそう
お互いに代りがないと庇い合う
ラストオーダありませんかと聞きにくる

大阪市　井丸昌紀

横縞に変えたらどうやタイガース
頬を打ち頬より疼く私の手
薄いけど頑張っている僕の髪
ダイヤだと信じ毎日磨いてた
誰にも内緒噂はすぐに伝わった

大阪市　小泉ひさ乃

花束になり華やかな手で抱かれ
何事もこだわり軽く吹き流し
メリーウィドー独りが良いと趣味多彩
未知の明日あるからこの世面白い
喜寿いまだ悟り切れない胃の痛み

大阪市　田浦　實

お祈りにめっきり感謝増えました
GMも諸行無常の風を受け
兵どもが仲良く眠る奥の院
名人も客の拍手に育てられ
職人技厳しい客に磨かれる

大阪市　江島谷　勝弘

コーヒーの好みはいつもアメリカン
コーヒーを飲めばヒントが湧いてくる
コーヒーは体に良いと聞いている
コーヒー通マイカップ置くなじみ店
コーヒーは静かな店で一人飲む

大阪市　松尾　柳右子

富士山の額が見ている四畳半
古写真なつかしく見て時忘れ
ワクワクと月下美人の咲く夜待つ
自販機の前で迷うも齢のせい
万引きに主婦多いとは情けない

大阪狭山市　矢野　梓

梅雨明けの空へやること多すぎる
ハーブ茶を飲んでお脳を休ませる
噛み合わぬ話早目に切り上げる
騙される方がいいわとやせ我慢
通夜帰り身辺整理せかされる

和泉市　横山　捷也

坪庭に一本植えたナスの味
高笑いしてる男が軽く見え
我が道を行くと定めた無精髭
遠吠えで終る赤提灯の愚痴
一隅を照らす教師の目の温さ

和泉市　西岡　洛酔

無職でも一日無事に暮れました
生きてます明日の希望へ予定組み
嬉しい日靴も一緒に光ってる
正直の心で進む青い空
サスペンス好きなテレビを凝視する

泉佐野市　山本　蛙城

目が痒いだけだと涙拭く男
このサイン何だったのか古日記
幟旗立って力士が腕鳴らす
選挙前あーまい水はこっちだと
つけ黒子鏡と遊ぶ小半日

茨木市　藤井　正雄

母の日はくにの訛りで母へテレ
究極の誤算は妻に背かれる
歳時記の風に答える祖母の庭
納涼船親指小指湾めぐり
干し魚美味いと思う昼の酒

池田市　栗田久子

満月の笑みをわたしがひとりじめ
ストレスが多いのかしらよくしゃべる
食欲をもとに戻した秋の風
とりたてのトマトかぶれば陽の匂い
燃えあがる情念土手のまんじゅしゃげ

交野市　山川日出子

天才か金ピアニスト辻井君
崖の上ポニョのファンの多いこと
瀬戸内海江田島辺で金虎魚（おこぜ）
手の音で主人が分る池の鯉
午前五時なつうぐいすの交野山

交野市　森本弘風

妻の手も布団も邪魔な熱帯夜
病床の友の手紙は寂しすぎ
どことなく昔偲ばす青テント
中央が地方の乱にゆれている
はげ具合亡父に似て来たＤＮＡ

河内長野市　坂上淳司

廃線の駅舎で虫のコンサート（旧出雲大社駅）
廃線の豪華な駅舎抜ける風
無人駅凄い桜のお出迎え
御国自慢を天こ盛りした道の駅
地球炎上　近未来から来たメール

河内長野市　黒岩靖博

乗車位置ぴたり静かに止める技
ノーベル賞英語拒否した日本人
老いの恋がらり変身若作り
恋の路光源氏にかなわない
廃墟あとメロン産地に衣替え

河内長野市　水谷正子

父さんに息子供える初西瓜
息子の田茄子も胡瓜も草の中
詰腹を切らされてから運がつく
八十の心八十路でやっと知り
丑の年まだまだ荒れる気配する

河内長野市　村上直樹

菜園の初夏を千切って手巻き寿司
山の宿河鹿に惚れて酌む地酒
閻魔にはやっぱりゼニの鼻薬
口だけは達者ですのと苦笑い
花柄の傘でうきうき雨の中

河内長野市　井上喜酔

治すより病気が同居する暮らし
戦中の昭和ときどき夢に立ち
紫陽花がほっと一息寺の雨
隠しても図星で妻は嘘見抜く
病院の味が不満な舌の先

河内長野市　植村喜代

目に青葉岩湧山は霞んでる
もしかして私の歳はほんとかな
弱り目に祟り目なのか歯が抜けた
ストレスに速効薬はないと医者
早寝してテレビ勝手に喋ってた

岸和田市　井伊東吉

幸不幸後期高齢仲間入り
挨拶に困る医師との久し振り
入退院明暗分ける大荷物
蒸し暑い日の血流は澱んでる
バス待ちに古本漁るターミナル

岸和田市　原　さよ子

病夫哀し妻に大きな子にされる
病室へ顔見せに寄る孫を待つ
バラ見頃妻の気前のよい鋏
お互いに気兼ねのいらん泉州弁
風船をちっちゃな手から風攫う

岸和田市　岩佐ダン吉

のろのろの歩み一点しかと見て
追うたびに夢ちょっぴりと近くなる
簡単にゼロに還れぬわけがある
一ミリの前進だってよしとする
結果論あなたの声がでかすぎる

岸和田市　雪本珠子

曲がり角自分の殻を脱ぎ捨てる
顔見れば別れの言葉迷いだす
居心地の良い場所猫にキープされ
喋り過ぎ空しさだけが残ってる
シャボン玉ロマン求めて風に乗る

岸和田市　堤　楢代

時惜しむ指先いつも動いてる
歌姫になったつもりの喫茶店
真夜中にふと思いつき探しもの
眠るのがだんだん早くなってきた
現役でありたい気持まだあるわ

岸和田市　森元ふみよ

まあいいか忘れる事も人生さ
薬局で弁当お茶も品揃え
コンビニで良薬どっと売る予定
脳鈍化メカの機嫌をまた損ね
省エネと付ければすぐに売切れる

岸和田市　土橋房枝

すだれかけ気合いを入れて夏を待つ
衣替え少女大人の仲間入り
浴衣着て彼と蛍に逢いに行く
入道雲に乗って行きたい亡母のそば
梅雨寒に片づけられぬ暖房器

岸和田市　林　力子

遠い日のシネマは今も胸に住む
校庭に幕張り巡らせて見たシネマ
放水のしぶきの中に虹の橋
賞味期限切れて権威も地におちる
腹たてて投げりゃ帰らぬブーメラン

岸和田市　米富　淳風

雨しとど庭の草木が大はしゃぎ
歩く背をホケキョホケキョと追い立てる
電柱の影さえ嬉し夏真昼
あれやこれ老いの荷物が重くなり
住む家も人も傷んでまいります

堺市　源田　八千代

めでたさも半分ほどの誕生日
嫁からの期待膨らむプレゼント
メーカーの応援をするエコプラン
一病を身に受け入れて元気です
塾通いとクラブで帰省阻まれる

堺市　齋藤　さくら

自民よりましなお手並見たいもの
会社まだつぶれぬだけでありがたい
青い鳥飛び跳ねている孫の守り
皮下脂肪取れる体操勧められ
イボイボのついた胡瓜を丸かじり

堺市　村上　玄也

気分屋で挨拶したりせなんだり
取り敢えず薬出しときますと医者
言い切って引っ込みつかぬこととなる
女房も近頃探し物してる
他人様の前は優しくする女房

堺市　近藤　豊子

バケツいっぱい水くんできてさあ花火
天の川打上げ花火へあらわれず
まもり来し戦後の平和宝もの
ポケットにノウハウためて平和維持
天気予報エンデバーを足止めす

堺市　大久保　のん子

意地悪をされてるようなむし暑さ
志繋ぐ一歩が明日にある
ぼけぬよう脳にしごきをかけてやる
日本人日の出日の入りみんな賞で
災害は地球が生きているしるし

堺市　柿花　和夫

買わないと決めて見ているテレショップ
映倫に鋏借りたいワイドショー
奥の間に通されてから逃げ出せず
とりあえず大の字に寝て朝を待つ
魚には済まんと思うルアー釣り

堺市　矢倉五月

どう見ても生命線は長寿らし
この歌を聞くと十九の春になる
枕の下で今日がゆっくり流れ行く
無理しない程度で嬉し親孝行
スランプもあるよ落ち込まないで行こ

堺市　西村りつえ

一味に真似の出来ない暖簾かけ
辞退しつつ欲な両手が待つ土産
サンダルにときめきすぎて足捻挫
プールサイド若き日思うギャルの胸
味よりも可愛さで売るサクランボ

堺市　和田つづや

満たされて日々の日記が長くなる
酒たばこ止めて情緒が不安定
多チャンネルでも選ぶのは時代劇
ありがとうごめんで丸く生きている
正論はときにその場を重くする

堺市　奥時雄

象形でなくて良かった百足の字
薄型と言ってもたためないテレビ
ふるさとが映ってへばりつくテレビ
がらがらと宵の口から雨戸閉め
都会地を出ようとしない青テント

堺市　荻野像山

正直は酒を飲んだら赤くなり
下水道敷かれて小溝干からびる
割り勘で飲むと徳利よう転ぶ
席開けているのに掛けぬ高齢者
髪刈るといっぺんに老け込む頭

四條畷市　吉岡修

よくもまあ火種探してくる国だ
甘い声ほいほい返事してしまう
傘の柄でてるてる坊主処刑する
バーゲンの元の正札面子なし
イカ焼きの生い立ちにふと疑念わく

吹田市　瀬戸まさよ

あり過ぎて源氏解説迷います
医療での検査数値は虎の巻
観客も着こなし上手舞踊会
封筒も便箋も筆無地の和紙
鰻重の今昔語る祖父の酒

吹田市　野下之男

ミサイルは玩具じゃないよ北の国
敵失で加点喜ぶ永田町
鏡にはほんとの年を教えない
ゆっくりと幸せ紡ぐ観覧車
女房がうまく仕込んだ伝書鳩

吹田市　木下敏子

あたたかい癖のある字の見舞状
この齢でまた新しい絵筆持つ
雑草を抜いて藪蚊に攻められる
風向きを読んでたんぽぽ飛んでゆき
今朝もまた自家菜園のモロヘイヤ

吹田市　穴吹尚士

帰省子と枕並べて語り合う
人前はおしどりのよう演技する
金貸した日からぴたっと来なくなり
水割りを呷って愚痴を流し込む
水茎麗しく付けの請求書

吹田市　須磨活恵

躓いた石に未熟を諭される
逆らわず風になびいて葦になる
矢も楯も捨てると優しい風が吹く
腕によりかけておいしく夏野菜
夏バテにゴーヤの力借りましょう

吹田市　大谷篤子

食べて寝てあとは痛みと闘病記
パンジーの色とりどりの小さい庭
主治医にはつい合掌をしてしまう
病室に悪友が来てほっとする
喜寿近しまだ頑張りの顔の艶

吹田市　太田昭

若芽どき女の嘘が加速する
知能線の薄いところに俺が居る
遅速でも慌てて老いることはない
ケセラセラいつかはゼロに戻される
揉め出すと誰かが酒を提げてくる

高石市　浅野房子

外来で会う約束のナウイ方
間違いで済まぬ死んだと言う噂
虎ファンよ悔しくないか一点差
身内より心やさしい他人さま
テキパキとは出来ぬだらだら日が暮れる

高槻市　井上照子

検査入院する度目方減っている
絶食へやけに食事の匂いする
粥また粥箸で米粒追いかける
進歩した医療で生きる生かされる
道徳の教育浅い小　中　高

高槻市　富田美義

念のため聞いた私が阿呆やった
金出して肩凝る料理食べに行く
移植したい個所が色々ございます
文句無い恐れ多くも妻の味
炎抱く無口のおんな恐く見え

高槻市　乙倉武史

梅雨明けを待てず初蝉姦しい
無為無策不毛政治にそっぽ向く
向い風多数決には逆らえず
汗知らぬ世襲議員の頼りなさ
子燕を連れてまたネと南帰行

高槻市　峯村勲弘

ありがとう交わす言葉に癒される
深いわけありそう眉間しわ三本
小肥りで良いと言われてほっとする
締め上げて泳いで見事世界新
日本語の看板増えた大リーグ

高槻市　杉本義昭

生きている明日の空が好きだから
一番でなくとも前を見て歩く
言い過ぎて悔やむ動悸が音立てる
にくめないあいつはほんに象のよう
ポケットに忘れたチョコが溶けている

高槻市　生田義一

四面楚歌麻生総理よ何処へ行く
やんちゃ知事そろそろボロを出し始め
六月も借金増やし虎沈む
お互いに相槌うって和を保ち
誉め過ぎの弔辞に遺影にが笑い

高槻市　佐甲昭二

今日もまだ首のつながる背広着る
まだ何を掴むつもりか辞書を買う
風向きが変わり重たい荷を背負う
神様のいたずらなのか蹴つまずく
道草をして退屈を食べている

高槻市　安田忠子

ほっとして夕日に祈る旅の宿
冥土まで届けと祈る石の鐘（四国二十四番札所）
いじめには遭わぬようにと祈ってる
放浪記金字塔立て栄誉賞
ケセラセラ成り行きまかせ自然主義

高槻市　執行稲子

悔しさはネットタッチの小さいミス
堪忍ももう限界と投げる匙
何気ないスナップ素敵な友の逝く
細々も愛の雫と受け止める
くくくっくぎっくり腰に脅される

高槻市　左右田泰雄

わだかまり溶かしてくれた思いやり
デジカメがやたらスナップ撮りたがる
すっきりとピンクのシャツで若返り
もしもしと声かけられた落し物
おじいさんいくつと言われ八十五

慈雨に感謝庭がいきいきしています
紫陽花が好き雨が好き蝸牛
梅雨晴れ間そっと心も干しました
いい出合いきそうな予感昼の虹
はしゃぎ過ぎる私がはまる自己嫌悪

豊中市　松尾美智代

河溢れ過去も未来も押しながす
仲良しが何故か見下すような顔
エンディングノート書く事何もない
見返してやりたい奴はもうあの世
さあ空へ昇るつもりの水たまり

豊中市　安藤寿美子

全身のエネルギー込め赤子泣く
鵜になって妻の操るひもの先
切株に腰をおろして聞く木霊
ジーンズの破れにのぞく若い風
夏の来たことを素足が嬉しがる

豊中市　水野黒兎

古本屋の近くでいつも待ち合せ
意識していないと腰が曲ってる
お歳召した散髪屋さん髭も剃り
ささやかなお返しホッペへのキッス
人類を地球がじわじわと裁く

豊中市　江見見清

産まれたとき死という手形振り出され
誤算劇僕の人生こんなもの
老いも死にざまもその時はそのとき
白か黒かグレーも生きる手段かも
胸底でころがせている謎ひとつ

富田林市　片岡智恵子

言い訳へ図星指されて貝になる
安請合いしては困った後始末
左遷地の土の香りを嗅ぐ素足
夢ばかり追い現実に叩かれる
頼まれた留守にお酒がついていた

富田林市　大橋鐘造

小難で守られてます墓参り
あんずの実顔を見せぬは蜂の所為
贅沢にサクランボジャム煮上った
華道展無慈悲な音の花鋏
裏庭に住みついたらし母仔猫

寝屋川市　森田麗

少しだけ年寄りぶって生きている
その通りなんですヤボな生き方は
カタカナのヤボです救いようがない
早起きの秘訣カーテン開けておく
文月の月は寡黙がよく似合う

寝屋川市　籠島恵子

誘われて嬉しく重い腰あげる
足手まといにならぬよう気を付ける
闇を抜け出せずなお闇深くする
淋しさに負けずに老いと手をつなぐ
混迷の永田町見て国憂う

寝屋川市　冨山　ルイ子

私が止まると止まる迷い犬
何ごとぞヘリ五機爆音轟かせ
泥んこに屈託もない田植えの子
打ち水へ心太などいかがです
次々と夕餉に足りる茄子を捥ぐ

寝屋川市　森　茜

ポイントが3倍だから無駄も買い
まだ生きる未練があって舌を噛み
冷蔵庫一杯詰めて病んでいる
介護保険無言で落ちて礼もない
娘が二人私の古着捨てに来る

寝屋川市　太田　とし子

お見舞いで揃うた長女次女三女
心配の数を分け合う姉妹
苦労した姉の足腰マッサージ
里芋の皮から育つド根性
平均をだんだん下る骨密度

寝屋川市　平松　かすみ

バースデー後期高齢ほろ苦し
建て前と本音の笑顔使いわけ
汚れ物宅急便で息子の帰省
本筋を逸れた話が面白い
移ろいの世に定位置の玉子焼

羽曳野市　吉川　寿美

九か国十四の港めぐる旅
ゆらゆらとひょうたん島へテープ切る
みんな齢忘れて楽園へ向かう
マリンブルーの中に島あり上陸日
タロファーへ返ってきたはコンニチハ

羽曳野市　徳山　みつこ

カタログを開いて夢を遊ばせる
汗知らぬ金はうきうき遊び好き
炎天の蟻は過労死恐れない
丑の日へ一人暮しの上鰻
呑み込んだ言葉で騒ぐ腹の虫

羽曳野市　安芸田　泰子

うすうすは知っていたから距離を置き
都市砂漠不況風吹く青テント
主流派に常に身を置く風見鶏
インフルが隣の家を村八分
残金が給付金だけ増えている

羽曳野市　永田　章司

羽曳野市　酒井一壺

父の死が転機となった子の決意
面構え蛙はじっと睨んでる
ゼロ発見十進法が完成す
せつなくて解けぬ思いを抱いて生き
解けそうでなかなか解けぬわだかまり

羽曳野市　福田悦子

もったいない袖を引っぱるリサイクル
追伸に母の本音が見え隠れ
ど忘れて誰やってんなあの人は
来年も戻っておいで蝉しぐれ
満月にどうしているかかぐや姫

東大阪市　佐々木満作

終戦日あの日も食べたかき氷
潮騒の音枕辺に蚊帳の中
甲子園入道雲が覗き込み
出る前の電話みじかく切り上げる
大勢に押されしぶしぶ手を挙げる

東大阪市　米田水昇

花が好きおしゃれが好きでまだ女
起き上がる気力があってまた転ぶ
まごころで遠くの人も近くなる
生きる肌化粧したての朝が好き
足萎えて近い所も遠くなる

東大阪市　笠井欣子

半分こ命大事に共白髪
いらぬ物捨てよと外野やかましい
昼時のステーキハウス姥ざかり
齧られた脛に毎晩貼る湿布
たわいない長い会話にしびれ切れ

東大阪市　久米奈良子

真っ白な親切受けて梅雨あける
善いことをした日の鏡光ってる
ひざ開くクセ恥ずかしく言いきかす
幼らに文字を教えし若き日よ
さんさんと朝日を受ける幸があり

東大阪市　北村賢子

夕焼けこ焼けみんなお家へ帰りましょ
わだかまりスッキリ消してくれた虹
待ってへん今来たとこと思いやり
財布から諭吉瞬くまに消える
昭和史に消すに消せない日の記憶

枚方市　二宮紫鳳

梅雨晴れ間ぬって飛び出すウォーキング
ひまわりに今日の元気をもらう朝
白百合の香りを生けて友を待つ
朝顔が咲いて我が家に夏来たる
残りものエコと銘うつ妻の膳

枚方市　二宮山久

梅雨に入り蛙鳴かない住宅地
三十年つづいた趣味の大舞台
里山の涼しさ深緑のハイキング
右手病む梅雨に痺れがこたえます
老いはまだ早いせっせっと趣味多忙

枚方市　寺川弘一

好きだから湯豆腐我が家真夏でも
パソコンですらすら書ける知らない字
月曜日磨いた靴を履いて出る
ガラガラポンで景品取ったことがない
弔電は本人宛に送りたい

藤井寺市　伊藤アヤ子

ひと振りの胡椒でくしゃみ止まらない
やいやいと催促取りに来てくれぬ
寒がりの夫と夏だけ離婚する
ふるさとのソーメン昼のおたのしみ
ミニトマト可愛がられて赤くなる

藤井寺市　鈴木いさお

八月忌兄は二十歳のまま老いず
産道をくぐるとそこは娑婆だった
値切るのはやっぱり妻の方が上
ケータイで催促された落し紙
検査入院で只今充電中

藤井寺市　津田シルク

蝶が舞う窓辺の花に感謝して
酒盛りで耐えてる下戸の箸枕
長不況お化けも屋敷追い出され
ごちそうさまと青虫がよく肥り
鈍行で認知の駅も近くなり

藤井寺市　増井ヨシ枝

何を言うても笑いをとって癒される
血液検査異常がなくて病んでいる
ゴミぽんと捨てて地球を悲しませ
まだ愛があるのかそっと庇ってる
ひまわりの明るさもらう古希の朝

藤井寺市　俣野登志子

老いたかな阿吽の呼吸乱れがち
目に夢中足閉じなさい娘さん
父親が娘の良縁に拗ねている
作るより観る目ばかりが上手くなり
孫の熱下がった知らせほっとする

藤井寺市　若松雅枝

普段着に着替えて肩の凝りが取れ
ロコトレに励み膝痛乗り超える
買ったけど私に合わぬ赤い服
母が待つ改札口に虫すだく
絆とや偶の出合いも温かい

いじめてる人は淋しい人だろう
いじめには強いが優しさには弱い
怒鳴ったら偉いと思っているらしい
耳が悪いのか挨拶を無視される
愛のある言葉ストンと胸に落ち

箕面市　出口セツ子

熱帯夜釜茹で地獄試される
怪談後鏡見るのはやめにする
飛蚊症本物の蚊を取り逃す
カキ氷脳天までも冷えてくる
ガタキタと雨戸が風に悲鳴あげ

箕面市　広島巴子

長命が是か否か迷う福祉国
保証なし命大事と歩くだけ
少子国遠慮しながら生きてます
耳遠し漏らすまいとて気をつかい
見も知らぬ美人挨拶山の道

守口市　井上桂作

暑い夏一句捻って乗り切ろう
贅沢を敵に回して生きている
ほめられて鬱少しだけ軽くなる
もう今はとなりの芝生気にしない
度忘れと言い訳できる内はいい

八尾市　村上ミツ子

七十なお転ばぬ先の杖作り
宇治金にスキムミルクは不純だな
心技体研いでメジャーの頂点へ
為政者は抜け道作りにも長ける
優しかった姉もまさかの認知症

八尾市　笹倉ひろし

ドアホンの人を選んで居留守する
意志疎通メールで絵文字嫁姑
カラオケに点数ストレス溜まりそう
難聴で豪雨も知らず朝のパン
一途さも失せたが絵筆離せない

八尾市　高杉千歩

なま温い風は魔物をつれてくる
辛口の友はなるべく避けておく
異性は好きましてイケメンなおさらに
ノーと言えばすべてがゼロになる絆
あのコンビ女性の方が強そうだ

八尾市　宮﨑シマ子

独り言何をするにも増えている
命日に一緒に食べる心太
素うどんに七味振りかけ梅雨最中
よそ目には気楽な余生菊作り
打ち水にほっと息するアスファルト

八尾市　生嶋ますみ

草食の男がたむろする日本
山頭火何を求めて風の中
会場に着くまで祝辞暗記する
受けて立つ大横綱が見当らず
ゆとりもつ歩みで老いをつまずかず

大阪府　籾山隆盛

まだ気力ちょっと残して好奇心
ときめきへ電池交換してみよう
シンプルな暮らしにも出るゴミ数多
あちこちの綻び繕いながら生き
橋に泣き今千円に泣くフェリー

大阪府　米澤俶子

マニフェストだんだん色が褪せて来た
一言がポジション上げた正念場
自分史に少しスパイス掛けておく
カタツムリシルクロードを登り切る
ペシミスト追悼抄を読み返す

大阪府　桑田ゆきの

ゆきすぎたジョークに笑えないときも
人生の切りあげ時をどうしよう
メールですむことだったのに長電話
おしゃべりがご馳走でしたクラス会
不注意の躓き自分に腹を立て

神戸市　山口美穂

晴耕雨読思うほどには続かない
冷や水と言われても恋あきらめぬ
ナンバツウーボスのつまずき待っている
噛み合わぬ科白で暮れた夫婦劇
つまずいた数をライバル知っている

神戸市　伊勢田毅

子を生んだ力を甘くみた誤算
ちょっとずつ我慢し合っていい夫婦
いい笑顔弾むコートのクルム伊達
そして今しっかりと打つ句読点
逆ギレの輪ゴムが飛んでくる誤算

神戸市　両川無限

花柄の傘で楽しむ若葉道
腐葉土の恵み思わず森を伐る
アマゾンのCO2まで金に代え
貧しさの蛍雪時代共に耐え
傘置き場別名傘の取替え場

神戸市　木村貴代子

子どもより大人よろこぶ蛍狩り
見られてる意識おんなを輝かす
全盲のピアノの音色胸深く
ケータイが圏外示す不安な夜
海から子らが消えプールは芋の子

神戸市　田中章子

神戸市　山口光久

脇道にそれて生き方幅ができ
路地裏は何でも話し合えるとこ
人生の門出を祝う一番茶
呆けてない証しか迷うことばかり
四苦八苦している今が至福かも

相生市　中塚礎石

待つことを教えてくれた花時計
ある時は凶器にもなる多数決
風に耐え風になびいた今日の位置
言い訳がやがて偽証をもくろみる
肩書が取れて今宵は酔える酒

芦屋市　黒田能子

にこにこの笑顔作戦だったとは
背のびせず私はわたしらしくする
暇に見えいつもあれこれ頼まれる
美味しそうに青汁を飲むコマーシャル
背のびしてひっくり返りそうになる

尼崎市　軸丸勝巳

解散がないと長いね丸四年
給付金選挙の頃はもう忘れ
白内障手術で世界若返る
天引きにお前もきたか市民税
新市名どこやと探す古い地図

尼崎市　長浜美籠

この齢仮の話は止めにする
聞き馴れた声が安らぎくれました
四歳児もはや男の自我を見る
したたかな首が並んだ終電車
過ぎたこと口には出さぬ花柘榴

伊丹市　山崎君子

胡蝶蘭最後を飾る残り花
朝ぐもを逃して何かほっとして
わらび餅こんなに美味な病みあがり
インフルエンザまだまだ去らぬ恐い町
娘に貰う老春楽し船の旅

川西市　米原雪子

梅雨晴れ間リズムに乗って庭仕事
散歩道目礼だけの顔なじみ
気前よく引き受け後は四苦八苦
偶然の幸バス停で友に会え
久し振り会えばまたまた減らず口

川西市　西内朋月

弱くても満員になる甲子園
櫛の歯が零れるようにくる訃報
往復のいびきで眠れない雑魚寝
風を呼ぶ風鈴ひとつぶら下げる
ネオン街ゆらゆら揺れている水母

加西市　金川宣子

短冊に五十年目もよろしくと
斜めから見ると案外男前
政界がジョークでなくて大騒ぎ
ラブレター夫の居ぬ間にシュレッダー
エステティシャン寝息を誘う術を待つ

三田市　上垣キヨミ

その後が気になり死ねぬ遺言書
飽きるほど聞いた戦禍を孫に説く
毒舌の母も血圧医者通い
めいわくにならないように薬飲む
終の旅ドンチャン騒ぎして欲しい

三田市　堀正和

ふるさとは蛍も舞うし墓もある
ウグイスが上手に鳴くぞ梅雨晴れ間
ニュータウン故郷にした二十年
世襲とや北も日本も騒がしい
見納めと日蝕ショーのボランティア

三田市　臼井二英

ドクターは言わないけれどタバコ止め
半世紀吸ったタバコを今やめる
タバコやめ精神力をタメしてる
カミさんに押しつけられたニコレット
禁煙し生きる楽しみ半減す

三田市　福田好文

賽銭は五円と決めて半世紀
自分史に孝行の字が見当らぬ
香典を断る葬儀にほっとする
慣らされて母より妻の味が好き
妻の鼻信じて食べる期限切れ

三田市　石原歳子

腰痛めヒールの靴と縁が切れ
ストレスが溜まるとガラス磨いてる
ほがらかに暮らして姑百歳で逝き
友からの胡瓜さくさく夏の音
両隣留守で会話が声高に

三田市　久保田千代

居てくれるだけで何とも味がある
マンガから世相伝える日刊紙
躊躇して回転ドアに押し出され
隠してる本音よそよそしい電話
弾みぐせ直そう誤字も多すぎる

西宮市　秋元てる

浮かぬ顔ほどけと猫が気を遣い
雨の日には雨を楽しむ子等のよに
二葉より芳ばし双子に夢二倍
ひたすらに育ててまたも送り出す
あの後がミスを晒して座が丸い

西宮市　藤本　直

年相応と納得出来る顔になり
シワとシミこれが後期の顔かいな
お日様と共に寝起きのエコ時代
すれ違いなぜか手を振る遊覧船
水栓のパッキン替えてしたり顔

西宮市　井上松煙

公園に私の花が咲いている
散歩道女性に会って邪魔な杖
商才に長けた古蹟のおぞましく
野球帽若やいでいる空元気
真夜中にコップの水をぐっと飲み

西宮市　山本義子

うさぎと亀まだ決着はついてない
邪馬台国ああだこうだを楽しんで
六法が色落ちします世の乱れ
番外に生きて行く末星まかせ
年金の恵みで生きるはてはてな

西宮市　亀岡哲子

父の日もなかった頃の親不孝
長からず短かからずの立話
憧れの巴里を心で組み立てる
楽しんでサラリーマンをする次男
当確へ散歩がてらの投票所

西脇市　七反田順子

梅雨晴間わが菜園に豆たわわ
裸婦像に愛を育む笑みがある
冷やっこ一品添えて夏を出す
端端に捻子の弛みが来る不安
あじさいが色濃く坂に添うて咲き

姫路市　古川奮水

雨続き脳波崩れる認知症
羨望の寝言を聞いた夜明けまえ
アングルを通すと見えてきた構図
紅付きの名刺無口になった居間
秋祭り準備始める年の功

奈良市　天正千梢

影もない透明人間だったのか
行きつ戻りつ揺れながらひと日暮れ
渇いたよレモンひと切れ口に入れ
泣く事の知らない女こわくなり
リトマスは正しい答出してくれ

奈良市　米田恭昌

海ゆかば聞けば昭和が涙ぐむ
マネービル寡黙の父は尚無口
中流の外食と言う回る寿司
五周年記念祝う日光五月晴れ
奈良町の風童唄のせて来る

窮屈な服が促すダイエット
パワフルな熟女車中もかしましい
砂の上指でさよなら夏の恋
淋しさがぽたぽた漏れる飾りすぎ
蛍たちうつつの恋に乱舞する

生駒市　飛永ふりこ

座禅組む壁に本心さらけ出す
夏の恋煽るがごとく蝉しぐれ
皺刻む速度が早くなってくる
ひと許す少しおおきくなる器
人生の余白に悔いを残すまい

香芝市　大内朝子

父の花深い所で咲いている
忠魂碑の横を通って塾通い
痛いのを消すため痛いほど飲んだ
考えていたら取り残されちまう
糠床も半死半生妻のウツ

橿原市　居谷真理子

しがらみをゆるりと解く風の盆
誘いはコスモスなのか萩の寺
的を射た意見を多数決が潰す
雑念を解けば見えて来る悟り
にんげん百態喜怒哀楽の多面石

大和郡山市　坊農柳弘

耐えきれぬ痛みを強いる大不況
草萌えてすっかり風化古戦場
泣ききって再出発の靴をはく
手放した娘しっとり母になる
常識を破り気楽に生きている

奈良県　渡辺富子

ガラス越しのKISSなら貴方いいですか
方向音痴近くギネスへ載りそうだ
お昼までまだこ一時間腹空いた
直感でこれは振り込め電話口
甘言へ乗るわたくしとお思いか

和歌山市　田中みね

さざ波の浜辺に偲ぶ青春符
遠い道持ち味生かす知恵袋
生かされて亡夫と一緒の写経筆
旅先で温い情けの句に出合う
歳忘れ毎日作句して達者

和歌山市　松尾和香

探る目が斜めに胸を刺してくる
シュレッダー愛の伝言消去する
人情がふわり溢れている葉書
乗り越えて来た人生の隠し玉
カサブランカ刹那を刻む雨しきり

和歌山市　松原寿子

和歌山市　玉置当代

気付いたらかごめの友もいなくなる
予定通りに行かないことが多すぎる
真っ直ぐに伸びよと孫に期待する
きな臭い噂断ち切る蓋をする
上昇気流のチャンスを掴み妥協する

和歌山市　岩本美智子

ウィンワルツ聴きつつ茶粥すすってる
黒雲に干梅慌てふためけり
四肢しびれダルマ大師に笑われる
ひまわりを叩きつけては走る雨
夕立に追われ続けて山下る

和歌山市　堀畑靖子

年かさね妻の毒性強くなる
しょぼくれた世ですせめてもカンビール
どんぶらこユックリズムになる手足
今日もまたお互いのヘマ笑いあう
年下の夫でわりに使いよい

和歌山市　古久保和子

マヌカンの視線の先は夏の海
夕焼けを薩摩切り子の器に受ける
耳鳴りが時々母の周波数
通帳がいつも冷や汗かいている
糠床へエコポイントを溜めている

和歌山市　福本英子

空気も水もただで育った付けがくる
欲捨ててから友人が増えてきた
夜行性だから昼間によく迷う
永遠に核のスイッチオンはだめ
骨粗鬆取り替え部品ないらしい

和歌山市　喜田准一

どこまでもアナログ系で生きてます
輪の中に溶けて楽しくなる余生
隙もあり温みもあって人が寄る
金嵩の買物妻が取り仕切る
まあまあで丸く納まる喧嘩です

和歌山市　武本碧

ご先祖へ心も洗う花手桶
ミシュランの味より旨い母の皿（五つ星レストラン）
身を捨ててかぐやは月に名を残す
今少し鈍感力をきたえねば
未来へのたすきをつなぐ子が足りぬ

和歌山市　木本朱夏

こわれそうな男へおくる子守唄
無器用に父が楷書で歌うたう
神さまのジョーク不思議なものが降る
身の内の蛇を起こして逢いに行く
梅雨しとど着いた葉書に顔が無い

海南市　堂上泰女

田園の見られる国にある平和
恋人が出来て母さん疎まれる
才媛に息子の心奪われる
土曜日は甘えに嫁ぐ娘が帰る
列車待つ時間に息子から電話

鳥取市　福西茶子

何くそのルーツ辿れば貧富の差
腕枕川の字の犬専用に
整列をしてひまわりが最敬礼
体重を忘れて跳んだ水溜り
親の歳越えても重い躾糸

鳥取市　夏目一粋

真剣な愛は鋭く尖ってる
たしかなる愛は無言で見つめあう
ひと言で愛が憎しみへと変わる
どこからが愛というのかわからない
おだやかな愛はひっそり露となる

鳥取市　中宇地秀四

神棚で期限の過ぎた当りくじ
年金をなだめなだめて暮してる
生きているそして反省ばかりする
ああすれば良かったみんな済んだこと
気をつけろお巡りさんも人の子だ

鳥取市　鈴木公弘

わたくしに間違いないという目線
転ばないように走って出世せず
えん罪を生む横着な犬の群れ
銅像になれる政治家などいない
海岸に無政府主義のゴミが着く

鳥取市　春木圭一郎

楽しくて好きだと思うことをやる
今日よりも明日がよいとは限らない
目一杯早起き今日も本を読む
時々は今の幸せかみしめる
無駄なことといつか役立つこともある

鳥取市　武田帆雀

いいまんに芋を掘ったよ今日は雨
蒔かぬ種生えて我が世の赤紫蘇
筆頭に大口寄付といういじめ
ひとりで死ねばいいのにダブルプレー
携帯を切って穴場で飲んでいる

鳥取市　永原昌鼓

笑おうと泣こうと今日も二十四時
油断したツケがメタボにはね返る
君の背も丸くなったね影法師
人類の油断か地球温暖化
足腰が動く間は夢を見る

鳥取市　土橋睦子

古寺巡りラフなスタイル似合う街
電子機器私の脳を振り回す
残月に覗かれている裏の窓
研ぎ減った鎌も私も役終る
少しずつプライドも消え夜が更ける

鳥取市　土橋はるお

マスクして居ると別嬪台無しじゃ
住所不定の名刺になって淋しいな
柳腰ゆらゆらフラを踊ってる
西方の海に真っ赤な陽が沈む
新聞は読んできちんと畳んどく

鳥取市　山本益子

プライドを付けて堂々暮らす婆
大五郎君は我慢のお手本だ
日記帳から鶯笛が鳴る日々管理
ビール党山海珍味風味好い
ゴミ処理をロボットサムにまかせよう

鳥取市　宮脇道子

不況時に小鳥ラブラブ飛んでみせ
老いの道なす術もなく痛む足
驚いた傘寿の祝い贈られて
喜びも朝顔二つ咲いてくれ
朝顔の一寸法師花二つ

鳥取市　横田春名

それぞれに顔の違いを不思議がる
取り出した遠い思い出詫びばかり
やさしさを積木くずしで取り戻す
やさしさと仕事があれば老後凪ぐ
脚線美白髪紳士ちらり見る

鳥取市　奥谷彩子

いい笑顔武器に女を演じ切る
ポーカーフェイス内緒ないしょの決意秘め
初々しふっくら頬の娘が十五
想い出を両手一杯フルムーン
阿と吽でゆっくり登る喜寿の坂

鳥取市　有沢せつ子

発想の鈍り暑さのせいにする
作句する悩み生きがいかも知れず
ご近所の産声を聞くさわやかさ
遊ぶ日と決めたら急に出る元気
分譲のノボリはためく十年目

鳥取市　田村邦昭

威張れない鼻がだんだん低くなり
芸という真似ごとならば誰もする
余命だと愚痴をいわずにただ感謝
妻が言う宴会だけのカレンダー
豊作の秋も食べてるダイエット

鳥取市　西川和子

賄いを任されてから半世紀
私はあなたを護る賄い婦
ラーメンのあっさり味を好み出し
年金で賄う知恵を話し合う
賄いを助けてくれる自家野菜

鳥取市　池原天馬

五十回忌あとは土俗の神となる
山は青き故里の村荒れすぎた
ドブ板と国政選挙似てきたか
シンプルなくらし願うも趣味が増え
七夕も蛍も見ない里ぐらし

鳥取市　吉田弘子

年金の枠で賄う義理一つ
簡単に乗ってはくれぬ誉め殺し
実年齢と気分が未だ一致せず
暑い日は吹雪の頃をふと思う
順番の役だあっさり引き受ける

鳥取市　中村金祥

金魚鉢そちも暑いか藻だらけだ
ボランティアポチも散歩で缶拾う
生き方を岬に立って考える
節々が疼くでこぼこ道を行く
鳴砂もきっと泣いてる温暖化

鳥取市　平尾菜美

一人だち名刺まだまだ歩けません
人並みな葬式保険に賭けている
七十を過ぎても嫁と呼ばれてる
茶断ちする妻が禁酒のお手伝い
団塊がブームとやる気沸き起こす

鳥取市　岩崎みさ江

暗闇の先に燻る近未来
野の花がいちばん似合う侘住い
こんなにも自由でつらい独りぼち
道化師の主役へ今日も陽が昇る
欠けていく月は愚痴など零さない

鳥取市　太田幸枝

もう一度甘えてみたい亡夫の胸
胸襟を開いて本音話し合う
新郎のたくましい手で舟出する
披露宴フランス料理箸で食べ
金出して口は出さずに娘と旅に

倉吉市　野口節子

あれも毒これも悪いと生かされる
ちゃん付けで呼べる仲間がたんとある
学歴はあるが漢字には弱い
弱音など吐いてたまるか寡婦の意地
工夫してめかし込んでも枯尾花

理屈だけ先行すれば荷崩れる
吉か凶答の行方神が知る
即答の悔いが鳩尾行き来する
昼以上赤い太陽今落暉
暑い日は茶漬けサラサラお酢のもの

倉吉市　最上和枝

恋心失せれば女お終いだ
スキンケアだんだん大儀おんな老け
知事に就いて早や総裁を狙ってる
総理出ずも横綱は出た我が県だ
新型インフルまだまだ気いは緩めるな

倉吉市　猪川由美子

まっさらな朝の誕生祝いたい
気楽です一人の部屋でひとりごと
金もない文才もない見栄っ張り
腹いせの代償後悔先立たず
全没をよろこぶ友はほとけさま

倉吉市　山中康子

古傷に触れ冷や汗が背に走る
閑古鳥シャッター街の灯が消える
三人寄れば飲む食う笑う忙しない
雨上り滝の雄叫び山ゆする
盆踊り見ているだけはつまらない

倉吉市　山本玲子

若い日のブラウス似合わなくなった
脳外科で手術はダメと塗り薬
七夕のロマン遥かな日を憶う
剪定の鋏シャキシャキ茶を淹れる
農業をめざす若者いま欲しい

倉吉市　松木よしえ

恙なく卒寿迎えてお赤飯
笑顔ほど良薬はなし朝のお茶
健診の後の安堵の物忘れ
年毎に故郷の味を恋しがり
知らぬ間に傘寿を過ぎし誕生日

米子市　門脇晶子

左遷地で孤立無援のほたて貝
繋がれた絆解こうとしてる牡蠣
生き生きと背が伸びていく少年期
ダイエットDNAが許さない
燭守る母には幻が見える

米子市　政岡日枝子

梅雨しとど止むなくきゅうり伸びにのび
梅雨はげし折鶴らんの乱舞する
忘れ癖いざこざまでも忘れだす
携帯とペンと常備薬持参
子育てのカラスは非常線をはる

米子市　白根ふみ

米子市　青戸田鶴

東京を泳いで孫は太くなる
貝になった夫に言葉よっている
久し振りの友と出会ったティータイム
ラッキョパリパリ若いお客はえんりょせぬ
マイペース最後になっても走らない

米子市　野坂なみ

麻生迷走国会の揺れ止まず
スニーカー今日もハミング連れだって
阿古屋貝真珠そだてる誇りもつ
パスポート握れば乾き消えている
せっせと動きあとの余白はぼんやりと

鳥取県　竹信照彦

足元がすべり横転してしまい
転け方も色々死んだ人もある
骨折し妻に慰められている
ギブスして車は妻の横に乗る
四週間癒える目標遠く見る

鳥取県　石谷美恵子

知恵袋持ち寄り打つ手考える
借りものの知恵がエンストくり返す
流行のように離婚の軽いこと
チロチロと万円札へびろつくな
詰まりそうパイプ交換乞う五体

鳥取県　松川行男

ミサイルも暑さしのぎに日本海
渚から人の情けを知る鯨
年金を遣い果した夏の旅
真夏の影は僕と一緒に休みたい
町長にいつでも会える町が好き

鳥取県　北村稔

就職はきまらぬけれどあわてない
白髪が見事だなんていわないで
栓抜きのないビール瓶汗をかく
夕焼けの晩酌うまい明日は晴れ
あすはとる予定のトマト烏食う

鳥取県　盛田夢路

深緑の自転車ルルンよく弾む
咲き誇るフラワーロード遠回り
荒磯の潮風亡父の声がして
どう座り直して見ても痛む膝
わたしにも花丸あげる一つだけ

鳥取県　山本正光

それぞれの朝のパン食手間いらず
タイガース勝つと晩酌量が増え
ギブアップまだせぬ旨い酒がある
梵鐘の音浄らかな万福寺
葬列の尻尾で明日のわが身問う

鳥取県　深田倶久

O型で丑年生まれ誇り抱く
ふたりして築いた城を補修する
婆ちゃんがカボチャとしのいだ戦時中
戦友(とも)偲び六十四たびの香を焚く
ひまわりの育ち日記をせきたてる

松江市　安食友子

いらいらを負担にしてるダイエット
ノーサンキューまた同じ事くどくどと
喉びこが阻止してくれた葛藤よ
心底と裏腹に外は空梅雨
産声にニュー祖父組の豹変だ

松江市　津川紫晃

夫婦でも聞き返せない谷がある
街の角史跡ぽつんと風といる
転んだらすぐ起きようとする脳波
ときどきは奇跡信じて生きている
店じまい知らず客呼ぶ招き猫

松江市　三島淞丘

二人三脚ゴールがそこに見えてきた
きっぱりと突き放すのも親の愛
防戦になってボールが弾まない
王手飛車突かれてビール注ぎこぼす
指先の渦に真実暴かれる

松江市　小川注湖

棚卸し荷動きにぶい買いひかえ
焼きたてのふっくらパンは味がある
披講聞くとうとう披講終りけり
すれすれのルックにこの目泳ぎ出す
幻の女今でも前を飛ぶ

松江市　松本知恵子

宍道湖で遊べた頃の俊二の絵（園山俊二）
自分史に地団太踏んだ跡がある
朝顔を咲かせ清しい朝にする
雑踏の街でかすかに聞く晩鐘
きらきらの旬野菜買う夏の市

出雲市　多久和敬子

二人三脚ゴール直前もつれ出す
筋書きの無い人生を歩いてる
ふと漏れた溜息孫が消してくれ
響くまであなたの心ノックする
ぎりぎりでつかんだ運だ逃がさない

出雲市　小白金房子

呼びとめて収穫分ける朝の道
離農して戴く感謝白いめし
朝顔のつぼみへ起きる畑仕事
住み馴れて楽しさ届く娘のメール
鍬一丁朝の田まわり踏むペダル

出雲市　森　茂美

ゲートルを巻いた写真を見せられる
おだやかに監視カメラが見てござる
女房が首を振るから止めておく
父ちゃんの下手な芝居はすぐばれる
腹一ぱいみどりを食った腹が鳴る

出雲市　石倉　芙佐子

一言の出過ぎ女の浅はかさ
もう一度お逢いしたいと言いそびれ
女心はときに紫陽花色になる
これが私ここが吾が家と古写真
神様と同じ服で歌い舞い

出雲市　持田　多輝子

プライドと見栄に足元すくわれる
平凡な幸福秘密ない生活
腹芸がうまくて本音つかめない
いわしにも鯛に負けない自負がある
日本語で頑張っているモンゴル人

雲南市　毛利　幸

鐘の音が響いて平和告げている
久し振り心に響く話聞く
幻に惑わされてる迷い人
凜として一人芝居を演じ切る
大会の記録破られ明日がある

島根県　伊藤　寿美

太宰百年平積みにある斜陽買う
テポドン発射パールハーバー思い出す
年金を老いの突っ交い棒にする
消えてゆく記憶に鈴をつけておく
語部に六月がくる摩文仁丘

倉敷市　撰　喜子

浜に干す鯵の開きの目に詩情
一家安泰脇を支える妻いれば
十代の気分で話す喜寿の会
退院し戻る椅子ない不況風
叶うまで夢を見ている影法師

美作市　福原　悦子

ひっそりの恋だ余震が止らない
点滴のパイプで命つながれる
あの噂もまさか貴方が言ったとは
自画像に私の彩を描き足そう
人間が地球にあばよされそうだ

美作市　大石　あすなろ

そのことに触れるとわたし貝になる
厄介な境界線だまた揉める
うちうちの話他人は聞きたがる
身のうちのマグマ静める深呼吸
積ん読の棚が重いと苦情言う

切れすぎる鋏大事な枝を切り
イエスかノウ即座にノウと言う返事
若者の意見明快清涼剤
炊き出しにふれあう心派遣村
老若のふれあい地域活性化

真庭市　国米　きくゑ

土塊と戯れ今日も無事に暮れ
婆ちゃんは草取り名人に成った
朝顔とご対面してからコーヒ
花ざかり私の如露も踊ります
ネジ緩み身辺整理進まない

真庭市　福嶋　智恵子

第81回 奈良県川柳大会
（第40回奈良県芸術祭参加）

日　時　**10月18日**（日）10時開場
会　場　リバーサイドホテル　2階メインホール
TEL　0747－25－1555
JR大和二見駅より南東徒歩7分
JR五條駅よりタクシー5分
おはなし　桜井秀清氏（五條の歴史）
宿題と選者　**締切12時**（各題2句）

「腰」	板垣孝志選
「ゆっくり」	上田有行選
「白」	黒川正之進選
「鳴る」	中博司選
「学ぶ」	那須鎮彦選
「覆す」	森田和夫選
「待つ」	渡辺富子選

会　費　1,500円　大会誌呈
昼食(千円)希望者は下記までご連絡下さい
欠席投句先　〒637-0071 五条市二見3-8-7
南　芳枝宛
定額小為替1,000円同封.**10月10日着**
TEL・FAX 0747-23-1721
主　催　奈良県川柳連盟
後　援　奈良県・日川協 他

五煙抄

（つづき）

笑いこけアッと言う間の米寿かな
代りたや息子の病命ごい
今の世は家族ばなれがおこす罪
ジジババの出る幕今ぞ大事かな

山鹿市　阿部　ミツ子

大阪と霞ヶ関に笑いあり
ゆくゆくはツッコミボケが国救う
政治家は何する人か答え出ず
高まった理由どうあれ選挙戦

メルボルン　藤原　ポン吉

第114回 大阪川柳の会

日　時　**10月5日**（月）17時開場　18時締切（席題なし）
会　場　サンケイホールブリーゼ　八階　八〇三号室
宿題と選者（各題二句）
△返　事・佐藤寿美子　△食べる・植野美津江
△絞　る・鶴田　遠野　△ついつい・磯野いさむ
会　費　千円　欠席投句10月3日まで　本田智彦　宛
〒532－0025　大阪市淀川区新北野1－3－4－706

川柳塔の川柳讃歌 ㊼

木津川　計

太いめが好き人間も羊かんも

黒田　能子

わが意を得たりです。ことに女性は豊満、豊麗をもって魅力とするのです。メタボへの過剰な恐怖を煽り、不必要なダイエットを強制して利益を貪る痩身産業の脂ぎった男たちが天下を取っていると僕には思えます。

能子さん、わけても細い女性と薄切りの羊かんはいただけませんから、むくむく肥ってください。漢語で言う「豊容」とは立派なすがたや顔つきを意味したのです。弁財天の肉づきこそ、すべての女性の典型です。

少子化と言われ保育所順序待ち

松本　知恵子

この句が川柳という短詩型文芸の在り場所を示しています。俳句がこんな事態を詠めましょうか。

高齢化と言われ特養はえらい順番待ちです。これはまだ分かります。が、少子化なら保育所は空いていなければなりません。詰まるところ、どちらも足りないのです。こんな状態が野放しにされてよいものでしょうか。

知恵子さんの放った批判精神です。理に合わないことを指弾するのも川柳の役割です。

守られているが不自由籠の鳥

臼井　二英

「籠の鳥」のはやったのは大正十四年でした。「あなたの呼ぶ声忘れはせぬが／出るに出られぬ籠の鳥」悲哀のラブロマンスは無声映画終焉時の大ヒット作でした。

守られた籠の鳥を安全とみるか、閉じこめられて不自由とみるかは立場によって分かれます。その善し悪しをいまは問わず、複眼の視点は対象を広く見、深くとらえます。「誉めすぎても鴉嫌いすぎてもカラス」（足立玲子）、鴉になぞらえての人間観察です。

年重ね世の中見えてきた金魚

大内　朝子

朝子さんの視点も一種の複眼です。自分の眼で金魚を眺めるのではなく、金魚の眼で眺めるのです。「私の影よ、そんなに夢中で鰯を食うなよ」（中村冨二）、私が影で、影が私という複眼です。猫だけでなく、我が輩は金魚であり、犬であり、テレビであり、万札である、としたら意外な展開にもなるでしょう。言うところの擬人化もその手法です。

森羅万象実になる物と散る物と

坊農　柳弘

映画理論のモンタージュが訳されて〈二物衝撃〉です。「オムレツの湯気のむこうの永平寺」（石田柊馬）に想像力を働かせますし、「乳房や　ああ満月のおもたさや」（富澤寿萬男）のあまりな上手さに感嘆します。

柳弘さんも〈物〉の二物に気付かれたのです。単に草花を指しているのではありません。「森羅万象」と対象をワイドに広げたから人間世界の幸不幸、たとえば、一将功成り万骨枯るに至るまでを把えたのです。

遠去かるこだま本音がもろに出る

安平次　弘道

弘道さんの句の特長がこの頃分かったように思います。落語で言う考えオチで詠まれるのです。変化球ですから打ちにくく、僕の解釈も空振りの三振に終りそうです。

〈あなたと呼べばあなたと答える……、とディック・ミネが「二人は若い」と歌ったのは昭和十年でした。そんな恋愛時代ははるかに遠く、いまはきれいごとですまない本音のぶっつけ合い。うーん、あの日のこだまも本音やったけど……。かくして又空振りです。

（「上方芸能」誌発行人）

自選集

一線を引くと五感が錆びてくる
バッハ聴く窓辺の一輪耳を寄せ
ガードルに断わられてる脂肪過多
別れの美学男に戻る道が無い
勘の良い女深く追って来ぬ

八十田　洞庵

バラ百本届けば君を許そうか
刀折れ矢が尽き離農すると決め
春だから妻よ女を演じてよ
反骨の他何も残らぬ手の平よ
ハイポーズこれを遺影として飾れ

両川　洋々

ヘッチャラと舐めたばかりに行き詰まる
深読みの強気がはまる落し穴
口先だけの老人パワーたかが知れ
知ったか振りおよし尻尾覗いてる
オッチョコチョイそれなりつかむ役もある

阿萬　萬的

白波が契る浜辺のものがたり
石投げてみてもこわれぬ失恋記
少し好き昔むかしの伝言版
あのひとの噂知ってるいわし雲
うしろから刺されそうな紙ナイフ

板尾　岳人

ストレスに烈しい雷雨小気味よし
そば殻の枕やさしく涙吸う
人恋えば硬い殻にも開く窓
女の強さ名誉など欲しがらぬ
始めから背伸びはしない自然体

奥田　みつ子

有り難い長い法話へ辛い足
意気投合酌み交すのに河岸を変え
あっさりと信用したのが誤算
滝壺の飛沫に虹が浮かび出る
折衷案折り合い付ける年の功

河井　庸佑

湿気むんむん冗談はよし給え
終電車今喉元を通過中
冷凍魚ばかりが釣れる亡父の竿
ここに居るのはタイムスリップした私
野菜ばかり食べても蝶になれぬまま

川上　大輪

隣国の核開発に音を上げる
世界平和家族は戦さにもうやらぬ
風化してならぬ八月十五日
竹槍で原爆に向うウツケ者
雲が飛ぶ月も一緒に飛んでいる

木村　あきら

三十二年妻の小さな掌を愛す
結婚記念日まで五〇〇円貯めていた
テレビ買う嫁かぬと決めたのだろうか
檸檬の忌一日選をしていたよ
四月二十四日わたしだけの檸檬の忌

小島　蘭幸

政権に関係はない稲育つ
暑に耐える河童の皿の水も涸れ
迷わない亡母の言葉が頭を走る
独り飲むビールへ音の無い日暮れ
故人から献金もらう変な国

小西　雄々

朝露のトマトがぶりと誕生日
津軽三味聴きつつ伸びていくりんご
躓いた石が導く人の道
弾まずに一生終わる毬もある
でこぼこを走ると子等にまだ負けぬ

斉藤　姦

知名度もぐんぐん上る鶴彬
鶴彬映画になって満員だ
目高の学校二学期になりました
妻の庭苦瓜沢山ぶら下る
この秋に鶴彬生誕百年やって来る

塩満　敏

酒飲んでふらふら歩くのが特技
ふとももが痩せておなかはそのまんま
金がないと狂う　有り過ぎても狂う
酔狂と言われて返す言葉なし
政治家が僕よりアホに見えてきた

新家完司

ホテルから夕陽眺めてひとり言
成り年で里から届く宅急便
知恵がまだ少しはあると自惚れる
気にさわることも忘れて注いでいる
同じ事また言っているまだら呆け

恒松町紅

新調の和服が似合う栄誉賞
たまさかのディーナーこってりメーキャップ
それなりのプロセス踏んできた写経
捨てる気の整理がやはり元の鞘
国籍はどうあろうとも上まむし

津守柳伸

禁酒禁煙月見の城も佗しけり
買いそもない目にもマネキン見つめられ
眺めても眺めても富士何時も富士
似てるけど変ではないの恋ですの
働けど働けどなあ啄木よ

遠山可住

一ページ余白にしたい無言劇
意地張って通した筋にしばられる
今不意に光ったあの時の答
ところてん突いてすんなり出た答
すだれからうなぎの寝床の好きな風

都倉求芽

荒城の月尺八を吹いている
安穏の世に魂を置いてきた
太陽を騙した雨に濡れてゆく
苦労したあげくの果は認知症
飛ぶ鳥も海の魚も雄と雌

土橋螢

星が流れる八月の禊ぎ河
迎え火へ仏飾りの滑りこみ
蚊遣り焚く仏の間には客がある
棚経のあとは珈琲ブレイクに
分別よ非核ばなしになる星座

中原諷人

現実に照らすと夢が萎えてくる
斜めから飛んで来る矢に裁かれる
とりあえずみんなが走るから歩く
酸素補給したくなったら行く本屋
おばちゃんはみんな肉食系らしい

西出楓楽

ウオーキング旗と仲間に守られて
ケータイも七つ道具にウオーキング
排気ガスも体験してのウオーキング
マイペース付き合い下手のウオーキング
ウオーキング永井荷風は知らざりき

仁部四郎

昭和史の想い出大樹の回り縁
優雅なるむかしよ鶴の恩返し
枯れても女両の手朝の陽が咲かす
むらさきの野の影追えばゲーテの詩
燭台がゆれて似顔絵が売れる

林瑞枝

いざ選挙甲冑パンツ着きかえる
雑音が好きで補聴器離さない
眼鏡誂え喜寿の瞳をよろこばす
五時散歩僕より早い人がいる
メタボ解消カイパン着いて町歩く

前たもつ

生きてきたところどころに不整脈
横道に逸れてしまった蟻もいる
錯覚を楽しんでいる蜃気楼
疎遠とや距離では測れない遠さ
残像が君と重なる遠花火

三宅保州

辿りつくとこは原点ほとけさま
人間をざくざく刻んでる乾き
真っ新なページを汚すウソ一つ
縦糸も横糸も解く故郷の家
ブルドーザ土の悲鳴か聞こえない

宮西弥生

夏の色見せて空の広さが一段と
歩調をば併せてくれる連れはなく
暇あって金無く暮らせる老いの日々
給付金貰うにうろうろさせられる
建ち並ぶ貸しビル空き室ばかりなり

森下愛論

災害お見舞い

この度の豪雨災害により被災された方へお見舞いを申し上げますと共に、一日も早い復旧をお祈り申し上げます。

川柳塔社

温故知新

酒がでるなと感じたか腰をすえ
酷寒を女と生まれ米を研ぐ
商用で来た町雪見酒になり

森文夫

寝息かすかにもれてるような釈迦寝像
汽車キライでしたと母の追善忌
道楽な親父だったが親だった

安岡珊枝郎

貸しボート打ち明ける気で沖へこぎ
約束を破らすような雨が降り
地方版僕の句もある日曜日

山田季賛

どうかなるこんな気持ちが家出さす
だだっ子を母はたしかになびかせる
男手でキュウリを刻む一と七日

山口秋花

―合同句集『私達』―
昭和三二年発行　選者麻生路郎

五湖抄

川上大輪選

そもそもは口の軽さが災いし
爪を研ぐ爪を丸める浮世かな
代役が育っていない三枚目
燻し銀男男に惚れ直す
輪を描いて悠々トビのテリトリー
続編はもう書きません夢芝居

札幌市　小沢　淳

手仕事がはかどる今日はみんな留守
只今の声で安堵の留守居役
角番をいくつも越えた影法師
都合よく四捨五入して落ち込まぬ
好き嫌い人それぞれにあるメジャー
夏メニューに春の残り香少し添え

八尾市　赤木妙子

秋の風揺らしてみたい花がある
まん中で吊橋急に笑い出す
遺伝子がもう走り出す村祭り

紀の川市　宇野幹子

人差指の向こうに深い森がある
残照の川へ流した鬼の面
生いたちは語りたくない青いバラ

札幌市　三浦強一

テレビ買い換えもったいないに目をつぶり
訳ありの野菜うまさは変らない
ライバルがぼくと同じとこで転け
ではまたのまたが訃報となる無念
一日が一喜一憂なく終る
CMの時間お芋は煮えたかな

羽曳野市　森下一知

駆け出しを鍛える路地の縄のれん
旅帰り噂を孕むブーメラン
相槌に遅れる母の笑い皺
付け替える野良着ボタンの色違い
波風を嫌う女房依存症
対策の口に予算が回らない

和歌山市　福井菜摘

小銭入れ不況の風に立ちむかう
あいまいな笑顔でかわす中立派
こっそりと腕を磨いている野心
人間が好きで門戸を開けておく
真心にふれると心凪いでくる
温もりがほしくて母の面を彫る

八尾市　田邊浩三

好き嫌い言えばメタボが目を覚ます
遺言だといって断わる保証人
焼き芋の屋台の前は駆け抜ける
講演会うなずきながら時計見る
のんびりとしてもおれない古希の坂
広辞苑使わないけど捨てられぬ

堺市　大隅克博

こだわりを少し残して色を出す
百点でなくても褒めてくれる母
逆境の今は自然に欲がとれ
一円もまけてはくれぬ券売機
円満を求めて僕は黙秘権
着外も然程変わらぬ馬の顔

横浜市　長島亜希子

良い宿がとれたと嫁に誘われる
同病で話弾んでお大事に
いってらっしゃい見送る妻もいそいそと
二日分食事作って妻は留守
まあいいじゃないの　わたしは宥め役
若く見えたけれどアラ還お仲間だ

北九州市　岡田幸生

魚の目がブレーキかける万歩計
消しゴムの出番が増える手の震え
友情の縺れを解かす縄のれん
老い哀し紐がほどけぬ知恵袋
定年後愚痴を小言に変える妻
ほろ酔いの靴の持つ癖回り道

河内長野市　針生和代

睡眠不足加速させてる染みと皺
眠ってる時だけ天使孫二歳
なめらかな舌が墓穴を掘っている
ケータイを持って痩せてく会話力
茄子胡瓜と会話も増えて実り出す
吉と出た帰り財布を置き忘れ

茨木市　島田誠一

職人の意気が衛星ぶちあげる
高下駄の音が老舗の味守る
国技だと言うから腹の立つ角力
人生をゲームもどきで見るヤング
点と線合わせて見える裏の顔
身の丈に合うた女房でもつ家計

病の名さらりと通す聴診器
いつ投げるかんしゃく玉は水びたし
変化球手元くるって跳ね返る
持ち歩く風船割れて座り込む
一色に染まり満足年重ね

鳥取市　大前安子

月明かり昼の暑さが嘘のよう
議員さん質疑応答みな読んで
長長と以上と言えば済む祝辞
路地裏に見送る人もない柩
田の畦を歩く人みな高齢者

倉吉市　前田喜美子

ダイエット中途半端に鞭を打つ
関節の悲鳴を聞いてダイエット
投げ捨てのゴミが見ている後影
病名は包んで飲もうオブラート
思いやり分け合っている子沢山

米子市　猪森スミエ

蓮池をゆるりこの世を見て歩く
エコバッグ提げる私も一歩から
屋根の上鷺の通路に貸している
無い物ねだりするから心寒くなる
団地にはまだ馴染めない山野草

米子市　吉田陽子

ゼロに生まれゼロに還ってゆく生命
完熟のトマト朽ちたくない本音
内緒事いつも仏壇には話す
全開のパワーいつもといかぬ老い
月並な人のままでいたいピエロ

鳥取県　西谷悦子

手にあまるひとりよがりの感受性
あなたもか同じ思いか一行詩
狭き胸苦言をまたも斬り捨てた
呪縛から解かれたくって立つ岬
午後十時わたしの電池切れました

鳥取県　斉尾くにこ

若い日の味はしっかりおぼえてる
そばに居るだけで幸せ夫婦です
誕生日自分にけじめつける日だ
望むのは五体満足それでいい
考えているが実現できぬ夢

鳥取県　橋谷静江

アイラブユー今はいずこか風に聞く
だんだんとワンマンになるこれも年
ワンマンの父もやっぱり親でした
ほがらかになれば心も軽くなる
過疎の村モデル家族が減っていく

鳥取県　飯野菖子

身の回り軽くしとけと言われても
ふるさとは心豊かになれるとこ
作業着に振り回されて汗流す
花の苗植えて嬉しい雨が降る
夏野菜畑へ足が弾んでる

松江市　山根邦代

宍道湖はラッシュアワーのしじみ舟
駆け込んだ駅は豊富な時刻割
年相応粗忽者でも口を出し
新聞でエコの袋が出来上がる
ぴったりといかぬが当たる腹時計

松江市　錦織禮子

メロディーを奏でるように葉が動く
縦と横織りなすことの難しさ
正確な電波時計がお気に入り
仲よしの秘訣は息子エサにする
南風もわあっと背中押してきた

松江市　松浦登志子

雨降りの紫陽花どこかうれしそう
頂点を見つめて生きる足のうら
爽やかな朝の挨拶回覧版
この年で夏の思い出肝だめし
小狸は後姿に見栄をはり

雲南市　渡部好榮

信じると皆善人に見えてくる
お節介愛の証と受け止める
腰曲げて付いて来る影いとおしい
透けている服に若さがはち切れる
夕焼けに明日の約束してしまう

雲南市　武島ちよえ

散髪をすると喜ぶ植木たち
草取りができてうれしい腰になる
言うよりもまだ言われたいありがとう
映画館出る　夢覚ますようにして
僕を捕まえようとする雲に遇う

神戸市　木村忠義

祝電の束に打算が紛れ込む
リハビリの溢れる汗を信じてる
秘めごとのひとつも無いという不安
春風に隠しごとなど出来ません
お祝いの席でチャンスを待っている

神戸市　山﨑武彦

八月の記憶の中に鐘鳴らす
未来図を描き直して会えた君
エアメール異国の風を連れてくる
よしよしとアイラブユーの子守唄
そよ風を大切にして手を繋ぐ

神戸市　早川孝子

自分史を語れば唸り出す昭和
年寄りの会話に死語が生き返る
ご不満かどうか小鼻に問うてみる
映る染み汚れでないか鏡拭く
糊利いたシャツは男をしゃんとする

明石市　糀谷和郎

水面の影も濃くなる夏盛り
党首討論互いに横を向いたまま
事あるごと党首ぎっこんばったんし
よちよちの孫の後ろをジジ　ババも
ブカブカの服でピョンピョン入園児

尼崎市　藤岡りこ

ケータイはみんな孤独で持ち歩き
カーナビに任せた旅で気楽です
なにくそと踏んばる足が先ず悲鳴
悲しみは我欲の先に光るもの
おもいやり温もり合わせ古希の春

川西市　日野岡和之

我が家では金の鞍にはお母さま
シンプルな言葉にトゲが埋めてある
菓子を食べ乙女の祈り聞くメタボ
変っても変らなくても四面楚歌
祝電の行間にまだわだかまり

西宮市　足立茂

何事もすぐに忘れる耳である
優しさも凶器も入れてくるブログ
八つ墓村を覗いてみたい旅かばん
グルメより痩身法に凝っている
もうひとりの私を入れるパスワード

西宮市　泉水冴子

みな無事に送り届けて飲むお酒
タコフェリーへ後めたさが残る旅
梨の実の冴えない色も秋の色
体力も気力も尽きてところてん
どて焼きがとっても旨い路地へゆく

西宮市　吉井菜々子

ふり仮名がないと読めない旅の駅
町名が変われば暮らし見直され
高鼾止むと気になる病み上がり
母と娘のないしょの話お赤飯
手を上げて横断してる酔っ払い

大阪市　山本加お里

沙羅双樹今日一日の花の宴
大きめのバッグを買って詰めすぎる
やっかいな気のみじかさも武器かしら
老いるほど生きるハードル高くなり
友からの至福のみやげ一句聞く

大阪市　笠嶋惠美

人生の駒が進んで低い腰
心配をする振りぐらいしてほしい
好きという言葉だけでは言い足りぬ
貫けばきっと答が解けるはず
淋しがりやになってしまった男たち

大阪市　尾崎ゆめ

痛み分け神は勝ち負け知っている
金かねカネ食傷気味の尻尾切り
移ろいや人のこころと雲行きと
陰口が過ぎて空気が汚れだす
上を見ず下見ず老いの夕間暮れ

泉佐野市　稲葉　洋

大正に生れ運よく百目指す
手料理を妻残さずに食べてくれ
職退いて囲碁川柳のよき仲間
家庭菜園亡父にならって汗流す
一日を大事に生きる八十路すぎ

河内長野市　木太久正一

良い噂広く播いても芽が出ない
散らし鮨母から繋ぐ温かさ
色っぽいと言わせてみたい一度でも
貧乏神お泊めしたのは誰ですか
敵味方どちらにもなる世間の目

河内長野市　辻村洋子

尻の下それでも戸籍筆頭者
目を覆い耳をふさいで口を出す
百面相こしらえながら髭を剃る
喧嘩でも仲直りでも五分でする
閑なのにスピード違反繰り返す

河内長野市　山室光弘

イメチェンも度重なると振り出しへ
何度目の再出発か今度こそ
アラフォーと聞いて思わず顔を見る
銀シャリを夢にまで見る日もあった
お国替え昔大名今選挙

堺市　羽田野洋介

脇役のままで楽日を待つことに
良妻で賢母で嫁に疎まれる
うまいまずい言わぬ夫で腹がたつ
あいまいのままで諍い避ける策
ひと言が多かったなと床の中

高槻市　片山かずお

時に委ねるそう決めた日の昼の月
曼珠沙華実の無い訳を畔に撒く
仏壇の奥には青い海がある
紡がれた言葉は今宵煌めいて
寛くあれ海もいつかは山となる

富田林市　石橋未知

嫁が来る肩の力を抜いておこ
胃が痛いそれでもお酒飲んでいる
連合いの影がちらちら遺産分け
リベンジはどうでもよいと歳が言う
大丈夫食べた事なら覚えてる

羽曳野市　宇都宮　ちづる

頑固一徹父からもらう血のバトン
米野菜里から届く父の汗
塗り終えた口紅やる気かりたてる
子沢山紅に縁ない里の母
愚痴不満耐えて心根深くする

八尾市　松葉　君江

好物はそっと最後に回す癖
メタボです言われて目覚め出す万歩
身から出た錆が支持率下げつくす
すばらしい言うて添削する講師
植え終えて確と早苗に秋託す

八尾市　寺川　はじむ

昨日までひょいと跨いだ水溜り
言葉だけ横すべりするバラエティー
感受性みがけと雲が形変え
思い出をつまみ食いして午後のお茶
好奇心脳が活き活きし始める

大阪府　神野　千恵子

無駄だからなんて言わずに行く選挙
盆栽はしゃべらないから癒される
逃げ道を作って叱る子の躾
老いてなお盛んな人の減らず口
百均で子供おしゃれを買っている

和歌山市　磯部　義雄

朝の経始まるひと日すがすがし
パニックの脳ににっこり花の鉢
毎日が日曜なのに土日待つ
ごぼう抜きされたか空し年の欄
誰よりも貧し誰より満ちている

和歌山市　堀　冨美子

せせらぎに心晒して結果待つ
久びさに牛ステーキも買ってみる
ジーパンへわざと出します膝小僧
つまらない話のあとは濃い麦茶
手作りのキュウリまっすぐやや太め

海南市　小谷　小雪

滲み出る汗が生きてる証です
縦縞をスリムになった気で装う
鐘三つ鳴りそに響く風呂の中
思い切り噛めぬ歯になり未だ内緒
そっと起き夜半に浮かぶ句をメモる

紀の川市　吉村　幸

紀の川市　北山絹子

満天の星に決意を迫られる
外は雨水掛け論が続いてる
八月の海に魂浮いている
父さんの決意香水買っている
割れ物に触れる覚悟の手を洗う

紀の川市　辻内次根

これからの夢を紡いでいる机上
炎天下他人を恨んではならぬ
さらさらと小川で漉している記憶
後悔が続く時効の傷の跡
熱帯夜朝の布団で長くなる

田辺市　大峠可動

羊頭狗肉あなたの肌も紅ですか
さて今日は仏の忌なり曼珠沙華
妥協して腹に捨てようひとり言
捨て身なら凡人のまま勝てるかも
自画像を描いて石鹸泡だてる

和歌山県　森下よりこ

よく見れば野良着もメイドインチャイナ
かぼちゃ豊作日本かぼちゃに洋かぼちゃ
いとこ会が親の年忌ということに
野山もう次の季節を用意して
素人でも差し芽失敗しない梅雨

美作市　小林妻子

無税です大きな深呼吸をする
三浪も出来ず就職口もなし
試着室で手間取っている中味たち
木枯しの中に消えてくのもさだめ
墨壺の底に溜めてる語彙もある

北名古屋市　片岡文男

昼からの読書は同じ行ばかり
マナー無い客がお店の格を下げ
今日はどこ問えば病院帰りだと
梅らっきょ漬けた根気はどこへ消え
閉店にキャタピラの音だけ響き

豊橋市　藤田千休

残高をATMに笑われる
激論を冷してくれたティータイム
厨房に妻が残したマーキング
今まさに後期青春適齢期
窓際で風に逆らう奴凧

佐渡市　髙野不二

催促をしにくい金を貸してある
コンビニでおにぎりを買う無駄遣い
一日の仕事が出来るサロンパス
ビールがないから広い冷蔵庫
平均寿命部品が少しいたんで来

シドニー　三谷　たん吉

選挙戦声張りあげて嘘っぱち
ポスターの笑顔を見ると寒気する
人間は利口者ほどしゃべらない
新聞をめくるたんびに腹が立つ
選びたい候補も党も全てゼロ

竹原市　六田半徳

炭焼きの紫煙くゆらす亡父笑顔
炭二俵負うて山道光る汗
此の世相包丁登録必要か
青蛙つゆの晴れ間に背伸びする
政権を奪取ダッシュとせみの声

竹原市　國實　力

解散のゴング補聴器つけて待つ
病院の片道徒歩という元気
方言で話せる友が今日は来る
寝不足でまともに言えぬハヒフヘホ
幸せかどうだかポチの赤い服

京都市　清水英旺

踏み台にしたりされたり人模様
くちなしの香り夜陰に溶けている
望むものなし時が過ぎゆくままに在る
この年も半分来たか老いしみる
大岩を穿つ滴を畏敬する

香南市　桑名孝雄

山なりのボールでおちょくられている
花道がないまま緞帳が下りる
いつも一歩引いたお方で恐ろしい
こま切れの眠りを綴り生きている
永眠はも少し先にして昼寝

横浜市　巌田かず枝

夫婦舟難破しそうな時もあり
お出掛けは好きではないが用がある
安心を買いに人間ドック入り
兼続のような家臣が見当たらぬ
携帯の好きな二歳は理系です

横浜市　川島良子

たかが一票されど一票世を変える
平成の肌は日焼けを許さない
色褪せた話を酒が掘り返す
よく噛んで噛みしめて読む師の手紙
水着着る約束をしたダイエット

栃木市　岡野すみれ

兄弟の仲を他人がかき乱し
おみくじが心細さをなぐさめる
しばらくは伏せておきたい夫の死
恋してる生き生きしてるお母さん
ふっ切れた夢現実へまっしぐら

二代目は理屈ばかりで動かない
舎監の目盗んで夜啼きそば美味し
墓参もう出来なくなって仏間の灯
官僚が操っているのが政治

草加市　飯土井　健　翁

一匹の蚊を追いかけて汗をかき
雷でやっと別れた立ち話
孫が去り涼感戻る家の中
宝くじ買うのを止めて縄のれん

野田市　高　橋　保　雄

子育ては待って見守り共に笑み
夏来たる設定温度は妻の指示
エアコン下靴下はいてお茶すする
子の寝汗拭いて幸せ頬ずりを

東京都　高　岡　弥　生

顔で笑いはらわた煮えるノーサイド
川柳とビールで脳の錆落とし
百年に一度と言って頬被り
独り風呂自分の喉に聞き惚れる

東京都　井　上　つよし

遺伝子が片エクボまでつれてくる
振り返るたびに恐さを積む夜道
結婚の記念日二人とも忘れ
ありがとうこの一言で終わりたい

昭島市　野　口　忠

雨しとど友の便りを読み返す
招く夏時を忘れぬ半夏生
初歩きひ孫追い越す試歩の杖
趣味に生き卒寿ハードル越える夢

藤沢市　加　藤　スズコ

よくもまあここまで生きて来たものよ
これからの人生何が起こるやら
美容液つけても老いが先を行く
エアコンがこわれて乙なウチワ風

静岡市　渡　辺　芳　子

戦国の波乗り越えた愛の文字
千円で駆けるハイウェー山笑う
ローン済む頃にリフォーム迫られる
ライバルは自分自身と鞭を入れ

岐阜市　平　野　あずま

余生なおプラス志向で生きていく
入院をするのに化粧一時間
誘われて踊るワルツに妻の笑み
変化球若旦那には受けられぬ

江南市　脇　田　雅　美

おっとっとっと注がれたビール口が受け
冷奴角立て水に浮いている
大文字のニュースまたかと気がめいる
孫二十歳二人で歩く幸福感

大阪市　浅　田　操

松茸は今年も食えぬ提灯屋
二日酔いコンビニで買う酔い醒まし
化粧品薬も売るよ家電店
ノーマークよくよくみれば中国製

大阪市　吉川弘泰

ひと雨毎延びる草丈恐ろしい
エコ肥料ばかりのスイカ成長中
食べ切れる量で良いのに宿の膳
老々介護させない努力日頃から

大阪府　西川冷子

結婚はボランティアだという男
夏が来た戦闘体制万全か
実力があっても出世できぬ人
人事異動力関係見えてくる

大阪市　安藤なつこ

浪花にも誰でも良かった奴がいた
天からのコメント暫く雨らしい
紫陽花が土の色香にハッスルし
匿名で募れば裏が見えてくる

大阪府　高木道子

バリアーフリー足元照らす灯がぬくい
このダイヤ深呼吸してゼロを読む
秤では出せない母の匙加減
悠久のなら街道に風薫る

大阪市　寺井弘子

ありがとう言えばすべてが丸くいく
窓あけてポイと捨てさる似非紳士
便利さを最優先の空しい世
エコとなえ油ばらまく高速路

大阪市　松田聰

除草剤まこか草刈り煩わし
空気まで金で買うてる清浄器
五十から歳をとらない肩のこり
新曲もネタ切れ次は古い歌

大阪市　平井露芳

誕生祝福祉センターしてくれる
長生きもほどほどが良い骨が泣く
無病です医師の言葉で生きかえる
世も変り親子の絆虫の息

大阪市　片岡松枝

演技とは見えぬ涙にだまされる
もうあかん言うてしっかり稼いでる
生きている器用不器用取り混ぜて
頑張らず柳に風で世を渡る

大阪市　萩原大朔

出かけ先鍵かけたかなまた悩む
お疲れね眼鏡をかけて高鼾
昔靴音今携帯で知る帰宅
冷蔵庫ごみ箱じゃない夫が言う

泉大津市　助川和美

門真市　矢阪英雄

謄本を役場にとどめ父母慕う
屏風岩過疎の山風通せんぼ
父母越えたすすきの峠何語る
行李には里の落葉と風を入れ

河内長野市　宮守正博

歳聞かれ嘘がだんだんきつくなる
上役が来たら会話が急に止む
そのうちにまたとつれない返事する
故郷の土もついてる宅急便

河内長野市　内海綾乃

届かないビワすずなりで鳥の餌
病気して友の温みを知らされる
定期券忘れてバスへもうダッシュ
階段が斜めになって眼がくらむ

河内長野市　山本莞子

プライドを折り曲げたのに職が無い
冷や飯にあっついお茶は妻の愛
旅支度老いて薬もひと抱え
悩んでも成るようにしかならん世だ

岸和田市　中岡香代

権威もつ人は無口で押し通す
甲子園テレビに映りズルがばれ
子の熱でユーターンするママの旅
ゼロ一つ多いと気付くレジの列

堺市　遠山唯教

一票の重さを知っている欅
猫の手も総動員の選挙戦
喉元をすぎて公約とおくなる
選挙後は胸を反らしいるバッジ

堺市　近藤治子

あれこれと説明させて買いもせず
あれこれとこだわった末シンプルに
鍋の底全部磨いてうつ晴れる
前向きの考え気力背を押す

吹田市　二宮栄子

古希までを支えた足を褒めてやる
子の世話にならぬ積りのウォーキング
古希の手が握り合ってるクラス会
年金で感謝しながら生きていく

豊中市　荒巻夢

銀髪がふえてピンクが似合い出す
七十年生きた証のしみの数
少し照れ太宰が好きという男
履きものを曳きずる音の耳障り

豊中市　源田啓生

政界も泣き出している雨しとど
光りものヒトもカラスも好きなんだ
何故打たぬボールが過ぎる頃に言う
おらが田の蛙国会騒がしい

富田林市　古田千華

満身の智慧を小出しの望見か
壇上で妥協はしない白い薔薇
薔薇のジャム花を虐待したわたし
夏草にやっさもっさと迫られて

寝屋川市　小嶋みさと

風鈴のリズム軽やか夏告げる
すげ替える頭ないまま宙に浮く
今年また愛し懐かし蝉の声
梅雨明けを待たずに猛暑やって来る

寝屋川市　岡本勲

渡る子等も減ってわびしい歩道橋
熱いお茶入れて至福の老夫婦
待ちぼうけだなと笑ってる花時計
逃げぬようちゃんと携帯持たせられ

羽曳野市　仲谷真一

紫陽花の心変りを見つめてる
梅雨明けを蝶が一番知っている
大山の山肌隠す梅雨の雲
夏選挙老人議員命かけ

羽曳野市　松本静子

三室戸寺蓮酒を飲む二人連れ
熱帯夜今夜も眠れないのかな
堀の中時々亀が顔を出す
脳トレの問題解けず苦労する

枚方市　坂本ミヨノ

人間に明日を与えて日が暮れる
買溜め好き捨ても上手な無謀母
老人の気力根気負けてます
星に見立て青白ボール揺らいでる

枚方市　河田洋子

改札を出てから気付く忘れ傘
人恋し雨の降る日の長電話
折角の旅が悲しい雨の音
キュウリナス朝昼晩と姿替え

枚方市　小川良吉

もの言わぬ平和の石碑時刻む
北朝鮮の民も平和がほしいはず
新聞の隅ずみ読んでケセラセラ
妻難聴ぼくのわがまま耐えてる

八尾市　前田紀雄

百日紅梅雨明け待って乱れ咲く
大手術気合で治す友見舞う
民主主義数で中身は問うてない
雑学のこころの軌跡整理する

八尾市　中島春江

ありがとう亡母より歳をとりました
近頃のギャル皆同じ顔に見え
人気者良い人だとは限らない
砂の器と知らずに欲をてんこもり

一枚ずつ鎧を脱いでゆく加齢
松手入れ終えて涼風こぼれ来る
山椒の実成り放題の老い侘し
日陰にて十薬の花楚楚と咲く

大阪府　畑中節子

残り火を燃やし切りたくサプリ飲む
レッテルを張り替え今日の道を行く
下手な字で気持ち伝える返事かく
生えて来ぬ種を待たずに次を蒔く

大阪府　小栢こずえ

気持ちなら負けてなどとか言うところ
外遊と謳うてからの百年目
新聞だったらわけなく溜まりますけんど
大丈夫なのにみんなに案じられ

大阪府　坂口公子

枹さばき男の背なか踊り出す
喚声に押され入ったホームラン
勘違い認知症だとさらり逃げ
逃げるが勝だからとことんまで逃げる

大阪府　若月祐治

イエスノー使い分けるも生きる知恵
腹立てても行きつく先は自己嫌悪
しがらみをはずされ淋し孤独知る
失敗も作戦ですと自己弁護

京都市　藤井文代

裕ちゃんの曲競い合う縄のれん
銀恋は初めて知った恋の歌
要注意妻がしんみり話し出す
悲しみを笑顔で隠す妻である

奈良市　矢野良一

歯の欠けたような街並み見る不興
草食系の男追うほど気力無い
テレビから本から人間ドラマです
鮭溯上みんな生きとし生けるもの

奈良市　加門萌子

目安にと言った数字に縛られる
塩漬けの株価が怖く見られない
千円に釣られETC買わされる
町工場宇宙にまでも飛躍する

奈良市　辻内げんえい

コロコロと笑うお人で隙がない
禁煙の唇寒く偽パイプ
恋ひとつ散らしたままの峠道
酔い覚めの水を子猫が飲んじゃった

奈良市　尾畑なを江

一筋の涙でいつも負かされる
酒席でも査定されてるヒラ社員
言い負けてパパトイレから出てこない
助手席でナビする妻が姦しい

奈良市　岩本浩二

墨の香があふれレトロな店構え
高野山古色蒼然墓石群
涙そうそう南の国のほんわかさ
ひょっとして花を持たせてくれたかも

奈良市　阿部茶々

デジタルの世話にもなるがアナログ派
かなわんな妻は話を読んでいる
クラス会田舎言葉に直ぐ慣れる
難民の過酷さを目で語る子ら

奈良県　谷川憲司

万歩計夏の早朝爽やかに
長生きが夢のようだと老母笑う
農家でもパンにそうめん米減らず
梅雨入りで畑の草が大はしゃぎ

和歌山市　根田よしこ

梅雨空の赤いトマトに元気沸く
雨蛙貴方ひとりじゃないと鳴く
無理矢理に背中押されて出た馬力
あれこれと思いついたが皆忘れ

和歌山市　坂部かずみ

開き直り心の窓に風通す
思わくの通りにならぬ七曲り
忘れごと刺戟ともなる老い二人
すみませんと遠慮のように見せる欲

岩出市　村中悦男

新緑のシャワーを浴びて甦る
ずぶ濡れになって消したい罪がある
太陽の動きを知って生き延びる
時が過ぎ色褪せてゆくダイアリー

岩出市　藤原ほのか

梅雨最中庭の何処かに蛙住む
悲しみも楽しみもあり生きる糧
平凡な日々の暮らしよ米を研ぐ
垣根越し隣家の花が我が家にも

尼崎市　小池幸子

鈍行でことりことりと八十路まで
うとうととするのも生きる秘訣です
頑固者頑固な病持っている
まさかとは思うが保険かけておく

加東市　安達厚

雨もらい野菜も草も元気づく
汗しぼり暑い言わない面白さ
ゴルフ旅日帰りさそいすぐ参加
尿近い話題のつきぬ高齢者

加東市　黒崎美紗子

秘密ない語ることない日の暮し
夢もてと余白余生が伸びました
暇あってその気にさせぬ気まま筆
三日入院帰館しました愛友よ

加東市　岩本美緒子

篠山市　谷田　多美子

やさしさを嫁にもらって日々すずし
姑も音痴御詠歌くるてくる
にっこりとあじさい寺でハイチーズ
音痴ですあじさい園でまた迷う

篠山市　永井　かほる

傘寿まで生かせてもらいまだ夢が
この年でいちじく小梅植えて待つ
菜園も可愛がったら出来違う
ウグイスの子供鳴き出す声未熟

篠山市　沢山　啓子

九十の姑が探すちちとはは
だんだんとデイサービスに似る句会
水鉢に咲く睡蓮の口達者
実はねと語る身の上月見草

三田市　辻　開子

近くなる互いの名前呼んでみて
携帯は疲れかくしたメールでき
今日のエコ休む買物消費ゼロ
紫陽花も蝸牛も待つからの梅雨

三木市　山口　久子

今みた夢明日も続きがあればいい
うちのミケそちらにお邪魔してますか
夏ばてで五七五も夏休み
会議中メモするふりでいねむりを

三木市　広瀬　房江

グラジオラスしゃっきり咲いて折れ易い
いけずだが妙にやさしい時もある
アイロンを掛けて追い出す胸さわぎ
おしゃれして老いが目に立つここかしこ

箕面市　寺井　柳童

逆転のサヨナラヒットハイタッチ
サンバイザーマスクが隠すいい女
繕った兄の御下り着て得意
ベランダに家庭菜園エコロジー

西宮市　株元　玲子

梅雨の晴れ間物干竿と仲良しに
雨上り水面に映える恋の花
子の病ただひたすらに看護する
水溜りキャッキャとはしゃぐ孫のくつ

宝塚市　丸山　孔一

忘却の二字でこの世は生きられる
落語聴き夢の世界に一人居る
胃切除メタボと永久の別れする
馴れ初めは祇園祭の鉦の音

鳥取市　高浜　勇

郷に入り外人までが名刺だす
達人は同じペンから大宇宙
モデルハウスあとで粗品のつけがくる
ふたりめは安産ですと聞いたのに

変らずに過せることが幸だ
新聞チラシ溜まるが金はたまらない
日陰でも命のかぎり咲いて散る
長生きはよいが迷惑かけぬよう

鳥取市　山口千代子

朝日うけ両手広げて感謝する
母の愛躾をゆるくせぬように
彼の声聞こえただけで顔ほてる
いちずなの自然に歩み来た私

鳥取市　坂本なつみ

自慢にはならぬ私の新記録
盆提灯盆が済んだら用が無い
政権交代させるさせぬも俺の票
悪口雑言言って食事は残さずに

鳥取市　近藤秋星

その様なんだ叱る殿御もいない国
政界へ流れるお金皆黒い
投げキッスそれた御仁と睦まじく
少々のボケも笑って太く生き

鳥取市　津村律子

アジサイの花は心を捕虜にする
給付金満腹と腹なでおろす
雑草に追われ暇なし吾が体
満月を拝めど兎見ずじまい

鳥取市　谷岡清子

一泊のつもりが二泊孫の家
喜寿迎え転ばぬ先の杖を買う
何時までも見続けている夢ひとつ
ふらふらと気晴らしに出る一人旅

倉吉市　酒井芙美子

敬老会みんな元気に飲んで食べ
朝顔も色あざやかに梅雨半ば
ウォーキング坂道下り膝ふるえ
梅雨空に植田の緑風にゆれ

倉吉市　藤井美津恵

太陽と仲よくしなきゃ越せぬ夏
暑くても冬よりいいと耐える夏
かなづちも泳げまっせと水着売る
古池にゃなんか知らねど主が住む

境港市　中井虎尾

クラス会格差を見せる子の自慢
初恋を思い出させる倦怠期
振り向けば犬も一緒の影法師
不況除く明るい風を待っている

米子市　見山温子

音痴でも校歌忘れず合唱する
たまに来た孫に気遣う独り者
生かされている限り夢追ってみる
老化度を一人旅して確かめる

米子市　加藤正二

米子市　小塩　智加恵

新聞をゆっくり読むと昼となる
不思議です喧嘩知らない子の夫婦
美人顔マスクかければ並みの人
グループにアンテナ張った噂好き

鳥取県　大塚　美代子

一歩ずつ影を残した靴の跡
溜息のわけが聴きたい隣部屋
放蕩がすぎて田畑を売り払う
深呼吸しながら渡る丸木橋

鳥取県　田口　清帆

つい口がすべり形勢不利となる
話しあい終り希望の灯も点る
水流す分だけ重荷軽くする
ショッピング特売品のメモを見て

鳥取県　下田　茂登子

経験という肩書きをもっている
悪知恵を賢いとみた誤算
傘寿の夫今更頑固取れまいぞ
お世辞でも来いと言ったらよいのにね

鳥取県　稲村　遊子

天敵が同じ臭いを持っている
沸点を超えそう水を飲んでおく
綺麗ごと花にも罪は無いものか
譲るのは自分しかない帰り路

鳥取県　加賀田　志延

ふる里の自慢浪花に置いてくる
教室の後でおばちゃんアメ配る
重湯出ただけで涙腺突き上げる
少し良くなった夫が幅きかす

鳥取県　岡村　孝明

海の青何でも呑んで拒まない
空論の議会欠伸の外野席
リストラへ里に戻って山仕事
とりあえず薬草摘んでかげ干しに

鳥取県　吉野　いさお

本物と知り床に置く猫茶碗
間を置くと味見がかわる受け答え
主治医から死ぬほど飲めと脅された
通夜の席川柳浮かべ独り言

鳥取県　岡本　幸枝

残る枝剪られる枝にある運命
鳴砂を奉仕参加で守りぬく
忘れぬうちにメモしろペンがやかましい
足腰が望んでいますダイエット

鳥取県　鳥越　鬼一

これ以上我慢ならぬとムシロ旗
やっと解散選挙はエコで行きましょう
半夏生父の頭を想い出す
めりはりのない梅雨空で缶ビール

鳥取県　岩崎和子

早よ日記書かなきゃ昨日今日忘れ
水やろかいや降りそうね花に問う
なん月で今日何日か聞く夫
世を変えるスクラムですか若い知事

松江市　柏井日出子

船神事川におとこのロマン乗せ
出雲弁歴史講座で沸く夏よ
未使用のルージュロマンをかきたてる
おもいでの海きらきらと島を抱く

松江市　相見柳歩

絵手紙の中間色も主人公
プロポーズ未来は君の胸の内
裁いてる人もあの世で裁かれる
またゼロに戻って恋をやり直す

出雲市　川島和歌子

優しさに花一輪の無人駅
花束を貰う米寿の祝い膳
薄着してお洒落の積もりが風邪を引く
遠い日の足跡辿る古日記

宇部市　高山清子

毒舌に思いやる愛秘めている
白黒を付けてじんわり痛む胸
話しても無駄と解ってつい話し
老人会過去の肩書幅きかせ

雲南市　福間博利

梅雨の雨ひとり静かなヒルの酒
安らかな寝息聞きたくお付きあい
お似合いと言われた柄がつきまとい
昨日今日チャイナの風に攻められる

雲南市　菅田かつ子

ごみ袋突ついて酔うている烏
やさしくてピンチに強い割烹着
お互いに頑固になってきたふたり
両方に聞けばそれぞれ訳があり

安来市　原煩悩児

両耳に残る微力をいとおしみ
不景気に満期保険を有難く
故郷の夕日自慢に旅の空
思うこと数多五体がそっぽ向く

府中市　岩本雅代

趣味多く悔いは残さぬ人生路
新聞が読めて聞こえる未だ達者
古ミシン母の匂いの宝物
道具好き亡夫の遺産がどんと有る

府中市　馬場利子

珍品として仕舞い置く二千札
米を研ぐ明日へ生きる水の音
追伸へほんわかさせる愛の彩
わらべ唄聞こえてきそう無人駅

安全と知ってか庭で鳴くすずめ
かるがもの親子の絆癒される
生きるんだ心で叫ぶ救急車
輸血してまた生意気の出る息子

府中市　藤岡　ヒデコ

廃校の庭のブランコ風にゆれ
なになにと話が遠い祖母の耳
美顔術賞味期限が伸びますか
老妻が腰を伸ばしたフラダンス

香南市　近森　功

十指みな心合わせて夢を抱く
両の手で握った温さ放すまい
他力こそ自力引き出す根の力
優しさを間違い電話から学ぶ

今治市　渡邊　伊津志

迎え火を焚く母の声聞きたくて
錯覚だろう灯籠の火がゆらぐ
横道に逸れて学んだことがある
貝になることもアピールだと思う

大洲市　花岡　順子

無器用な人と涙の中に居る
見つめ合う思いは同じこはく色
眠れない訳は貴方と言えなくて
子に反対されて益々燃える恋

高知市　松尾　憲子

講話聞くときだけいびきかく病
のんびりと隣の喧嘩聞いている
嫁姑仲に積乱雲が湧き
事故現場わざわざ降りて覗く癖

福岡市　楢原　豊興

長電話切るきっかけを与えない
長電話子機に切替横になる
公務員不況の風は微風です
午前様今日の奥方低気圧

唐津市　北村　松風

アクセルを踏んだ途端にドンときた
その言葉聞かないことにしておくよ
老いの耳遠くなったねあの人も
診察は何度いっても加齢から

唐津市　岩崎　實

長生きも幸せなのか温暖化
上を見て励み下見て幸を知る
嘘見抜く妻は刑事の上をゆく
ハードルを下げて余生を楽しもう

唐津市　吉富　節子

今が旬生きる喜びボランティア
悔いだけは残さぬように今を生き
地の底でマグマがうねる総裁選
気がつけば予定は未定何もせず

北九州市　小松　紀子

（阿部ミツ子・藤原ポン吉さんの句は46頁に掲載）

愛染帖

新家　完司　選

エアコンの温度で家庭内別居

（評）性格や価値観の違いは互いに認め合うだけで対処できるが、体質の違いは如何ともし難い。別居できる部屋があってよかった。

堺　市　村上　玄也

控除にはならない犬の薬代

（評）家族の一員なのに扶養家族手当もなく医療費控除もないペット。「人と同等に扱う」ことをマニフェストにする政党はないのか。

東かがわ市　川崎ひかり

嫁姑ひっつかぬはずNとN

（評）確かに、磁石のNにNを近づけると、互いにプイッとそっぽを向く。一つ屋根の下の女と女、仲良くひっつくのは至難。

大阪市　井丸　昌紀

足りてます愛のささやき以外なら

（評）風雪に耐えるための家屋や衣服、そして、食べて行く収入や資産は充分にある。が、「人はパンのみにて生くるにあらず」なのだ。

橿原市　安土　理恵

子が欲しい柿の種でも蒔いてみる

（評）柿の種に「子を産め」と願うのは無理だが、我が子として慈しめば、すくすく育ち、立派な実を結んで親孝行をしてくれるだろう。

栃木市　岡野すみれ

それらしき目鼻立ちなり平家蟹

（評）壇ノ浦で滅亡した平家の亡霊が乗り移ったという平家蟹。甲羅に表れた憤怒の形相は恐ろしいが、落ち武者悲哀も漂っている。

海南市　三宅　保州

つばめの子わたしの軒が出生地

（評）縁あって我が家の軒で生まれたツバメの子。遠く旅立っても生家のたたずまいは覚えているだろう。嬉しいことである。

大阪市　津村志華子

連れ添うたばっかりに来る倦怠期

（評）片想いのままなら、飽きることも喧嘩することもなく、死ぬまで恋心を失わずに済んだのに…。良いことも悪いこともある結婚。

堺　市　荻野　像山

ありがとうございましたと棺おくる

（評）万感を込めた、心底からの「ありがとうございました」。シンプルではあるが、旅立つ人を送るに、これ以上の言葉はない。

鳥取県　山下　節子

定年といっしょにやってくる病
愛人か妻かは見ればすぐわかる

弘前市　髙瀬　霜石

快晴で良かった祝辞述べやすい
大金でないがショルダー斜め掛け
通販のせいにして着る派手な服

堺　市　矢倉　五月

ポケットの穴に棲んでる貧乏神
ハートより見栄を選んで今独り
ご遺影のコピーが揃う通夜の席

河内長野市　坂上　淳司

女らしく水を飲むのはむつかしい
人見知りしながらどこへでも出掛け
バリアフリーでもこける時にはこける

大阪市　谷口　義

白旗を揚げて妻の後につく
美女の愚痴聞けば同情してしまう

高槻市　片山かずお

暇な人の相手するのも暇な人
笹の葉に惚けぬようにとだけ吊るす

鳥取市　岸本　孝子

修繕をすれば僕まだ動けそう
引きつけて打てば心にヒットする

堺　市　大隅　克博

真心を込めてチンした三品目
妄想も混じえ女の勘だとか

西宮市　吉井菜々子

雛鳥が胃袋みせて餌をねだる
ゴキブリを追う妻の目は爬虫類

弘前市　福士　慕情

高知市　小川てるみ
我がままな私にさせたのは夫
動かない夫に育てたのは私

西宮市　片山　忠
悪い事すれば名前がすぐ売れる
無駄遣いこんな楽しいことはない

橿原市　居谷真理子
曇りのち曇り大人の空模様
着ぐるみの中で渡世の汗しとど

鳥取市　土橋　螢
握手した数ほど票が集まらん
安穏の世を騒がせる総選挙

藤井寺市　若松　雅枝
江戸前のうどん私に辛すぎる
酒が出て打ち解けだした初対面

大阪市　萩原　太朔
ぴったりの職がなくなる会社ごと
しぶといぞ不況横目の小商い

西宮市　泉水　冴子
婚活にまだ行けますか八十路でも

枚方市　寺川　弘一
幸福な時に思うと死は怖い

高槻市　安田　忠子
元気な時つい誰にでも会釈する

神戸市　山口　光久
紙屑にも格差があって上中下

大阪市　柴本ばっは
たった一匹だからかわいいてんとう虫

唐津市　坂本　蜂朗
ただいまと言えばうがいをせかされる

鳥取県　平木　公子
赤ちゃんに着けるマスクがありません

八尾市　田邊　浩三
部長も課長も女房もいない縄のれん

芦屋市　黒田　能子
老人の贅沢なんてしれている

大和郡山市　坊農　柳弘
船酔いのくすりにグイとワンカップ

香芝市　大内　朝子
老いるって汗の出る場所まで変わる
生き上手団子虫にもすぐなれる

豊中市　水野　黒兎
すいとんを語るに父の腕まくり
拝啓も敬具も無しに税通知

堺　市　志田　千代
回る寿司またお手つきをしてしまう
新調の喪服葬式待っている

鳥取県　竹信　照彦
足一本折って松葉杖二本
ギブスした足に聞こえる応援歌

八王子市　播本　充子
江戸っ子に訊けば真っ直ぐ行けと言う
計算が得意でいつも揺れている

三田市　堀　正和
パソコンもケータイもなく村八分
手を握るぐらいの恋はまだ出来る

和歌山市　木本　朱夏
おじいさんは徐除にスルメ化しています

大阪市　小谷　集一
半日も貝になり切れない夫婦

京都市　高島　啓子
火を出してからは謙虚になりはった

美作市　小林　妻子
四つん這いで階段降りるのを覚え

鳥取県　斉尾くにこ
問題は意欲脳トレおこたらず

寝屋川市　森　茜
乾杯だ医療費ゼロに過ぎた雨期
孫クーラー私うちわと打ち水で

和泉市　横山　捷也
助走路を掃いて娘を送り出す
ベレーから白髪はみ出す炎天下

和歌山市　古久保和子
ケータイも届かぬ宿の鮎尽くし
廃校へ校門だけの我が母校

藤井寺市　太田扶美代
主婦の座を楽しんでいる梅仕事
何様のつもりでしょう車内化粧

鳥取市　夏目　一粋
家の前に森や小川があり元気
どのように生きてきたのか考える

芦屋市　竹山千賀子
白桃をいたわるように皮をむく
くちなしの香りおいでと窓あける

大阪市　津守　柳伸
バカンスは三食昼寝プール付き

大阪市　古今堂蕉子
信号をきっちり守る変な奴

大阪市　岩崎　公誠
一日を自由に使うぜいたくさ

池田市　栗田　久子
雨の日は掃除する日と決めている

羽曳野市　森下　一知
骨折れた傘も大事に取っておく

寝屋川市　籠島　恵子
コンビニが潰れ目印なくなった

京都市　坪井　孝一
どうしよう避けたい人からの厚意

寝屋川市　冨山ルイ子
何を願い掌いっぱいのサプリ

鳥取市　岸本　宏章
えんぴつの芯が短い喧嘩好き

和歌山市　根田よしこ
円満を保つ同居の楕円形

京都市　三宅　満子
伸びきったゴムには情けなどいらぬ

箕面市　広島　巴子
熱れきらぬうちに売らねばならぬ桃

札幌市　三浦　強一
正直でカーブ投げない古い父

大阪市　榎本日の出
チューハイが嘘の手助けして困る

和歌山市　磯部　義雄
流れ星亡父の伝言かも知れぬ

寝屋川市　太田とし子
夜中ふと生きる思案に目が覚める

岸和田市　井伊　東吉
テポドンの打ち損ないが恐ろしい

鳥取市　大前　安子
山道で出会う人には声掛ける

河内長野市　村上　直樹
のんびりと一人で冷酒夏の宵

大洲市　花岡　順子
草茫々かぼちゃも負けず花をつけ

西宮市　藤本　直
掘りたての芋いきいきと語り合う

大阪市　大川　桃花
負けたって君の努力に金メダル

大阪市　伏見　雅明
忘却と書いて悲しみ乗り越える

加西市　金川　宣子
分かち合う人あり丸い西瓜買う

堺市　奥　時雄
日本の夏甚平と青畳

鳥取県　加賀田志延
ＣＭの時間茶を淹れおトイレへ

羽曳野市　徳山みつこ
スーパーで見た素顔にもお辞儀する

明石市　糀谷　和郎
水だけでしぶしぶ咲いた花の種

富田林市　片岡智恵子
田舎にも蛙飼う日がやって来た

大洲市　中居　善信
百均のひとつ買うにも迷ってる

倉吉市　松本よしえ
耳鳴りでない本物の蝉が鳴く

河内長野市　黒岩　靖博
泥棒に留守を教えている電話

自家野菜孫に送れば高くつく
総理より幸せですナ昼寝つき

締切りに追われ速達多くなる

三歳児躾吸い込む息してる

除いてもハナ毛と欲はすぐ伸びる

絵画展画家の呟き聞いている

肩書は専業主婦様補佐係

助け乞う電話に止まる思考力

好きなことといくらやっても疲れない

祝儀袋出せる幸せ年金者

懐メロの歌手が歌えてほっとする

腹の立つ夫へ炊いているお粥

クールビズだとステテコが譲らない

なんとなく入って消えた給付金

十月十日泳いだ海のものがたり

何が何でも一つ勝たねば甲子園

この胸も乳房の張った過去がある

米子市　青戸　田鶴
目を洗い古い器を出して見る

三田市　北野　哲男
喜寿の今抛物線のどのあたり

和歌山市　田中　みね
あいまいにされてたまるか手術台

鳥取市　土橋はるお
慌てると貰える物が貰えない

米子市　白根　ふみ
ふんわりとオムレツBGMまじり

堺　市　羽田野洋介
形だけ分かっていても書けない字

八王子市　川名　洋子
とりあえず尻馬に乗る保身術

唐津市　山口　高明
コーヒーの美味い店だが無愛想

松江市　安食　友子
我慢して強くしました面の皮

堺　市　加島　由一
子のことになると眼鏡はくもりがち

東京都　岸野あやめ
無気力は低血圧のせいらしい

弘前市　高橋　岳水
定職の飯固い日もやわい日も

倉吉市　山中　康子
わくわくと花火にのぼせ人に酔い

高槻市　佐甲　昭二
のろのろとしてはおれない持ち時間

西予市　黒田　茂代
水を買う笑いごとではなくなった

枚方市　小林　わこ
ライバルから思いがけない美味い水

吹田市　穴吹　尚士
格安でいかがと葬式のチラシ

鳥取市　吉田　弘子
定期預金崩さぬほどの旅プラン

三田市　福田　好文
少しずつ飲めと父の日酒届く

吹田市　太田　昭
お互いの愚痴を肴に酒を酌む

大阪市　吉内タカ子
趣味捨てず良かった私の命綱

泉佐野市　稲葉　洋
底打ちの音が届かぬ小商人

三田市　上垣キヨミ
ニューハーフに女らしさを負けている

今治市　渡邊伊津志
月光が癒し与えて肩をもむ

鳥取市　土橋　睦子
点滴を受けて友達泣いている

大阪府　澤田　和重
吉報を運んでくれた赤バイク

加東市　中上千代子
ピーマンのみどり話題にする平和

茨木市　藤井　正雄
失敗を余興でしたで幕下ろす

和泉市　西岡　洛酔
人生の余韻残して日が暮れる

青森県　松山　芳生
滑り台の子が溶けていくあかね雲

鳥取県　細田　裕花
二人分のレシピになった台所

唐津市　樋口　輝夫
肩叩き惜しい惜しいと追い出され

倉敷市　撰　喜子
新人を教えるうちに教えられ

枚方市　伊達　郁夫
ゴミ袋昨日の私覗かれる

河内長野市　針生　和代
錆びついた脳をパズルで磨いてる

堺　市　遠山　唯教
心配が飛んでしまった青い空

八尾市　生嶋ますみ
おだてられまだ歌います踊ります

姫路市　古川　奮水
杉玉があいさつをする蔵の門

大阪市　奥村　五月
台所仕度しながらコップ酒

米子市　小塩智加恵
夏が来た地産の西瓜ドバイまで

大阪府　籾山　隆盛
ふるさとの貝殻節に励まされ

奈良市　加門　萌子
ふうもんに松露故郷に風馳せる

麻生路郎句抄

（句集『旅人とその後の作品』から）

大空

愛慾

子沢山子に使われる年になり
すべりんこ親は涼しいとこで待ち
胃病の子絵本ばかりをあてがわれ
大男を母はこの子にしてしまい

朝陽の令閨を悼む

子のことで最後の唇が動きしか

一心寺にて

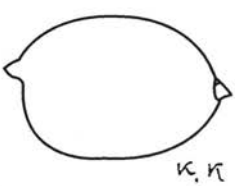
父を求め子を求めたり骨仏
母親は人出を聞いただけでやめ
ヨーヨーで待つその親々の立ち話
息子という名で五十に手がとどき
父としてエスカレーターの先に立ち
子沢山僕の枕は何処へいた
母の事思わぬにあらず泊って来
帰朝して子の寄りつかぬのもさみし
膳に左して子の頭子の頭
思わざりき娘が二十四にもなり
父の名をよびすてにする迷子の子
父ひとりインフレをおそれてありけり
また辞職ですかと妻子驚かず
お互いの女房の話だけは避け
この村も非農家の子に写生され
やけくそで生んでるような子沢山
ネクタイが一本ぎりの父となり
落第かそうかと親は言ったきり

共選欄

檸檬抄

（薫風書、カットとも）

投句数　698句



「楽器」　牛尾緑良選

ピーヒャララ若者いない村祭り　川西市　西内　朋月
三味太鼓けいこ始まる阿波の夏　八尾市　宮崎シマ子
世渡りが下手で響かぬタンバリン　西宮市　山本　義子
青春の思い出ポツンとあるギター　笠面市　出口セツ子
亡夫の尺八時どき夢で聴く　八尾市　村上ミツ子
ピアノからちょうちょが生まれ音が舞う　豊中市　水野　黒兎
バイエルが続き欠伸をするピアノ　高槻市　片山かずお
待ち受けに孫が奏でるヴァイオリン　大阪市　佐藤　忠昭
楽器にはうそはつけない気のみだれ　東かがわ市　清川　玲子
虫も小鳥も耳を澄ませばみな名器　和歌山県　森下よりこ
置き去りの楽器と余生語り合う　和歌山市　福井　菜摘
爪弾きのギターで秋を引き寄せる　松江市　三島　淞丘
少年のあの日に戻るハーモニカ　大阪市　津守　柳伸
子等巣立ちピアノ応接間でひとり　美作市　小林　妻子
禁じられた遊びギターを弾いた日よ　鳥取市　春木圭一郎

「楽器」　髙田美代子選

行列の一番先で吹くラッパ　富田林市　大橋　鐘造
空腹の戦後を偲ぶハーモニカ　羽曳野市　森下　一知
シンフォニーコントラバスはお父さん　寝屋川市　森　茜
備長炭転がってゆくハーモニー　和歌山市　堀　冨美子
爪弾いてぽろり心がとけてゆく　岩出市　藤原ほのか
楽器にはとんと無縁の蟻でいる　高知市　小川てるみ
軍隊で喇叭吹いてたことはある　美作市　小林　妻子
雄叫びをあげるボンゴの野性音　鳥取県　斉尾くにこ
古里の夕陽の中で銅鑼が鳴る　島根県　伊藤　寿美
魂をわし掴みする津軽三味　八王子市　川名　洋子
給付金わたしウクレレ買いました　神戸市　田中　章子
街角の目印になる楽器店　尼崎市　長浜　美籠
妻の打つ太鼓も愚痴も胃にひびく　紀の川市　宇野　幹子
ピーヒャララ若者いない村祭り　川西市　西内　朋月
尺八を奏す記憶の中の父　神戸市　山田婦美子

娘の恋の行方二階のピアノソロ　羽曳野市　吉川　寿美
ヴァイオリンの稽古我慢できかされる　神戸市　山口　美穂
最果ての地で唄い継ぐごぜの三味　横浜市　菊地　政勝
ハーモニカなら吹けますよ赤トンボ　可児市　板山まみ子
一管の笛が鋭い能舞台　東京都　岸野あやめ
満天の星に聴かせるハーモニカ　神戸市　山崎　武彦
鍵盤の指冢事なんかしてません　犬山市　金子美千代
打てば響くあなたの胸は大太鼓　枚方市　小林　わこ
演奏会カスタネットでまた出ます　西宮市　足立　茂
故郷へ若者を呼ぶ笛太鼓　神戸市　木村貴代子
大不況いつまで続くベース音　尼崎市　藤井　宏造
はしかかも知れなかったな子のエレキ　堺　市　矢倉　五月
娘のピアノ祖母がひきますドレミファソ　岸和田市　中岡　香代
雨の日に大正琴は悲し過ぎ　大阪市　松尾柳右子
尺八を奏す記憶の中の父　神戸市　山田婦美子
ハモニカの音色時計を逆回し　大阪市　森田　明子
政治家のラッパ暮らしを掻き回す　河内長野市　山岡冨美子
失恋の経験をした娘のピアノ　藤井寺市　太田扶美代
指揮棒に大太鼓でも逆らえぬ　鳥取市　岸本　孝子
シンバルを叩きたくなる時がある　奈良市　岩本　浩二
鉦叩く手で汗も拭く夏祭り　和歌山市　福本　英子
楽器屋の前青春が甦る　札幌市　三浦　強一
給付金わたしウクレレ買いました　神戸市　田中　章子

若き日の亡父がまだいるマンドリン　羽曳野市　福田　悦子
まだ音は出そうだ錆びたハーモニカ　高槻市　佐甲　昭二
口笛が上手で鳥が寄ってくる　米子市　白根　ふみ
誰にでも馴染む陽気なタンバリン　府中市　藤岡ヒデコ
スクイズで五点奪えと笛太鼓　唐津市　仁部　四郎
アカペラで私一人のコンサート　堺　市　志田　千代
胎教へおもちゃのピアノ弾いてます　大阪市　川端　一歩
習わせてピアノ買うたら辞めさせて　大阪市　古今堂蕉子
街角の流しのギター思い出す　羽曳野市　松本　静子
オカリナを吹いて一人のにごり酒　三田市　北野　哲男
満天の星に聴かせるハーモニカ　神戸市　山崎　武彦
オルガンの和音がずれる嫁姑　吹田市　須磨　活恵
ドドレレミミソばあちゃんのハーモニカ　八尾市　高杉　千歩
命とはこんな音かと大太鼓　静岡県　薗田　獏沓
キャンプ村ギターが一夜眠らせず　神戸市　伊勢田　毅
麦の笛人は貧しい村と言う　橿原市　居谷真理子
竹山の叩く三味から吹雪き出す　弘前市　高橋　岳水
舞妓さんが叩くと太鼓まで祇園　四條畷市　吉岡　修
張り詰めた空気を破る陣太鼓　大和高田市　鍛原　千里
楽器屋で破れジーパン雨宿り　東大阪市　笠井　欣子
カラオケは飽きた今度は生バンド　河内長野市　坂上　淳司
炎天の木陰ライブの一滴　八尾市　宮西　弥生
一管の笛が鋭い能舞台　東京都　岸野あやめ

御浄土の音色はきっと笙の笛　和歌山市　堀　冨美子
羽化をするために楽器と夜を明かす　鳥取市　福西　茶子
鼓笛隊みんな主役の児が奏で　羽曳野市　吉村久仁雄
でんでん太鼓母に抱かれていた記憶　和歌山市　古久保和子
油断してコントラバスに似たヒップ　和歌山市　武本　碧
父に習った一曲だけのハーモニカ　吹田市　太田　昭
身の内の楽器を鳴らすイヤリング　大阪市　小泉ひさ乃
笛吹けば踊ってくれる友がいる　海南市　三宅　保州
縁遠い楽器幾つか子供部屋　川西市　日野岡和之
ママの口今日も打楽器管楽器　大阪市　岩崎　玲子
終焉のオカリナ耳に届いたか　尼崎市　春城　年代
ハーモニカ故郷は荒れたままである　紀の川市　辻内　次根
妻の打つ太鼓も愚痴も胃にひびく　紀の川市　宇野　幹子
誰にでも馴染む陽気なタンバリン　府中市　藤岡ヒデコ
三味線を津軽で聴いて津軽知る　大阪市　田浦　實
シベリアの命とかえたハーモニカ　八尾市　宮西　弥生
ホーム慰問カスタネットに迎えられ　尼崎市　長浜　美籠
公園でオカリナを吹く哲学者　堺　市　柿花　和夫
シンバルを一打私の幕下ろす　西宮市　亀岡　哲子

秀　句

麦の笛人は貧しい村と言う　橿原市　居谷真里子
進軍のラッパ平和に焦がれてた　香芝市　大内　朝子
前向きに前向きに鳴るタンバリン　八王子市　播本　充子

名人が弾くとはらわたまで踊る　篠山市　遠山　可住
廃校のオルガンの音風の音　紀の川市　辻内　次根
少しだけセレブフルート吹く乙女　富田林市　古田　千華
失恋の経験をした娘のピアノ　藤井寺市　太田扶美代
さみだれに琴の和音がとけていく　枚方市　伊達　郁夫
気晴しで叩かれたくはないドラム　豊橋市　藤田　千休
音感が無くて楽器が背を向ける　雲南市　毛利　幸
ピアノ残響　満天の星となる　米子市　野坂　なみ
七年間ピアノの蓋が重くなり　西宮市　吉井菜々子
ウクレレを弾いて輝かせる銀河　京都市　高島　啓子
二胡の音にモンゴルを吹く風を聴く　富田林市　石橋　未知
お隣のピアノは知らぬ曲ばかり　堺　市　奥　時雄
鍵盤の指家事なんかしてません　犬山市　金子美千代
天才の楽器バリーの雨も聞き　山口県　安平次弘道
調律師泣かせの亡母の古ピアノ　大阪市　柴本ばっは
公園でオカリナを吹く哲学者　堺　市　柿花　和夫
それからのハイジはホルン吹いている　八王子市　播本　充子
オルガンは昔話がとても好き　鳥取市　倉益　一瑶
世渡りが下手で響かぬタンバリン　西宮市　山本　義子

秀　句

その内に博物館にゆく楽器　藤井寺市　鴨谷瑠美子
指揮棒の先に楽器の森がある　弘前市　斉藤　劦
終焉のオカリナ耳に届いたか　尼崎市　春城　年代

誹風柳多留一一篇研究 49

伊吹和男・山田昭夫
増田忠彦・山口由昭
小栗清吾
清　博美

365 **もち花でこまかそうとハふといやつ**

伊吹　目黒不動尊の縁日で買ってきた餅花を土産にして、近くの品川遊里で遊んできたのをうやむやにしようとするのは、まったく図々しいやつである。

　餅で仕た花に女房の嵐也　五一23

清　賛。

366 **此村の娵で合羽ももって居る**

伊吹　無粋な合羽を着て馬で来る田舎嫁。江戸での雨の嫁入は、駕籠や傘である。だから江戸からの嫁でなく、ここの村出身の嫁。

山田　賛。ただ「合羽も」の「も」が気になる。みの笠の他に「合羽も」持っている嫁、つまりやや裕福な家から来たという事ではないか。それでも江戸には劣る。

小栗　賛。村の雨の嫁入りは合羽で……というだけではないか。

清　山田説賛。

367 **大三十日手をくんで居るすまぬ事**

伊吹　皆が忙しく立ち働いている大晦日に、何の役にも立たず無為に時を過し、ただずっと腕を組んで居るのは、誠に申訳ないことである。四文字熟語で言うなら拱手傍観。掛取りが多く来るのにも関わらず、金の工面が全く出来てないというのが真意であろう。

　大三十日くそおちつきで済ぬなり　明四礼7

山田　賛。「拱手傍観」では、勿論「済まぬ事」ですね。

山口　賛。解っていてやっている風がある。

小栗　賛。「済まぬ」という言葉は、現代語にない微妙なニュアンスがある。

清　賛。

368 **蚊にくわれたのもうらみの数の内**

伊吹　かねて思いを寄せていた娘に、夜這いを敢行した。しかしその決意も空しく、あっけなく振られてしまった。おまけに蚊にたくさん食われた。娘に対する恨みばかりでなく、蚊に食われたのもそれに加わる。

　首尾のふてあったら男蚊に喰れ　宝13宮1

増田　賛。忍ぶ恋の女の恨み言とする解も可能か。

小栗　賛。「不首尾の恨み」という深刻な題材に、蚊に喰われるという滑稽な題材を加えたおかしみ。

清　賛。

369 **ころんだをあんざんの後はなす也**

伊吹　妊娠中に転んだ新妻。赤ん坊を無事に

出産してから、そのことを近親のものに伝える。身内に心配を掛けないという思いやり。

ころんだを里の母へハひしがくし　明四仁2

清　賛。

370　**信濃ものにつこりとして喰かゝり**

伊吹　川柳の約束事として、大飯食らいとなっている信州からの季節労働者。食事を始めるときには、嬉しそうににっこりと笑ってから食いだす。

うづ高くもつたをおしな五はいくい　七28

清　賛。

371　**御待ちかねだろうと舩ではかま取**

伊吹　吉原などでの宴会に船で向っている男。待ち合わせの時間にすこし遅れているので、さぞ首を長くして待っているだろうと、船の中で袴を脱いでいる。武士とも大一座の喪主とも考えられる。

大一座はかまがついて安くする　一四23

372　**いたゝいて茶代をとるハばゝあなり**

伊吹　美人の茶汲み女なら、頂くという素振りはしない。うやうやしく茶代を取るのは水茶屋の婆あをおいてほかにない。例句は浅草二十軒茶屋。

二十けん年よりか居て目立つなり　安四鶴4

清　賛。

373　**大津絵のやうに王照君を書キ**（ママ）

伊吹　王昭君は、中国前漢の元帝の官女。匈奴との親和のため、呼韓邪単于（こかんやぜんう）に嫁した。その候補を選ぶため、元帝は宮廷絵師の毛延寿に後宮の官女すべてを描かせたという。匈奴へ行きたくない官女たちは、賄賂を遣って美しく描かせた。自身の美を誇る王昭君は賄賂を渡さなかったので、大津絵の鬼のように毛延寿が描いただろう、という想像句。

王照君ハい、顔をよこされる　六六23

山口　賛。最近の大津絵には藤娘など美人風もあり。

清　賛。

374　**びいどろのかんさし村のはで娘**

伊吹　ビイドロは、ポルトガル語でガラスのこと。ガラス細工の簪をしている、村一番の派手娘。

はで郷風にもへ出るひぢりめん　七二13

清　賛。

375　**とうらしやいあんともせぬとせなあいひ**

伊吹　馬をこわがる人たちに、どうぞお通りください何もしませんから、と田舎育ちの兄いが言っている。江戸っ子の創作した田舎言葉が味噌の句。

通らしやい無事な奴だと馬子ハいひ　九26

山口　賛なれど細い道で若い娘をからかっているようにも思える。

清　礎賛。

376　**乳もらいへ気の毒そうに芝居也**

伊吹　母親は病気なのか生き別れなのか、乳幼児に乳をやれない状態。余った母乳を求めて父親は東奔西走する。しかし先さまにも都合があり、今日は芝居見物とか。留守のものが気の毒そうに伝える。

内の子の乳をはなさぬ気のとくさ　一二24

乳もらいはがつかりとして花見かへ　九8

清　賛。

予　定

川崎ひかり選

五時からの予定にいつもビールあり　圭一郎
しがらみをみんな捨てたらゆく予定　日の出
予定にはなかった声がうら返る　菜美
予定だけ見れば楽しい夏休み　千歩
白寿まで生きる予定の四股を踏む　昌鼓
予定外の客にあわてる皿の数　彩子
予定にはない逆縁で涙枯れ　麗
ひとつずつ予定崩れる老いの足　シマ子
秘書にさえまだ言うてない別予定　正雄
予定ではすき焼きだった冷奴　菜々子
宝くじ当ててハワイへ行く予定　いさお
悠悠自適の筈がつましく灯を点す　賢子
こっそりと満期予定の旅プラン　弥生
まだ生きる予定きっちり飯を食う　ふみ
予定外成田離婚で娘が戻る　毅
にんにくを控える明日のスケジュール　美千代
予定にはなかった妻が杖をつく　可住
定年で左団扇のはずだった　強一
内定のとり消し狂う子の門出　(奥)五月
カレンダーは妻の予定を先に書く　一風
カレンダーの赤丸妻の明日が住む　(樋)輝夫
ぎっしりと予定を詰めて妻元気　ばっは
予定みな今は女房に合わせてる　(矢)五月
僕の予定妻の隙間に押し込まれ　かずお
行き先を妻が勝手に書きかえる　遡行
明日は明日今日のレールをひた走る　慕情
予定表陽の目見ぬまま丸められ　あやめ
予定では左団扇となる手相　みね
母と娘の予定に父は外される　俶子
医者へ行く合間を縫ったスケジュール　時雄
予定の中へ割り込んできた介護　扶美代
ご都合を聞かれ白紙の手帳出す　哲男
終章へ恋の予定は組んである　朝子
診察日以外は予定ありません　(稲)洋
難しい顔して開く予定表　准一
福の神の予定表から落ちこぼれ　セツ子
予定には除外しておく花柩　幹子
佳
生きている予定で役を引き受ける　陽子
虹色に埋める私の予定表　美籠
年金日メロン仏に買うつもり　茶子
何時だって白紙女神の予定表　充子
平和日本予定通りにバスが来る　霜石
人
予定にはなかった今日のお葬式　螢
地
予定より長生きできてからの欲　(安)泰子
天
次の世もこの子の母になる予定　渡辺富子
軸
予定なしアポなしふらりひとり旅

新　聞

加島由一選

新聞に載った句姉のスクラップ　キヨミ
コラムから生きるエールを受ける朝　富子
新聞に私の好きな詩がある　絹子
新聞の真っ先に見る株価欄　茂代
川柳のネタを新聞から拾う　圭一郎
新聞の見出しだけ読み家を出る　一粋
新聞の先ずは三面記事あたり　みね
ふるさとのニュース日記に貼り付ける　昌鼓
新聞の隅あたたかい記事に会う　ふみ
新聞の投稿欄で知る安否　強一
二日分新聞を読む旅帰り　哲男
新聞で社の動向を知る社員　玄也
雨風に負けず新聞やってくる　慕情
夕焼け小やけ僕の夕刊まだ来ない　芳生
朝刊が寝覚めの脳を呼び起こす　幸子
新聞の隅で同年逝きはじめ　可住
新聞など見たくもないと思う日も　のり子
することが無くて新聞読んでいる　セツ子
くしゃくしゃの新聞妻は読まされる　(志)千代
朝刊のコラムにパンが焦げている　一知
新聞もチラシも妻が先に読み　正勝
新聞のチラシが決める晩御飯　浩二

新聞をたたみ不況に立向う　大朔
朝刊をまた読みなおす勝試合　まみ子
妻は先ず株の欄から目を通す　一風
新聞を隅まで読んでヨッコラショ　アキ
新聞を広げ夫の生返事　美千代
忙しい朝は新聞斜め読み　武史
夕刊をそっと差出す仲直り　みつこ
新聞を開いて朝が動き出す　末吉
その話題いただきましょうスポーツ紙　(安)泰子
騒がせた割に小さいお詫び記事　房枝
読めぬのに英字新聞のぞき込む　ばっは
談合の見本みたいな休刊日　正和
善し悪しを三面記事が押しつける　螢
新聞が世論の闇を裏返す　くにこ
繰り返し読めば社説が色を出す　克博

佳

新聞を丸めごきぶり追いまわす　喜子
朝顔をほめて朝刊太郎去る　正雄
地方紙のコピーも添える陳情書　充子
新聞に俺が世論という驕り　かずお
新聞を持って掃除機逃げ回り　遡行

人

新聞を開くブーンと火の匂い　霜石

地

新聞に包んで捨てる私生活　恵美

天

新聞を乗せて五キロを漕ぐペダル　福西茶子

軸

新聞のいろに染まらぬ間合い読む　忠

ぴったり

安土　理恵選

千円のシャツがわたしにフィットする　霜石
ぴったりの水着記録を押し上げる　二英
夏ばて防止にぴったりのキムチ鍋　螢
ぴったりとまではゆかない宿浴衣　實
ぴったりのデュエット花が咲きました　茂代
朝ドラが済むとかかってくる電話　正和
ぴったりと寄り添うモノクロの写真　アキ
アレが虫の報らせだったか訃が届く　寿美
ぴったりと雨戸閉めても不安な夜　幸子
割勘をいつもぴったり締める腕　公誠
ぴったりと根も葉も付けた二枚舌　道子
夜遊びをぴったり止めて老けてきた　玄也
ぴったりな人だと写真持ってくる　(金)宣子
酒タバコぴったり止めて惚けている　遡行
ぴったりと言われその気になってくる　朝子
苦労した証ぴったり息が合う　一粋
ぴったりと寄り添う影がうとましい　菜摘
弟が丁度いいよと着て帰る　不二
ぴったりの夫婦と見せた演技力　倫子
あっち向いてホイぐらいの夫婦仲でよい　(志)千代
ぴったりとそばに居るから疲れます　恵美
妻の勘当たって恐れ入りました　忠

ぴったりでないと解った鍋の蓋　(安)泰子
相性がぴったり合ってよく喧嘩　像山
ぴったりと言う仲人の軽い口　蜂朗
スバッツのおばはんみょうに色っぽい　勇
ぴったりか聞くと鏡は黙秘権　克博
省エネの泳ぎぴったり小判鮫　弘風
ぴったりと二番につけている余裕　可住
ぴったりと合せた嘘が火を孕む　克恵
ぴったりとトップを視野に時を待つ　庸佑
族だろと世襲だろうと離れない　修
ピッタリと合った指紋に裁かれる　鐘造
年金の目減りぴったり税の嵩　柳弘
ぴったりの言葉探して辞書を繰る　晴翠
道祖神おふたり並ぶぴったりと　ばっは
ぴったりと金環食の日と月と　黒兎

佳

余命ぴったり医者の見たてが悲しすぎ　俶子
御馳走をめがけて来たか吟醸酒　菜々子
水を得た魚が張り切る社の人事　慕情
ぴったりを探す生涯適齢期　弥生
悪役にピッタリなのが傍に居る　美義

人

吸盤があるのか満点の着地　充子

地

ぴったりと寄り添い試歩の杖となる　和枝

天

実直に生きて収支もぴたり合う　高橋岳水

軸

張り付いています気前のいい人に

初歩教室

題 ― グループ

鈴木公弘

川柳は「着想」と「表現力」によって出来不出来が決まると書いたことがあります。極端に言えば着想には感性、表現力には理論性が求められていることになりますが、五W一Hを取り込むことは無理だとしても、せめて作者の背景が見えるよう、工夫して描いてほしいものです。そのような観点から以下、点検していきます。

【気持ちが前のめりになってしまった句】

原 メンバーにじいちゃんもいる草野球　イ　セ

添 祖父ちゃんもメンバーにいる草野球

わが家のチーム編成を述べておられると判断して「祖父」に変えました。家族ぐるみの楽しさが一層明確に伝わります。

原 盆支度先祖グループ仏壇へ　ミヨノ

添 盆支度してグループのほとけ待つ

原句は残念ながら未整理状態ですが、ほとけ様になられたご先祖が一団となって盆帰省される…という考え方は、見たことがないだけに、そうかもしれないと思わせて、たいへんユニークな発想です。

原 おばちゃんはグループ組めばパワー出る　振　作

添 おばちゃんはグループ組んでパワー出し

原句のままですと、おばちゃん（作者）が自分のことを詠んだように見えます。作者は男性ですから、他人事の句になるとしても、なるべく手元に引きつけることが大切です。

原 グループはゆかりの地知り散歩道　なつみ

添 グループの足はずませるゆかりの地

原 グループで還暦女温泉旅　久　子

添 還暦の旅温泉へ群れて行く

この句において重要な部分は、グループが「還暦」を迎えた人の群れだという点でしょう。その記念の旅に性別を問う必要はないと思われます。

原 政策グループとどのつまり派閥　柳　歩

添 政策のグループという派閥です

川柳は一行詩文芸ですから、ある言葉を強調したり全体の論調を整えたり…といった特別な目的をもって合計十七音字の作品（定型の例外）にすることは認めてよいと思いますが、他面ではリズム文芸であるということも忘れてはいけません。

原 グループで芭蕉生家の伊賀の旅　俊　子

添 グループの芭蕉生家の伊賀の旅

原句のままではたんなる旅の報告になってしまいますので、「の重ね」という技法を使いました。これも「芸」の一つです。

【川柳に詠んだ背景が見えにくい句】

原 良くやったとほめられうれし福祉の会　玲　子

添 福祉の会できて嬉しい友といる

原 グループでいつかは行くぞ温泉に　弥　生

添 温泉へ行くグループの手を探す

原 グループの中で際立つのが一人　秋　星

添 グループの目立ちたがりに手がやける

原 侍がチームに分れ競い合う　紀　雄

添 社運をになうグループの戦士たち

主張を明確にするため七五五に変えました。

原 グループの実演さすが満足す　美紗子

添 美しく舞うグループのフラミンゴ

なんの実演かを示すべきです。ここでのフラミンゴはあくまで一例でしかありません。

原 グループで灰汁を楽しく出し会える　タカ子

添 グループは楽しく灰汁を出しあえる

【あと少しの配慮がほしかった句】

原 棚田から大人になったおたまたち　安　子

添 棚田から大人になった蛙たち

原 流行を追って無いのに風邪をひく　エ　ミ

添 流行を追わないはずが風邪をひき

原 グループはどこか歪な丸になる　克　博

添 グループが歪な丸になってくる

原 グループの中に雀が一羽いる　絹　子

添 グループに雀が一羽いて困る

原 グループの顔ぶれみての返事する　開　子
添 グループの顔ぶれをみて返事する
原 団体で脱ぎ捨ててくる旅の恥　大　朔
添 脱ぎ捨ててきたグループの旅の恥
原 介護され語るグループ声高く　清
添 介護受け語るグループ声高く
原 虎ファン優勝目指し吠えつづけ　健　柳
添 優勝を目指して吠える虎のファン
原 グループで笑い楽しい午後のお茶　弘　泰
添 グループの笑い楽しい午後のお茶
原 グループ旅行何食べるかで阿彌陀くじ　亜希子
添 グループ旅行なに食べるかで阿弥陀くじ
原 グループから離れたやつがねらわれる　勇
添 グループを離れた奴が狙われる
原 のたり気ままたまのグループ良いけれど　みち代
添 グループよりのたりのたりの一人旅
原 グループのワンマン役は非常勤　いさお
添 グループのワンマン職は非常勤

【入選の可能性がある句】

集団下校道草したり走ったり　冷　子
グループで身支度をする渡り鳥　義　雄
渡り鳥グループごとに旅立ちぬ　ま　す
地方分権取り組む知事のニューチーム　律　子
若者のグループだから隅が良い　恵　美
お喋りがグループの輪に浮いて見え　節　子
グループが出来てリーダー決まらない　治　子
グループに男と女いて元気　堅　坊
グループの飲み会話しすぐ決まる　正　二
無党派を味方につけた当選者　憲　司
グループ写真和気あいあいのチーズ顔　り　こ
グループの世話で私が育てられ　孝　代
あちこちの群れの匂いを嗅いでいる　志　延
グループに善人が居て迷わない　孝　明
グループに入りたくない蟹の愚痴　幹　子
グループが見上げて目指す星がある　くにこ
グループの雑魚のパワーに山動く　菜　摘

【入選すると思われる句】

グループに大差がなくて皆平和　道　子
外見はグループの仲良さそうだ　陽　子
戦争を堪えたグループ切れぬ仲　操
集う時おしゃべり無口別々に　綾　乃
グループに分けても混ざる花の種　こずえ
いじめっ子仲間はずれの子を作る　ちづる
ストレスを溜めたグループ縄のれん　智加恵
遠い恋同じ輪にいた共白髪　ヒ　ロ
バスツアー別れ言葉はお達者で　志　郎
グループに入らずひとり旅が好き　利　子
グループでやれば悪事も何のそのすみれ
ティータイムの時間が楽し趣味仲間　宣　子

【佳　句】

おばちゃんは群れたら声がでかくなり　光　弘
グループに聞き役がいて調子づく　嘉　彦
仲よし会グループ名で揉めている　宏　造
グループの噂の的は欠席者　文　代
グループに世話焼きがいて苦労する　唯　教

【今月の推せん句】

政治家は損得だけで徒党くみ　上原酒坊

政治を支配するのはイデオロギーですから、考え方を同じくする者同士がグループを組むのは必然でしょう。しかし、政治信条とは直接関係のない「もの」によって結ばれる場合があるのも事実。それが悪の温床になるのですね。

グループと呼ばれたくない人と居る　丸山孔一

あの意地悪とだけは一緒に見てほしくないと思っているときに限って同じ扱いをされる…激痛の一つです。

気持だけ娘気分のグループだ　田村周子

イギリスの裁判には、結婚をしたモデルが自分の身体の線を崩したのは夫だとして損害賠償を求めた事例があります。何をか言わんやですが、娘心を持ち続けられる人は美しくて可愛いと思います。

【私の句】

憲法を守るグループ強くして
儲からぬ会社グループから外す

（登載漏れは役員が添削して返送します。）

秀句鑑賞

同人吟　森本弘風

―8月号から

ある日秀句鑑賞をとの依頼の葉書が舞い込んだ。私にはこんな機会はないものと決め込んでいたので驚くとともに、事の重大さを改めて認識し膨大な自由吟「川柳塔」を全部読むのは本当に久し振りだと思いながらもこれも同人の勤めと考え私なりに選ぶことにした。

ワクワクを見事裏切る試着室

福西　茶子

やっとお気に入りの服を見付けワクワクしながら試着室に持ち込んだところ身体にフィットせず諦めると言う事は度々あります。茶子さんもそんな経験を思い出しておられ、未だにあの服がと残念がっている様子がいきいきと表現されています。

病院にご無沙汰すると案じられ

中宇地　秀四

病院の待合室であら元気

伊藤　アヤ子

最近の病院は老人の社交場のようになっています。その事に対する皮肉を上手に詠み込んで居られます。

わたくしを三文判が保証する

加川　靖鬼

本人と分かりますけど判がない

福田　好文

判子万能のこの日本の世の中、特にお役所仕事には腹が立ちますが辛抱辛抱！

あの行進ブリキの兵隊さんみたい

山本　蛙城

春夏の甲子園開会式での入場行進、我々が子供の頃はとつくづく考えさせられるのですが、最近の子供は歩調を合わせての行進などには馴れていないので、この句全く言い得て妙と感心しました。

回覧版お宿りさせぬよう回す

平嶋　美智子

私事ですが今年はご近所の自治会の世話役を仰せつかっています。回覧版を回すと常に帰ってくる日を待ちこがれます。回覧版もお宿り好きなお宅があるようで急ぎの場合はイライラします。この句、回覧版の表紙に使わせて戴き書いておきたい気がします。

青虫が試食してます無農薬

加川　靖鬼

青虫の食べ残し採る庭キャベツ

岩切　康子

昨年の毒餃子以降、我々は一寸食の安全に神経質になり過ぎ、農薬や化学肥料の見直しが叫ばれている傾向にはありますが、今までは見向きもされなかった虫食いの野菜が見直されています。その様を表現して余りある句と思います。

三年目休耕田に見る草種

相馬　銀波

都会に住む私ですが、たまに田舎の方に行くと草がぼうぼうの休耕田を見ることがあります。食糧自給率が四〇％といわれるが、現状での農政の失敗を考えさせられます。

一番機歴史の一歩幕が開き

薗田　獏沓

この句も政治不信の句として読みました。静岡空港からの一番機、喜んでばかりいられません。関空ですら困っているのです。

朝刊の折り込み広告痩せてくる

市丸　晴翠

最近は折り込み広告の量と共に紙質も悪くなっています。細かい所に気がついて、今の世の動きを句に纏められたのは流石だと思います。

殿様も貰う手盛りの給付金

岩崎　みさ江

昨秋以来大変騒がれた給付金ですが、当時私は貰いませんと啖呵を切った人も居ますが、未だに支給を断ったと言う話は聞きません。

給付金一役買ったフルムーン

野口　節子

フルムーンとしゃれた野口さん、この給付金についてはいろいろ用途はあるでしょうが「帯に短し襷に長し」の感は否めません。

仏壇に手を合わせつつ無神論

瀬戸　まさよ

普通は毎朝仏壇に手を合せてはいるものの我々日本人の殆どが無神論者です。

イラク戦争を始め最近の戦争は宗教戦争的な色合いを濃くしています。

しかし我々の殆どが無神論者である事が却って幸いし、戦争に巻き込まれることも少ないのではないでしょうか。

説法も椅子で拝聴高齢化

三宅　満子

それでも先祖を祀るためにお寺へお詣りし住職のお説教を拝聴しますが、歳のせいで長時間の正座に耐えかねますから椅子に座ってと言う結果になります。最近はお寺でも始めから椅子を用意してくれているようです。

長々と経聞いてても救われず

吉岡　修

うまいですね。私も心の隅ではこのように考えているのです。

便利だが老いには使いこなせない

石谷　美恵子

最近の特に電気機器はいろいろと便利な機能が満載されていますが、我々年寄りにはその殆どを使いこなせず宝の持ち腐れになっています。どうも最近の人は「シンプルイズベスト」という言葉を知らないようです。

エコエコと使える物を買いかえる

堀畑　靖子

ごもっともごもっとも！最近は「エコ」と言えばどんなことでも許されるような風潮があります。経済対策とかでエコポイントなるものを導入したり、テレビもアナログからデジタルへ切り替えたりと、本当にこんな事がエコ対策になっているのでしょうか。

さよならを何度言うたか立ち話

山口　美穂

我が家でも訪ねてきた御近所の人との話はこんな状態なのか中々終わりません。また、女友達から掛かってきた電話、一時間は電話が掛けられない状態になり我々亭主族はお手上げの状態に陥ります。

奥さんも花も隣は美しい

平田　実男

とかく他所のものは美しく見えるようです。その結果が。

妻だけは味方と思う勘違い

伏見　雅明

このような勘違いにも気付かずせっせと奥さん孝行をしているのです。男って悲しいものですね。

ハウスから野菜の旬がこわれかけ

高野　宵草

横文字のはびこる花屋四季がない

中塚　礎石

日本の四季は八百屋に並ぶ野菜、花屋の草花を見て感じるという幸せが詩歌にもなっていたのですが、近頃は輸入品やハウス栽培でこの美しい日本の四季の移り変わりを知ることが困難になりました。

歳時記すらも役に立たない時代になりつつあります。本当に淋しい限りです。

最後にトラファンの私としては文句なしに同感した句を

たかが野球されど気になるタイガース

乙倉　武史

アラフォーに頼る猛虎に勝ち遠く

永田　章司

—水煙抄

秀句鑑賞

—8月号から

中村金祥

傷心をやさしく癒す釈迦の笑み

矢野良一

私は、毎日仏壇に手を合わせてから家を出るんですが、昨日の罪、今日の幸、お釈迦さまと目と目が合って落ち着きます。

喪中なり心のドアは半開き

稲村遊子

突然の不幸、喪主ともなれば悲しんでばかりではいられません。ドアを押し開けて与えられた使命をやり遂げるのです。きっとまた心のドアは大きく開かれると思います。

クラス会心の隅にある火種

花岡順子

クラス会に出ると、忘れていた淡い思いが蘇る。初恋もあれば、喧嘩別れもある。しかし、時間が消し去ってくれたと思っていたのだが、時として燃え上がる火種。死ぬまで消えることがない。

人裁く自問自答の灯がゆれる

福井菜摘

いよいよ裁判員制度。やさしい心を鬼にして立ち向かうのです。

そばにいるだけで嬉しいなんて嘘

國實力

「そばにいるだけでいい。」ひと月もたたないうちに尻に敷かれている。でも「うそ、嘘」と言いながら、ついて行くもんです。

給付金受け取りました総理殿

津村律子

色々あった給付金。しっかり受け取らせてもらいました。しかし、もう忘れました。

幼な子は口の中まで可愛いね

荒巻夢

孫は目に入れても痛くない。四人の孫がおりますが、本当にそう思います。一番下の孫なんかは、食べられても痛くないくらい。

近道を抜けて怠惰の風が吹く

西谷悦子

近道ほど怖いものはない。寄り道にこそ、人間を豊かにさせるものがあると信じます。

エコバッグ忘れ小声で袋もらう

小塩智加恵

いつも持ち歩くエコバッグ。大きな声で「持ってまーす」しかし今日は車に忘れました。

突風に帽子とばされバレました

辻村洋子

きちんと整えたアデランス。よせばいいのに帽子まで。でも、バレたらしょうがない。髪の薄い人は、山ほどいますよ。

縄電車いつか独りになる怖さ

高山清子

家族という名の縄電車。一人抜け、二人抜け、今は夫婦の縄電車。レールの坂が年々きつくなります。

何しても合格点をくれぬ妻

岩本浩二

つらいですねえ。でも耐えるしかない。私も補習で、ようやく合格点。がんばります。

無口でも二人でごはん食べてます

宇都宮ちづる

無口でもいい。一緒にご飯をいただける幸せ。きっと心の会話は進んでいると思います。

ありがとう君のヒントの一行詩

福間博利

無口な食事もありますが、鉄砲玉のようにやってくる夕食もあります。しかし、その中から沢山のヒントをいただいております。普段の何気ない会話の中のヒントが川柳となって世に出ていく。これからも、ひとの話をよく聞いて行こうと思っています。

エッセー

川柳の翻訳と国際化

井上桂作

最近、川柳・俳句・短歌などの日本の短詩型文芸に世界が注目しています。そこで国際語とも言える英語を代表例として、翻訳以前に先ず川柳そのものの正確な理解をしてもらう必要があります。川柳の諸相を背景に翻訳においても、川柳の本当の面白さ、おかしさが伝えられたら理想的です。

戦国時代日本にやってきたスペインのフランシスコ・ザビエルは、「日本語は悪魔の言語である」と嘆いていたそうです。それほど翻訳がむずかしいということでしょう。

英語に翻訳する場合、例えば、「ああ疲れた」と「昨日は疲れた」なども字面は同じですが、前者は現在形、後者は過去形で外国人には理解しにくい。同じように「今度来たとき返事します」などの「来た」はたしかに一見「過去」を表すようですが、今度（来た）は未来を意味します。普通口語の日本語では助動詞「た」を添えて、完了を表すと理解しやすいようです。

次は主語と日本語の関係ですが、日本人でも頭を悩ます川柳があります。例えば「テストしてもらった嫁にテストされ」は、夫がテストされているのか、姑がテストされるはめに立たされているのか、あいまいではっきりしない。

さらに単数と複数の決め方ですが、しばし問題になったのが芭蕉の名句「古池や蛙とびこむ水の音」で、小泉八雲や金子兜太は複数派だそうです。このような場合、証拠もなく結論の出ない場合は、その時の文脈から判断するしかないでしょう。

また短詩型文芸の川柳は定型詩であるので翻訳される英語は、日本の原句よりたいてい長くなっています。もちろんスペリングの関係もありますが、意味の補充等もありその原因となっています。

つい十年ほど前、同じ守口のロータリアンの友人から、英語版の川柳雑誌を是非探してくれと頼まれました。その友人の曰くには、「日本語に短縮された川柳は、理解しにくいので、英語でゆっくりと読んでみたい」とのことでした。彼は外国育ちで、医師として過ごしてきた関係からか、日本の古典は理解しにくかったようです。

おわりに、昨年の末『歴史は現在進行形』と題した外交評論家の岡本行夫氏のエッセイを拝見しました。氏は東ヨーロッパのウクライナ共和国のある中学校に請われて、講演に行った時の話でした。皆さんは「日本の芭蕉・蕪村を知っていますか」と聞いたところ、全員手をあげたそうです。生徒達は日本の短詩型文学について、すでに小学校で習っていた訳ですが、日本の中学生に聞いたら、どう答えるか興味ある話です。

どこの国でも地球の温暖化問題で、自然を愛することを学生に教えていますが、ちなみにこのウクライナの中学の学習指導要領には、「自然を描写して詩を詠む日本人の国民性を学ぶことにより、ウクライナ人とは違った日本人に対する尊敬の念を養う」となっているそうです。長い間旧ソビエット連邦の圧政に苦しんだこの国も、子供の教育には随分と力をいれているのが分かります。

歴史小説家の司馬遼太郎は、軍部が指導した軍国主義の時代を『魔法の森』と呼んでいましたが、その時代は別として、近代に至る日本の文化と国民性にはすばらしいものがあったと述べていました。川柳もまた私共日本人が世界に誇る貴重な文化なのです。

エッセー

『川柳雑誌』と鶴彬

木本朱夏

麻生路郎によって『川柳雑誌』が創刊されたのは、大正十三年二月十五日である。敗戦真近の昭和十八年十二月号（通巻二三九号）でひとまず終止符がうたれたが、昭和二十一年八月号から再興の途が開かれることとなる。

昭和四十年七月七日、路郎はこの世を去り、通巻四六〇号をもって『川柳雑誌』は終刊。『川柳雑誌』創刊号以来の同人作品欄「川柳塔」を誌名とした『川柳塔』は、昭和四十年十月に創刊され、二〇一〇年十月号をもって両誌通巻千号の金字塔を打ち立てる。その千号を記念すべく『麻生路郎読本（仮称）』を出版する運びになっている。

『読本』における私の担当は『川柳雑誌』創刊号から戦争による中座となった、通巻二三九号までの路郎の文章を読むことである。

感想・評論・研究・募集句・創作等々……、堅い文章から肩の凝らない読み物、漫画、コントなど盛り沢山な誌面の隅々に、路郎のこだわり目配りが効いている。

戦争に向かって突き進む激動の時代、川柳界が文学報国会に一本化されていく流れの中で、自らの信念をもって孤塁を死守しつつ、『川柳雑誌』発行に全人生を捧げた路郎の矜持に私は深い感銘を覚える。

折に触れて『川柳雑誌』を紐解く。『川柳雑誌』は玉手箱であり、宝石箱でありビックリ箱である。意外な発見がある。今回は鶴彬の文章を発見した。

昭和二年三月号の「感想・評論」欄に喜多一二の筆名で「短詩時代来る」という評論がある。これは一叩人編集の『鶴彬全集』にも収められている。

因みにこの評論の掲載誌名を「鶴彬全集」の目次では『川柳時代』と間違えている。正しくは『川柳雑誌』である。

これが『川柳雑誌』の中の彬の唯一の文章とされていた。この評論は未完として終わっているが、その続きが次号の四月号に掲載されていたのである。

執念をもって鶴彬を追いかけた一叩人が、この文章を見落としていたのが不思議である。見落とされていた続編の全文を現代仮名遣いに改めて転載する。

「短詩時代来る」　　喜多一二（きたかずじ）

（一）

さて筆をひるがえす。

かって人類は科学を創造した。この科学は今や人類を支配しつつある。

横暴なる科学時代が来たのである。科学時代は人類の不幸時代である。

科学時代はパンを追いつつ人生を浪費して行く…消散さして行く争闘時代である。

『稼ぐに追いつく貧乏なし』の生命命題が『貧乏に追いつく稼ぎなし』に書き換えられたる悲痛なる時代が科学時代である。

食うために生きるか
生きるために食うか
さらに
食わんがために働くか
働かんために食うか

こうした模索さえ奪われた時代が科学時代である。科学時代はこうした模索の『時』を奪いさらにこうした思索の無駄であることを強いる。時代は思索を失った懐疑混沌時代である。そしてそれが近代的象徴である。

思索なきところに何物もない、端的な刹那的な瞬間燃焼があるばかりである。だから思索を奪われた十九後半世紀以後民衆は、電車の中に立ち読みし得る刹那的な芸術を要求し

た。それはついに芸術を捨てて生き得ぬ、民衆の生命的普遍の立証でもあった。思索を失った時代の民衆は、必死になって思索の『時』を盗んだ…短い『時』を…そのもっとも鮮やかに現れたるものは短篇小説時代であるアランポオの出現であった。今正に短篇小説時代が来たのである。文学とは時代の反映である。……日本に於ける文壇の短篇小説時代は明らかに科学時代の乱舞を…訪問を裏書きするものである。さらに文壇はより短きものを求めつつ動いている。

短篇小説よりコントへ
コントより十行小説へ
十行小説より三行小説へ
三行小説より一行小説へ

それはさらに『新しきエドガア・アラン・ポオ』の出現であり、小説の……散文の……没落である。今日文壇に見る十行小説、三行小説はその型を散文に借りながら内容は詩である。ああ散文は没落し短詩時代が訪れ来たったのである。

電車の窓をとおして見る蒼空に宇宙の深き悠久の神秘をうたい、街頭を疾走する自転車に宇宙の時の流れ……万物流転相をうたう。『一秒の詩』の時代が来たのである。

短詩時代が来たのである。私は今一章に於ける内的れいめいと、こうした短詩時代の訪問を深くむすびついたことを感じている。

（三）

石川啄木がその短歌を人生の一秒の詩と言った。

川柳は今や私の人生の一秒の詩とならんとし、亦なりつつある。

正宗白鳥氏は芸術の世界を『国家にもそのもろもろの制律にも支配されぬ心の安息所』といったが、私の川柳も何物にも支配されぬ短詩王国の花園たらんとしている。

ああ、内的にも外的にも新しき短詩時代が来た。一二よ、自愛せよ。

（一九二六・十・十八）

以上が全文である。この文章に記した日付から、畏るべし鶴彬は、十八歳にまだ少し届かない時期であることがわかる。

深井一郎著『反戦川柳作家・鶴彬』の年譜によれば養父の元を離れ、従兄・喜多市郎の元に寄宿したのはその年の九月頃とされているから、大阪に来てほとんどすぐにこの二つの文章を書いていることになる。そして三ヶ月ほどの時間を置いて掲載されるに至ったようだ。市郎の部屋から仕事探しを始めてそれほど時間が経っていない。仕事探しに「疲れ倦む」前のことであろう。また鶴彬が「胃袋で直感した」として、プロレタリア文学論に急傾斜していくその直前のことである。

何故『川柳雑誌』に投稿したのだろうか。『川柳雑誌』の中の安川久留美の存在があったのだろうか。安川久留美は毎号評論・エッセイを寄せ『川柳雑誌』の中では存在感を示す論客であった。

久留美は鶴彬の故郷・金沢柳壇の重鎮であり『百萬石』の主宰者であった。

鶴彬は「短詩時代来る」（一）の中で「私の周囲の柳壇（金沢柳壇）の態度がきわめて微温的な、戯作的な遊戯に耽っていたことと、それらの川柳によって私の内的生命の要求としての詩を盛り込むことの出来ない…あまりに私の心とかけはなれた既成川柳…そこで私は私の詩を盛るべき銀皿を求めた、それが私の北国新聞柳壇に置ける異端的表現であった」と書いている。

その彬の異端的表現を「土人の太陽を追う如き愚かさである」と久留美に軽蔑されたことも記している。

いきさつはどうあれ、反戦川柳作家・鶴彬として世に出る前の、あたかも蛹が背中を割り新たな姿として蝶になるための苦悶の時代、鶴彬の疾風怒濤の精神を受け止めたのは『川柳雑誌』であったことに私は感動する。

本社八月句会

八月七日(金)午後五時
アウィーナ大阪

梅雨が明けて蒸し暑い日の続く七日、出席七九名で本社句会が開催された。

本日のお話は、〝ユーモア川柳〟と題して、新家完司さん。

川柳に表現されるユーモアを大別すると、嘲笑（他人をあざけり笑う）。自嘲（自分で自分のことを笑う）。ナンセンス・ユーモア（無意味な面白さ）。があります。古川柳は、客観的視野で嘲笑句が多く、現代川柳は主観的視野で自嘲句が多くなっています。精神的に成熟した人でないと自分を客観的に見ることは出来ません。そう言う意味では、自嘲句のユーモアを作れる川柳人は皆さん精神的に成熟した人だと言えます。本日は川柳塔本社句会ですから、川柳塔誌の中から、ユーモア句を紹介します。〝自分の失敗を笑う句〟〝自分の老いを笑う句〟〝自分の夫婦仲を笑う句〟〝自分の酒癖を笑う句〟そして当たり前のことを再発見した〝ナンセンス・ユーモア句〟などを挙げそれらを出席者の笑いを誘いながら、面白く、和やかに、解説しながら紹介された。

会場をくつくつ笑う声で溢れさせた話術に感心させられた三十分であった。（郁夫記）

初出席は遠山唯教さん（堺市）、松尾美智代さん（豊中市）。月間賞は米澤俶子さん（大阪・岬町）に輝く。

（司会―美籠・昭）（脇取―(矢)五月・賢子）
（受付―美智子・勝弘）（清記―光久）

席題「脱ぐ」　松原　寿子選

脱核にイエスウイキャン八月忌　和夫
トビウオが水着を脱いで天国へ　則彦
玄関に躾の後が脱いである　玄也
脱皮して滝に打たれた男道　岳人
一人なら裸になってめしを食う　勝弘
補聴器を外し雑音脱ぎ捨てる　昭
靴帽子ドレスを脱いでシャワー室　美代子
大豆も芽拝む形で殻を脱ぐ　俶子
着痩せするんやね凄いプロポーション　天笑
脱ぎ着させありがとうってつぶやかれ　蕉子
かかる世にいでよ遠山金四郎　楓楽
神様が一肌脱いだお賽銭　尚士
プライドを脱いで素直な顔の艶　みつ子
錆びた脳脱ぎ捨てていく趣味の会　朋月
片肌を脱げば男の顔になる　一歩
脱げなんてはしたないこと言えますか　弘風
スパンコール少女は脱皮したつもり　理恵
やさしさは心のベール脱いでから　千里
少しだけベールを脱いだ裁判所　則彦
あっさりと殻を脱いだら楽なのに　能子
恋をする度に脱皮をしています　保州
脱ぎっぷりも気っぷも良くて出世せず　冨美子
スローライフ気楽な靴に履きかえる　美籠
古い殻脱ぐぞ脱ぐぞとマニフェスト　直樹
脱ぎっぷりよくてスカウトされました　月子
赤ちゃんは脱げば可愛いく頼もしい　日の出
まだ女五枚コハゼを脱ぐ仕草　柳伸
孫二歳天使のような丸裸　集一
定年の仮面を脱いだ丸い背な　一歩
諸肌を脱ぐとヤイトの跡がある　時雄
脱ぎませんちらちらさせているのです　天笑
水遊び裸ん坊が嬉しそう　好
佳
諸肌を脱いでも川は深すぎる　光久
チェンソーに森が裸にされていく　恭昌
迷い込んだ森で脱皮をして帰る　扶美代
動物はいいな一糸もまとわずに　保州
諸肌を脱いで抱きつくレントゲン　柳弘
人
やっと脱皮男どん底語らない　一風
垢
靴脱いで大地とはなししています　月子
天
仮面脱ぎ本心でするお付き合い　ルイ子
軸
脱ぐまえから自信あふれている笑顔

兼題「歯」　山田　耕治選

残五本子供の様に可愛がり　紀雄
歯に衣を着せぬ女だが憎まれず　庸佑
いつまでも豆噛みたくて歯を磨く　雅明
今日はもうこれでお仕舞歯を磨く　義
残った歯やさしくみがき感謝する　美智子
磨く歯を持つ幸せに気づかない　一風
歯の予約忘れ焼肉食べちゃった　一歩
ちちははへ感謝歯科医に賞められる　哲子
インプラント新しい歯が生えました　堅坊
奇麗な歯と褒められ義歯と言い出せず　いさお
歯きしりがきつくて別居しています　月子
歯ブラシが二本青春のワンルーム　集一
白い歯も七難かくす健康美　柳伸
後悔の石を奥歯で噛み砕く　郁夫
世渡りに歯の浮くような世辞も言う　尚士
歯車が噛み合っている家族愛　保州
ニューファミリーの躾歯痒い老婆心　俶子
歯に衣を着せない嫁が同居人　冨美子
乳歯抜けた口で一丁前を言う　シマ子
わたくしに愛想つかした歯が抜ける　扶美代
歯に力入れて涙をとじ込める　(久)千代
噛みしめた奥歯が男つよくする　千里
背を向けて歯ブラシ二本並んでる　(志)千代
抜けてからわかる歯のあるありがたさ　集一
勝ち試合白い歯見せて語り合う　正雄
パソコンを駆使する嫁に歯が立たず　日の出
歯医者さん風邪をひいてはいけません　恵子
三割も人工の歯に生え替り　哲男
幸せは痛む歯がまだございます　(志)千代
キリキリと奥歯で耐えている本音　哲子
白い歯の笑顔がこころ鷲掴み　美籠
いつ迄も他人のままでいる入れ歯　寿美
白い歯を見せてきついこと言われ　見清
理不尽な痛さ抜歯前の麻酔　時雄
名曲の流れる椅子で歯を抜かれ　哲男
佳
今頃になって歯の浮くマニフェスト　直樹
歯に衣をちょっぴり着せて生き上手　賢子
てきぱきと仕事する娘の歯がきれい　一風
歯並びのきれいな人はよく笑う　時雄
白い歯を光らせ駆ける部活の子　たもつ
人
夜の歯を磨いて今日の戦後処理　好
地
ポケットに拳をつくる歯科の椅子　郁夫
天
もう乳歯はえる気配を知る乳房　五月
軸
食卓で入れ歯の話して夫婦

兼題「ツアー」　北野　哲男選

ツアーでは行けぬふたりの隠れ宿　准一
首都バリ寿司屋を探すツアー客　正雄
ツアー客着いて秘湯の情緒消す　楓楽
旅慣れて添乗員を軽んじる　楓楽
グルメツアーメタボを気にはしてられぬ　光久
持ってきた薬見せ合うツアー客　(久)千代
ツアーから帰れば二日寝込んでる　勝弘
ガイドほめ機嫌そこねたフルムーン　耕治
終の住処さがすツアーに誘われる　理恵
青い星ヒト科のツアー何処へ行く　公誠
お遍路もツアーで巡る朱印帖　能子
アテンションプリーズ落ちぬ保証はないツアー　保州
トイレからトイレを走るバスツアー　好
饒舌なガイドに眠くなるツアー　時雄
風の盆忍耐力の要るツアー　柳伸
研修という二字忘れバスツアー　一歩
帰路はみな眠りこけてるバスツアー　玄也
女同士のツアー一番楽しそう　恵子
客同士次のツアーのプラン練る　俶子
北海道より安いハワイを選るツアー　たもつ
千円の高速に泣くバスツアー　遠野
土産買う団体さんがお着きです　能子
ジーパンをはいて遍路のバスツアー　尚士
ツアーなど滅相もない老母と住む　耕治
バスツアー縁談ひとつ持ち帰る　和夫
花を追いかけ蜜蜂とのツアー　天笑
宇宙食いまから慣れて月ツアー　求芽
あの世へのツアー計画無しに来る　蕉子

旅三日うすうす知れた続柄　五月
老母連れて二重橋からバスツアー　千里
はじめてのツアー帰りは友も出来　月子
元彼にばったり逢ったバスツアー　岳人

佳

おばちゃんが男子トイレになだれ込む　朋月
バスツアーガイドも一句披露する　扶美代
相席が同郷だったバスツアー　俶子
格安の宇宙ツアーを待っている　完司
憧れのツアーに遺影連れて行く　郁夫

人

テイクオフ老母が数珠出すパスポート　郁夫

地

ちまちまと貯めてツアーでぱっと出す　月子

天

司馬遼の筆あと辿りゆくツアー　寿美

軸

旅三日喋り足りないまま終る

兼題「惜しい」　山岡冨美子選

老々介護きゅうに命が惜しくなる　美義
出し惜しみまた切札を腐らせる　好
惜しそうにアイスクリームくれる孫　舞夢
上げるのは勿体ないが嫁にやり　天笑
惜しいけど丁度の頃に逝きはった　公誠
プロポーションいいのに歯切れ悪いひと　月子
骨惜しみ身にしみついた戦中派　たもつ

経済効果あったと聞かぬ給付金　楓楽
ボロ負けも惜敗だったと虎ファン　昌紀
やっと来た悪石島は雨だった　いさお
惜しむらくは彼の財布の軽いこと　理恵
おふくろの味に今いち嫁の腕　柳弘
鼻の差でいつも負けてるカタツムリ　郁夫
ゴミに出しフェルトの帽子また仕舞い　千枝子
美人薄命妻それなりにそれなりに　昭
後期高齢入口辺りでまだ死ねぬ　一歩
惜しまれて百歳ほどで逝けたなら　時雄
釣天狗クジラ一頭釣り落す　昭
百万の包みをケーサツに届け　天笑
ゴミ屋敷にならないように捨ててます　耕治
終点はすぐそこ眠るのが惜しい　完司
月下美人友も呼べない深夜二時　五月
私にも惜しい話の二つ三つ　恵子
楽しいこの世百年じゃ味わえぬ　完司
年金の目減りで何もかも惜しい　シマ子
恋ごころマッチ湿って火がつかぬ　日の出
浴衣美人よくよく見ると左前　保州
惜しまれて退くのもいいか花の束　月子
豪邸を父が守って子らが売る　日の出
転勤を惜しまれすぐに忘れられ　尚士
堂々たる正論猫にだけ聞かす　真理子
持ってはる人に限って出し惜しむ　玄也

佳

泳ぐのが惜しいニュールックの水着　瑠美子
母だけが紙一重だったと言ってくれ　義
もう少しだねと上手に褒めてやる　(久)千代
洗うには惜しいあなたの手の温み　好
惜しいなと言われ潮時だと悟る　五月

人

選挙では次点で惜しいではすまぬ　瑠美子

地

無表情に明治の家が壊される　宏子

天

逝く夏をちょっと騒いで見送ろう　扶美代

軸

薬物で散る才能が痛ましい

兼題「人混み」　鶴田　遠野選

人混みでも見逃がさないと尾行の目　庸佑
人混みのマスクいつしか消えている　房子
人混みの中で熟していくメロン　美義
人混みを保護色にして雲隠れ　玄也
人混みを楽しむように夏祭り　恵子
薄情な客で混み合う店仕舞　尚士
雑踏に紛れストレスおいて来る　美籠
野次馬を割って救急車が動く　哲男
人混みに紛れてそっと手をつなぐ　美智代
人垣はやはり覗いてみるわたし　扶美代
人混みが好きお祭りもウイルスも　冨美子
人混みを避けて裏門で見る祭　求芽
人混みでマスク掛けたり外したり　保州

人混みの中で孤独を噛み締める　美智代
人混みをジグザグに縫う酔っ払い　時雄
雑踏で秘密の話打ち明ける　見清
人混みの中でみつけたエイリアン　いさお
人混みを避けて入って午前様　月子
人混みをさけるシニアのショッピング　柳伸
人混みが好きでストレス蒔いて来る　舞夢
人混みにまぎれ自分を立て直す　舞夢
人混みをすいすい若さ闊歩する　ルイ子
人混みをウロウロしないお金持ち　完司
人混みのマスクに不安まだ残る　俶子
人混みがとっても好きな自爆テロ　完司
満員の悪石島で雨に会う　哲男
雑踏の中で私を見失う　保州
人混みが好き活力が湧いてくる　(宮)宜子
人混みに紛れあの人戻らない　満作
久しぶり人混み妻と手をつなぐ　一風
人混みで同じ夢見る遠花火　美籠
人混みで叫びたくなる時がある　昌紀

佳

人混みの中で酸欠に気付く　美代子
ふる里へ帰る混雑いとわない　楓楽
人混みの街で充電して帰る　好
人混みに入り免疫つけておく　東吉
人混みの街で居場所が見つからぬ　能子

人

人混みにいると孤独な顔になり　見清

地

人混みを縫うのが下手な彼が好き　昌紀

天

人混みを抜けてふたりの小宇宙　朝子

軸

シャッター通り昔を語る招き猫

兼題「先　輩」　河内　天笑選

悪い事教え先輩面をする　紀雄
面倒を見る先輩の人間味　唯教
淀君と言う先輩がいてくたぶれる　寿美
先輩の言うとおりにして叱られた　求芽
悪いことみんな先輩から習う　いさお
後輩がぼくを差し置き出世する　(宮)宜子
頼りない先輩面がよく吠える　淳司
先輩が何時の間にやら僕の妻　弘風
実力のない先輩がよく威張る　集一
先輩を見舞うて何かむなしゅうて　れんげ
お変りもなく先輩は遅刻され　義
先輩の技を盗んで誉められる　朋月
思っ切りやれ責任は俺が取る　(久)千代
先輩の助言になさけ添えてある　寿子
カンパしました先輩の保釈金　保州
先輩の薫陶を受け飲兵衛に　完司
アラフォーの先輩妬かすウエディング　俶子
先輩にサボリ方だけ教えられ　昌紀
自尊心だけで先輩続けてる　和夫

手抜きするこつも先輩仕込みです　修
割り勘にすると先輩から言われ　時雄
先輩に声かけられた休肝日　なぎさ
高校の先輩風を吹かす妻　則彦
先輩と呼ばれしっかり奢らされ　昌紀
ご主人の後輩ですと来る選挙　五月
先輩も後輩もない要は票　修
先輩も駆け付けてきた甲子園　尚士
爺ちゃんも父ちゃんも出た我が母校　遠野
相談を受け先輩の顔となり　好
先輩と言うて来たなら要注意　勝弘
先輩も弱くなったな酒の量　月子
先輩の居ぬ間にボトル空にする　玄也

佳

社長より古い職人町工場　哲男
パソコンの先輩はただ今五歳　(志)千代
先輩が先に逝くのが順序です　完司
先輩が伏せ字いっぱい置いて去る　哲子
先輩の失敗談に聞き惚れる　日の出

人

先輩を抜いたときから向かい風　保州

地

ああそうかもう先輩になっていた　堅坊

天

母という大先輩が手本です　米澤　俶子

軸

先輩が敵相手に不足なし

花地図壇

毎月24日締切・35句以内厳守　編集部

米子住吉川柳会(鳥取)　渡辺多美子報

水平線目の保養に遠くみる　登美枝
病名は包んで飲もうオブラート　すみえ
絵になるような水車小屋だけある麓　未延子
天敵が地下にもあって竹落ち葉　ふみ
生かされている限り夢追ってみる　正二
夢を見て冷や汗が出てとび起きた　欣子
水をまく主人の姿義父に似て　礼子
赤ちゃんの踏み出す足に明日が見え　多美子
セレブにはなれぬ血筋で気は楽で　公一

城北川柳会(大阪)　伊達　郁夫報

口角泡ぺらぺら中味のない話　萬的
泡立ててモンロー気分しまい風呂　静枝
近所でも会う事なくて淋しいな　美代子
母ちゃんが綺麗に見える祭りの日　一幸
残り火がやたらパチパチ騒がしい　じゅんこ
出かかった言葉飲み込む好きな人　弘泰
退屈で金魚の泡を見てる午後　克己
逆縁の友の訃報に言葉飲む　麗
引きぎわ悪い男の唸節　信酔
雑草を引きつつパワー貰ってる　美智子
ざまあ見ろ泡吹く顔が目に見える　章久
勧誘のプロの話術にのみ込まれ　満作
老い二人時計どおりに動けない　求芽
夢を抱き天空目指し行った泡　ルイ子
国未来語らずエラーつつき合う　東吉
お噂を聞けば逢いたい気が騒ぐ　かずお
いい汗をかいた泡ですはじけます　郁夫
一日の疲れビールの泡が食べ　弘風
淀みに浮び泡のよに命消え　野鶴
お白州も覚悟のうえの朝帰り　和夫
本棚のマンガで脳を遊ばせる　志華子
ノーモアヒロシマ言言泡とさせまいぞ　昭
娘の幸へ父は黙して無理も飲む　賢子
夫婦して渡った橋は何本目　典子
童心に還る祭の金魚釣り　倫子
バーゲンのはしご細腕奮闘記　直樹
夏が来たパワーは球児から貰う　一歩
泡は未だノンフィクションの大ジョッキ　柳弘
にわとりの厄日となった村祭　順三
うたかたや身を焼くほどの恋もせず　喜八郎
一病にパワー貰って生きている　たもつ
ヒマワリのパワーをもらう炎天下　明子
祭壇で誓うふたりにある未来　朝子
ノーと言う勇気出すのに酒がいる　修
泣いた数よりは沢山笑いたい　集一

川柳クラブわたの花(大阪)　西川　義明報

夏メニューに春の残り香すこし添え　妙子
プロポーズ潮時探す春の宵　俊子
この空の下子も孫もいる安堵　晴美
金婚式耐えた相手を譲り合い　浩三
エアロビも体操よりも盆踊り　孝子
耐え忍ぶ愛はきらいョうばい取る　和子
ポッコリのおなか平和の証です　ますみ
青空と真っ白好きな洗濯機　はじむ
ロボットが人間技に勝つ時代　たえ子
気楽さに慣れて同居を先延ばす　美代子
冷奴の角は妥協せぬ自分　耀一
好き勝手生きてみるのも勇気いる　知佐子
一病の恩合掌をするあした　民
潮時が読めず幸運とり逃がす　君江
世界中新種戦の風邪の菌　博子
留守宅に明かりがともり気持ちせく　愛子
明日もあるゆっくり行こう蝸牛　宏至
裁判員好きでないのに当りそう　義明
愛と言う担保預けている弱み　いつふみ
父母傘寿お出かけ今もペアルック　宏
近頃は首相よりも知事人気　正春

汚れてる命磨いてからあの世　欣子
雑誌から抜けてファッション町を行く　一風

ほたる川柳同好会(大阪)　水野　黒兎報

至福と汗のほうびに飲むビール　黒兎
写真にはみせない心覗いてる　禮子
言い分けをすればするほど汗が出る　長一
生きてたらまたまた逢える事もある　久子
汗かいてかぶる西瓜のうまいこと　幹治
誉めてるの写真写りが良いと言う　信男
家族写真時代を思うセピア色　雪子
TシャツにジーンズポーズVサイン　柳童
嘘つくと汗が背すじをころげ落ち　宇乃子
太い人の横で斜めにいる写真　見清
汗と涙なしであの日は語れない　輝
汗かかん人が言いだすクールビズ　春代
ツーショット温い方言秘めてある　祥風
またまたと二度目のミスにへこんでる　契子
写り栄えせぬ面提げて撮られ好き　勝

南大阪川柳会　吉川　寿美報

天声人語足場に今日を組み立てる　あや子
迫真の演技にやらせとは知らず　東吉
言いわけがいやにうまいぞやらせかも　ばっは
開店に並ぶやらせのアルバイト　清
全員がうまいと褒める試食会　(吉)修
リハーサルなしのやらせに救急車　なぎさ
やらせではない証明に死者が出る　克己
不景気を薄利多売で凌いでる　庸佑
正直に申せと閻魔薄笑い　尚士
薄いけど万札らしいこの祝儀　弘風
薄味の煮っ転がしに母の自負　祥昭
わたくしを甘く見ている薄笑い　太郎
合併で元の社名がわからない　和雄
エプロンの裾をはなさぬ娘が嫁ぐ　叡子
カシミヤの黒がお好きな埃達　嘉住子
イケメンにひっつかれたら息止まる　弘子
逆転へ好球必打食らいつく　栄子
ひっつくのはやめよう冤罪が怖い　一歩
B面にひっついている挫折感　志華子
ひっついて離れてくれぬ皮下脂肪　楓楽
ポストまで誰にも会わぬ暑い夏　柳右子
桜桃忌玉川土手を行く無口　柳伸
いとおしくなるミツバチとスズメたち　勝弘
真夏日が続く体はまだ馴れず　ルイ子
不器用な私ささえは好きな趣味　タカ子
ありがたい食事忘れたことがない　たもつ
幸福なとこだけ喋るクラス会　章久
父派遣母はパートで僕バイト　忠昭
生と死の狭間で呼吸する脳死　柳弘
負けて勝つつもりがずっと負けたまま　勝弘
恩人を裏切る人に影がない　集一
　　昌紀

佳句地十選

(8月号から)

門脇晶子

春の大地萌えることだけ考える　ふみ
わたくしのために越さねばならぬ坂　千代美
もう一度産休ですと言いたいね　登美代
連休があろうと変りない介護　さち子
地球と言う大きな盆が病んでいる　恵子
十指みなそれぞれまめに生きている　朝子
人生に謎があるから夢もある　一泉
古い事しかと覚えている指紋　千梢
半分は胸におさめて生きている　紀子
ワンランク下げて余生をしています　鹿太
頼られて喜ぶ母をまた頼る　寿美
ケイタイが私の時間食べに来る　郁夫
宝石のように優しく梅漬ける　直子
言い訳をする度仮面はがれ出す　更紗

川柳若葉の会(大阪)　宮崎シマ子報

結び目が解けず苛立ち二三日　烈
拳から決意の程が見えてくる　加津子
若ければ結ぶ命に吾が臓器　香住
噂になり天下御免の二人連れ　弘直
安らぎをあたえてくれる藤の椅子　ますみ
グループの顔が揃った藤の下　慶子

藤色を着るとやさしい女になる　能子
下り藤重い家紋が肩にくる　シマ子

わかあゆ川柳会(島根)　松本はるみ報

友情の不変監視の赤い糸　聖子
四季のある山に抱かれ生きる幸　ちよえ
出発の靴も気迫にみちている　伸子
友達を庇うて小さな嘘をつき　かつ子
友情幾歳月の彩がある　はるみ
荒波を上手に乗りきる日記帳　好栄
大衆に合わぬ色もつ永田町　恵美子
友情がそうかそうかと聞いてくれ　博利
青空に向って友情確かめる　清泉

八尾市民川柳会(大阪)　宮西　弥生報

たこ焼のソースが光るアッチッチ　草風
せっかちで子の物指しを見失う　ひさゑ
原石のような子供の可能性　朝子
妻は外ではうまく私を光らせる　一風
露天風呂ゆったり浸り待つ日の出　幸生
大空へ明日の自分を光らせる　紀雄
黒という水着姿の魅力知る　浩三
こんな夜は蛍の乱舞さえ重い　あかり
あの世でもセクシーボイス青江美奈　いさお
ちょっぴりの光に花は満ち足りる　扶美代
身のこなし一つで光放つ女　賢子

後れ毛を上げる項の抜ける白　欣之
セクシーに惹かれ女房にした不運　耀一
いつからか鍵かけている子供部屋　柳伸
障害を皆の笑顔で生きている　幸岳
うな重が嬉し母さん休ませる　秋子
ゆったりと羽をのばして聴くショパン　寿鶴
風一陣タンクトップの汗光る　進弘
自転車の前後へ母の子育て記　弥生

川柳茶ばしら(愛知)　板山まみ子報

高速の千円に乗り善光寺　文男
いざ会うと何も言えなくなる私　遡行
母見舞う心配の種拾うため　幸子
どの面をさげて会おうか義理を欠き　美千代
幹事泣くキャンセル続くクラス会　百合江
ヨチヨチの顔を見たさに三時間　かつ子
災難は出合った時のあの笑顔　まみ子

西宮北口川柳会(兵庫)　黒田　能子報

つまずいたところにあった玉手箱　千代
あの世まで離れずいたい二枚貝　婦美子
潮干狩パパは美人の後を追う　毅
法螺吹いてまじめな顔をしてる鬼　松煙
俺お前離れるもんか二枚貝　いたる
わだかまり流した水が澄んでくる　比ろ志
あの件は水に流すと言ったけど　たけし

水ごくり喉元過ぎる愛と憎　美代子
死に水を取ってやるとはちょこ才な　忠
頂上で飲む水筒は空にせぬ　奮水
立って飲むときが一番うまい水　耕治
水張って瑞穂の国の田が戻る　哲男
逆らえぬ水の流れと腕を組む　早加水
神さまが試練与える向かい風　茂
立ち直るたびに邪魔する向かい風　朋月
向学心目覚めぬままに年をとり　緑
好きだからあなたの方へ行くのです　二英
時としてガムシャラになる癖がある　美籠
赴任地へ期待と不安向かう朝　浩司
つまずいた数だけ人間らしくなる　キヨミ
つまずきも何度かあった我が人生　江美
札束に蹴つまずいたと嫌な奴　直
つまずいて考えかたを変えてみる　歳子
つまずいてばかりなのに無傷でいる　玲子
つまずいて格差身に染む世相です　順子
指折って退屈しのぐ五七五　基輔
もったいないでしょうかうかと生きて　わこ
産声に娘は母の顔になる　りこ
犬が往くやっぱり家族だったんだ　弘子
尊厳死などと贅沢過ぎないか　てる
途中下車しながら余命つないでる　見清
のど飴を変えると悩み解けて来た　孝一
がやがやとホタルの恋の邪魔をする　正和

なにもかもご縁あなたもわたくしも　章子
梅雨明けの予感風鈴夏の音　鹿太

川柳塔なら　坊農　柳弘報

篠つく雨半端な未練まで流し　隆之
携帯が無くても楽し弥陀に問う　カズ子
濡れつばめお前も派遣切られたか　とし子
追いかけた夢は半端で終れない　靖鬼
半端ではなかった汗がものを言う　隆子
携帯に嵌り自分を見失う　紀雄
お出掛けの妻のケイタイ家で鳴り　博一
歯を磨ききれいさっぱり忘れます　義
意気込みが朝になったら萎んでる　勝弘
濡れ衣はイヤと吊革持つ両手　弘風
夕立ちにズブ濡れになる百度石　章久
濡れた道もみじマークの車間距離　千梢
歯のほかに磨くものなきわが余生　順啓
したたかで才女でとても歯が立たぬ　修
太陽の匂う少年歯が白い　辰雄
携帯にいつも持っているニトロ　洋子
俎板の鯉さながらに歯科の椅子　集一
相合傘濡れても鼓動する命　美智子
彼からの着メロ頬が桃色に　ふりこ
微笑んでいるが心は濡れている　和夫
義理一つ果たす喪服が雨ん中　寿美
美点欠点携帯サイトにある誘い　柳弘
ケイタイの軽い誘いに乗った罠　良一
習い性また吠えながら後退り　真理子
半端だな僕は修業足りないな　美千子
独り立ちするにはトマトまだ青い　道子
必要にされて半端のない試練　弥生
匂い袋卒寿の母の身だしなみ　理恵
早朝の訃報魂まで濡れる　國治
名札つけ一途に花野めざす母　富子
携帯に囲まれ身動きがとれぬ　完次
人生へ晴雨兼用傘を持つ　朝子
濡れ場から修羅場に舞台回りだす　隆盛
豪傑な父がオロオロしてる歯科　萌子
中途半端な男シュレッダーにかける　卓

倉吉川柳会(鳥取)　竹信　照彦報

玉の汗くらいじゃ腹はへっこまぬ　石花菜
地引網男の汗は格好いい　賀寿恵
ばれた嘘胸の谷間は汗しとど　和枝
つじつまが合わなくなって冷汗が　風露
汗かきで朝の化粧が総崩れ　京子
汗かいて後のビールは至福時　貞子
てんか粉豊かな胸の汗もっこ　悠子
多事多難以上まとめて終い風呂　玲子
日々歩く生きてる以上我が足で　和子
これ以上やさしくしたら恋になる　螢
この総理鈍感力は並以上　次男
それ以上めかしてどこへ行きなさる　康子
以上でも以下でもないのが我が暮し　鬼一
これ以上飲めば何かが潰れそう　泰輔
親以上大きくなれと突き放す　美代子
これ以上過ぎてはいけぬおつき合い　たかこ
これ以上荒らしてならぬ休耕田　酔芙蓉
真っ四角な答えを返す蒼い月　美ッ千
カミナリも虹も答えに違いない　完司
割り切れぬ答えかかえて生きている　けいこ
口答えしたら止まらぬ妻の愚痴　いさお
国会の質疑応答ヒントずれ　英子
難かしい問題だから出ぬ答　睦子
拉致問題答えの出ないまま過ぎる　龍枝
老い二人答の合わぬ会話する　由紀子
リハビリをしても答えがすぐに出ぬ　かつみ
お隣の灯りも消えたもう寝ます　よしえ
お宝は無いが防犯灯つける　茶子
天の川街のあかりが邪魔になる　日出子
旱魃で水喧嘩した月明かり　重忠
肩寄せて漁火見た日もう来ない　萩江
手の平に蛍が灯くれました　祐子
変な物飛ばぬ明るい空祈る　喜美子
狐とは知らず灯かりに化かされた　瑞子
あかり消し戦争当時思い出す　美津恵

川柳塔わかやま吟社　川上　大輪報

映画から学ぶ明日へ生きる知恵　稚代

ラブストーリー記憶の彼は天を駆け　寿子
裕次郎の映画昔をしのばせる　翠子
笑わせてほろりとさせたチャップリン　保州
生まれ出て別れの映画演じ切る　真里子
何時の日か誠届けて返す恩　冨美子
過去帳をひらけば闇を出す無限　あきこ
下心入れて届けるのし袋　利治
招待状届いてからの不整脈　裕美
真心を届ける時もオブラート　克子
満天の星から届く賛美歌よ　緑良
逃げて逃げて逃げても妻の射程距離　大輪
お届け物預かったのが縁となり　三男
水脈に届くと愛が溢れ出る　精子
優しさが後で届いてくる無口　紀子
出来たての風を届けにくる扇子　俶子
過不足のないほほえみが輪に届く　小雪
手の届く位置にあるから押すボタン　英子
柔軟な母のスイッチ逞しい　泰女
スイッチが押されて来世の旅に出る　ほのか
忘れ得ぬ愛のスイッチ入れた人　智三
タイムスイッチ入れてかしこく老いている　めぐみ
スイッチオン後ひと仕事日暮れまで　徑子
スイッチを切った暮しにそよぐ風　和香
人間の収支スイッチ神が押す　登美代
生きていく幸せ数えたら無限　よりこ
汚染した空気無限に吸っている　美子

無限とや人間許す空がある　輝子
夏の空無限の平和祈りたい　よしこ
平凡でいいが無限の夢は追う　怜
老いたとて夢は無限に持ち続け　謙

あかつき川柳会(大阪)　山本　柳昌報

可燃性の国境線が伸びている　よし子
地球儀を回すな日本がずれ落ちる　昭
この地図に向こうへ渡る橋がない　克己
住みついて活断層の地図を抱く　たもつ
目じるしにお地蔵さまを書いた地図　みつ子
カーナビよ女房の居場所教えてよ　忠昭
招待状やさしい地図が書いてある　生枝
案内図きらりと光る彬の碑　一歩
ナビにない地図を私が生きました　美花
おさな児と雨を待ってる赤い傘　美智子
梅雨さなか夏の野菜がうれしがる　ルイ子
人間の脆さを包み込む時雨　柳弘
梅雨晴れ間あじさい色になる思案　紀乃
読みかけの本と楽しく梅雨籠り　深雪
ロボットが妻なら失禁叱らない　シマ子
ロボットが五感を持てば怖かろう　義子
自然愛青い地球を守りたい　朝子
星条旗恨みは今もまだ残る　桂子
玄関で星を見上げる爪楊枝　哲男
降る星をながめ異国の草に寝る　蕉子

彬逝く星の見えない夜でした　ダン吉
パンツ一丁裸でごろ寝星月夜　章久
吉兆によく似てるコンビニの売れ残り　紀雄
橋本さん本心どこやうわついて　美世子
鶴彬多喜二とならぶ世となりぬ　明水
責任は秘書金は我ふところへ　千鶴子
平和への思いが燃える熱い夏　一行
ボロ儲けつづく郵政民営化　鈍甲
エコ商品買うには足りぬ給付金　光久
脳死でも臓器はやれぬ親心　君代

京都塔の会　都倉　求芽報

幕上りステージにいた黒子たち　輝美
またひとり素敵な人が雲に消え　昌乃
真一文字彗星の尾が狂おしい　求芽
親指と小指が喧嘩する世相　鹿太
程のよいリップサービス潤滑油　ふりこ
血が上る頭がはじく人の情　文代
そろばんを弾けば欲が顔を出す　かずお
踏みたおすつもりで親に金借りる　綾子
農を継ぎ今日も夫婦で土を踏む　比ろ志
悩んだら裸足で大地踏みしめる　則彦
踏みしめた過去の歩幅は自信ある　孝一
散り際はそっとしておけ木蓮花　ますお
静養の実家で百姓しています　典子
静養中温泉にいたダービー馬　福子

静養の社長落ち着けない不況　庸佑
静養のベッドで期している再起　欣之
ふる里の風が恋しくなる疲れ　朝子
静養に来ても母さんおさんどん　益子
言い分けも二度目の静養効果なし　昇
言ってみたいちょっと静養軽井沢　満子
静養をみだすニュースが多すぎる　としこ
吊り革で暫し静養宮仕え　美義
解散をすればマンガも読めるのに　牛延
静養と遊ぶバランスうまい妻　宏子
静養をしてからリズム狂い出す　葉子
静養へお見舞いに来るゴルフ焼け　啓子

川柳ささやま(兵庫)　遠山　可住報

毒舌は風といっしょに聞き流す　純子
都会風吸うも若さの処方法　美緒子
定年で都会を去って村づくり　二英
振舞った酒が毒舌はいて去る　美紗子
毒舌が取りもつ縁で無二の友　多美子
とことんの話し合いして結果出す　開子
インフルでマスク美人が増えました　照代
毒少し飲んでるそれが効く薬　かほる
田舎から都会の顔して街歩く　幸子
一枚はバッグにマスク持ち歩く　美智子
毒舌も温みと味で毒がない　哲男
毒茸も仲間の顔で山の秋　可住

川柳塔おっぱこ吟社(香川)　川崎ひかり報

どの本を読んでも退路見つからず　賢
退き時をつい失った間の悪さ　弘
退場の喝采止まぬ放浪記　くに子
武士の情敵に退路は開けて置く　あきら
進退を賭けて政治の大舞台　八重子
退場の講師に送る大拍手　放任
退職後ふる里の友近くなり　いさむ
退散後何うなったのか気にかかる　よしみ
手を挙げただけが自慢の参観日　はつ恵
定退の首晒してる不況風　ひかり

富柳会(大阪)　古田　千華報

毎日を鞭打ちながら生きている　千恵
鞭打った後は砂糖で機嫌とる　鐘造
守るもの居るから打たれ強くなる　伸雄
再生紙わたしの森を補充する　よしみ
ロボットに枝打ち譲れない軍手　寿之
そっと読む宅急便の母の文　高鷲
削って削って三原色になる　アキ
不景気も追い風にするすぐれ者　糺
非正規の中には光る石もある　昌成
デコボコを埋めて一心同体に　未知
寄り添うて補い合った舞台裏　和子
不整脈春の暦をあたためる　登子

宅配に笑顔を添えて贈ります　壽峰
一歩ずつ補陀落へ向かう旅　欣之
正論を持たない鬼が野に下る　晴美
砂の城沈まぬように愛補充　佳子
気儘ゆえ一番遠い人になる　恵
消えかかる古い伝統深い皺　七朗
父さんの叱責は打たせ湯の味　深雪
反骨の顔が品位を崩さない　紅紫朗
進退へまず一本の釘を打つ　澄子
ようやっとなくした夢を拾う旅　よりこ
コンと打てばコンと響いたのは昔　扶美代
追い風が運んでくれた種ひとつ　武人
補助輪になってあなたについて行く　奏子
あの時になぜ腹たてぬ馬鹿な俺　彦次
補助椅子のゆれがうれしい快復期　鬼焼
花だより冬の合鍵捨てに行く　信子
あの時の何故が重たい風になる　森子
美しい袂からでる缶ビール　千華

川柳塔きゃらぼく(鳥取)　大塚　恵子報

明日のプラン練り直しつつ床に就く　春枝
ゆっくりと歩けば語る道の花　富美子
響き合うあなたのいない芝居小屋　恵子
すれすれの世渡り巧い人も居る　初枝
背伸びしても老母に届かぬ棚ばかり　なみ
おっとっと転ぶ間際に立ち上がる　千代

雨の午後ビートの効いたジャズを聴く　麗
散歩道すみれの花が見えません　繭
六月の雨に染まった花のいろ　てい子
すれすれのタイムバトンリレーで勝ちにいく　未延子
熟年の彩かも柿の色を着る　瑞枝
咳ばらい風邪が流行って自粛する　章江
箪笥屋を止め中空の桐の花　ふみ
一円を踏むなと三歳声上げる　やえ
目覚ましよりいつも小鳥に起こされる　亜弥
ザクロ酒が造れるほどの花が咲く　晴子
つるばらがゆれる母の忌近くなる　ゆき
旅芝居衣装はみんな母が縫う　晶子

長柳会(大阪)　村上直樹報

冷戦に孫を通して諸連絡　直樹
喜寿迎え気分だけはと若返り　ふみ
七夕に心踊らぬわがよわい　正一
日常の会話でわかる思いやり　孝代
墓参り御先祖様と会話する　たけし
隣席の会話気になる喫茶店　芳野
口身体共にピンピンうちの母　もこ
父親の七光りからのしあがる　輝子
梅雨晴に木漏れ日あびてウトウトと　光弘
会話なく慣れに隠れた倦怠期　武男
叩かれる激しい雨に耐える花　エミ
しのぶ愛来世叶うと占い師　敬二
ついてない男が狙う万馬券　正博
星祭りキラキラと会話する　正子
誉められる事は明日への糧になる　靖博
マンホール蓋には花も街もある　マサ
手相観るふりで美女の手離さない　淳司
妻の掌に握られている今日の運　和代
声のない会話いきいき手話つづく　一慧
遠い日の恋占いの泣き笑い　けい子
茶柱が立って一日張りがあり　幸雄
七足して引いて痴呆の検査され　正美
明かり消し蛍と会話した余情　三和子
七転び八起きチャンスはまた巡る　冨美子
女難の相嘘八百のうす灯り　和子

川柳らくだの会(鳥取)　岸本宏章報

投稿欄載っていっぱし作家さま　大鯰
戦死してビルマの海に眠る父　仁子
読めない字達筆だねとほめて聞き　清帆
掃除機の音が暑さを倍にする　孝子
手紙には素直に書けるありがとう　紀子
沖の方眺めて拉致の子ら思う　せつ子
激辛カレー食べて暑さに立ち向かう　玲子
海賊へ待ってましたと護衛艦　宏章
学校で習ったはずの字が書けぬ　冨貴子
一命を奪った海が今日は凪　邦昭
物騒で暑い夜でも窓しめる　寿賀子

川柳塔唐津(佐賀)　仁部四郎報

日本で駅の時計が信じられ　四郎
米寿記念句集も夢のまた夢か　勝視
無事祈る灯明ゆれて今日の加護　實
馘首かと上司近づきゃ肩がこる　高明
インフ禍でキャンセル宿泊予定表　輝夫
ひょっとして魔女かと思う九十歳　晴翠
乾いてる子がポキポキと折れる音　蜂朗

松露川柳会(鳥取)　小西雄々報

断われぬ弱い心が恨めしい　美穂
愚痴弱音聞いてもらえる友がいる　澄枝
政治家へ弱者の声は届かない　興
気が弱く謙虚なたちで敵がない　ちえ
弱い子へ可愛さつのる親の愛　美草
お酒には弱いが酒席盛り上げる　美枝子
肝っ玉母さん弱音吐きません　和代
老体のバネが弱って走れない　智恵子
横文字に弱くて孫に聞いている　公美枝
法事パン子供の頃はうまかった　鈴枝
大好きなパンさえあれば笑みこぼれ　弘子
弱虫といわれ根性だしてみる　静江
水割りに遊び心が浮いている　正光
甘言に弱い男で詐欺にあう　雄々

高知川柳社　小川てるみ報

よく動く心で決意さだまらず　健
来訪者の目だけは動く黙秘権　正躬
定位置を少し動いてみた会話　暖
血と汗を流せば山は動くかも　和広
感動を求めて一歩前に出る　和江
十指まだ動く思いを書き留める　幸子
無理しても脳を動かすペンを持つ　淳枝
アリバイに嘘がありそう目が動く　三千世
動かねばきれいな水もよどみだす　京子
政界が大きく動く辞任劇　ふき
十指まだ動き幸せ縫うている　美々
取り敢えず動く何かが見えて来る　てるみ
大勢の署名で動く山もある　三郎
休日は結局妻に指図され　松風
休日の鬼の小言は止まらない　哲史
休日を心待ちする里の母　典雄
井の中の蛙と知ってあわてだす　進
突然の手入れあわてた裏帳簿　みどり

川柳ふうもん吟社（鳥取）夏目　一粋報

空手形だけがびろつく手に残り　洋々
ヒマワリが見ている弱音など吐けぬ　美恵子
びろついた椅子に画鋲が置いてある　一瑶
ヘソの緒のパイプ一生分の愛　無限
柩もつ孫が八人出来ました　稔
だめですよ棺に二人で入ったら　善夫
今に見ろやられたようにやり返す　圭一郎
エコのためひつぎも紙になるそうな　節子
やられたら遣り返さんと治まらん　清信
美女先生今日も父さん保護者会　孝男
目には目だ復讐の刃を研ぎすます　雅女
棺の亡母に最後の紅をそっと引く　毅
生きて来た知恵で何とか泳いでる　一京
出版ブーム自分の恥をさらけ出す　大鯰
後継ぎが出来て隠居という渾名　妻子
びろつくと老いの脈拍乱れだす　菊香
柩には愚痴も恨みも入れておく　孝柳
破綻した愛ならいくらでも書ける　美雪
すっきりと眉は引いても気は重い　春名
柩なら酒樽が良い酔って逝く　啓治
おくりびと無理やり詰めるメタボでも　行男
目には目をいつまで戦するつもり　義徳
目には目でいがみ合うのか嫁姑　昌鼓
人間も体にパイプ入れて生き　菖子
離婚劇パイプ役には子を使う　茂登子
妻の乱家のパイプが断ち切られ　房江
路地裏に見送る人もない柩　喜美子
沢庵の漬け方残しこの柩　悦子
目には目と言えどどうにもならずいる　南花
目には目の政治はすまい民意聞け　金祥
目には目を怨み消えないひったくり　喜子
柩からことんと音がしたような　秋月
デスマスク穏やかでした妻の棺　清帆
厨にはびろつく素材たんとある　益子
大中小パイプに差別ない絆　一粋

川柳塔鹿野みか月（鳥取）福西　茶子報

大夕焼けをのみこんだ日本海　螢
夕焼けが恋をしたらとささやいた　くに子
過去から未来へ駆け抜けて行くブランコ　彩子
お日さまにあっさり負けた雪だるま　茶子
誕生日父にあっさり負けてあげ　（北）稔
ふるさとはいいな夕陽が海におち　重忠
あの日からずっと私は賄い婦　（西）和子
夕焼けに今日を感謝の鍬洗う　弘子
あっさりとバラの首切る花挟み　八重
今日を賄う日本海を釣ってくる　（鹿）節子
まかないはオラに任せとおばあさん　菊乃
心の窓開けば友がよって来る　幸枝
お喋りが好きと言ってる元教師　睦子
相談に来いよ金なら貸してやる　蟹郎
太陽と水と空気に賄われ　石花菜
夕焼けのささ波すくい鍬洗う　実満
古里の夕焼け雲が目に浮かぶ　久枝
賄いにボツボツ認知症の感　はるお
あっさりとことわり胸が楽になる　房子

鮒目高漁った頃の里の川　みどり
あっさりと白状させた妻の勘　美代子
あっさりと握手をもらい身が震え　かおる
賄ってもらい老人やってます　汲香
あっさりと辞任をすれば事は済む　みさ子
フレッシュを漁り続けている詩人　諷人
あっさりと難関抜ける司会ぶり　永子
繰越金予算に入れてほっとする　(岩)和子
国連に賄う国をかかえこむ　小生
罪のない鮎があっさり友を釣り　富久江
十人を賄うパパは休めない　惣子
地引き網触っただけで魚もらい　露子
あっさりと一次これから首賭ける　孔美子
寄付金と賄賂で罪を認めない　かつみ
賄ってくれる仕事をハローワークへ　和枝

ローズ川柳会(兵庫)　山崎　君子報

年寄りは邪魔にならなきゃ一人前　てる
早いもの十年むかしなつかしい　キク子
先生の先生やはり偉かった　みつ子
梅雨晴れ間からりと愚痴を干しておく　哲子
旅立ちの雨も若葉に癒される　藍
紫の花と語らう梅雨の入り　貴代子
若葉萌ゆ今佳境なり平家琵琶　年代
オイ虫よ若葉ばかりを食べないで　義子

岸和田川柳会(大阪)　土橋　房枝報

虹にまで悩み聞いてと一人ごと　はるえ
日朝に何でかからぬ虹の橋　泰弘
明けた朝虹が出てたか田原坂　呂万
白無垢を夫が染める虹の色　寿海
母の愛虹色話めるお弁当　東吉
老いつつも子に順えぬ意地があり　昭
権威より情に脆い母人気　若芽
権威者の陰で泣いてる妻がいる　清
大臣の権威を下げる軽い舌　弘子
父親の権威が落ちた四コマ目　希久子
手入れした土は実りでこたえてる　洋
核心をそらしこたえる人がいる　恵子
説教より母の涙がこたえます　玄也
目で合図それにこたえる夫婦仲　俊昭
只今へ一番先にワンと吠え　力子
甘え泣く子をそっと抱く若い母　柳風
受け答えしどろもどろの上がり性　幸子
新社員こたえる言葉から教え　笑司
ありがとう答え残して発つ煙　仁緑
父の日にさっぱりこないプレゼント　和美
汗をかきシャワーさっぱり夏もいい　淳風
父さんの駄洒落さっぱり受けません　珠子
最近はさっぱり来ない紙芝居　義泰
付添いのホラー映画でママが泣く　香代
戦争はシネマの世界だけでいい　隆昭
シネマ館ポップコーンの音がする　房枝
冤罪が晴れた日本一の顔　蛙城

和歌山三幸川柳会　武本　碧報

やんごとなき流人の裔の目鼻立ち　朱夏
大八州臍の辺りが我が住居　寛
島のアンテナ本土の方へ向いて立つ　賀代子
島流しここで終ってなるものか　みね
列島がのびちぢみする時刻表　章子
縋りたい島には渡る橋がない　八重子
地球から島が消えるというカルテ　純子
一人だけの入学生に島が沸く　房代
ハンガーへ吊してみたい島の数　絹子
浮き袋ほしいと思う島もある　登美代
僕の青春抱いて眠った島がある　幸
独身貴族連休グァムへひとっ飛び　桂香
おおらかに生きてこっそり逝くつもり　昇
人知れず流した汗が実を結ぶ　嘉平
こっそりと腕を磨いている野心　菜摘
土壇場でこっそり渡す袖の下　准一
達人もこっそり茶漬食べている　碧
病名を伏せてこっそり母見舞う　義雄
こっそりと女心に紅を塗る　かずみ
わたくしの骨です蓋を取らないで　理恵
蓋された歴史が真の歴史かも　東吉

毒入りのギョーザは蓋をされたまま　町子
ぐつぐつとストレス煮込む落し蓋　当代
落し蓋たぎる思いを封じ込め　富子
出しゃばらず卑屈にならず落し蓋　起世子
種を蒔く土への祈り深くして　イセ
蓋開けてそこまで来てる消費税　芳女
駅弁の蓋の裏から動く箸　孝義
偏差値は気にせず翔ぼう好きな道　俶子
少年野球みんな弾けている若さ　かず子
少女等の交す言葉は辞書に無い　孝子
デイケアで少女のようにはしゃぐ母　保州
それからを風も知らない少女A　幹子
少年の未来宇宙にきっとある　智三
生傷の絶えぬ少年期のこころ　和子

竹原川柳会(広島)　古田　太虚報

筆供養感謝の心青く澄み　太虚
感謝の日ママに上げたい赤いバラ　美智子
雨降って蛙も感謝しています　笑子
先はどうあれ今を感謝して生きる　慶子
ありがとう素直に言える子の笑顔　ヒデコ
赤ちゃんが笑う感謝をしてるんだ　蘭幸
アンティークドール瞳の底に良き時代　輝恵
行き帰る少年に恋したお人形　幸子
泥遊び埴輪人形らしく出来　規代
人形がボクにウインクしたような　笹舟
武者人形きっと耐えてる肩の凝り　かずえ
眼をじっと合わせば人形喋り出す　一路
人形の警察官におどかされ　栄恵
人形の瞳に太平洋を見た　比呂子
御好意に甘えてばかり独り住む　栄香
そうだったひとり呑み込み苦笑い　半徳
影ぼうしひとり芝居も板に付き　敬子
お仏飯供えひとりじゃありません　房子
ひとりでも家計簿つけている律儀　力
リハーサル無いままいつかひとりなる　汎美
大空の千年杉のひとりごと　淑子
ご先祖に義民がひとりいた系図　静風
立葵熱い青春謳い出す　厚子
ちょっとそこまで今日は歩いて行こうかな　千枝
指きりで約束これが効くのです　史子

わかあゆ川柳会(島根)　松本はるみ報

たんぽぽの黄の輝きに足を止め　伸子
輪になれば話もはずむお茶の味　ちよえ
ど忘れもここまでくれば素晴らしい　かつ子
遠き日の蛙の声や人恋し　はるみ
古池で今年も睡蓮白く咲く　好栄
雨の日がうれしい赤い傘がある　恵美子
うとうとと山野を馳ける昼寝どき　聖子
雷も相手があるから落ちやすい　博利
石楠花のピンクに酔うた蝸牛　清泉

川柳塔わかやま吟社(前月分)　川上　大輪報

赦す時父は黙って座をはずす　俶子
昭和史を生きた証の父の手だ　精子
事起きて父の威厳が保たれる　紀子
信じよう父のレールに無駄はない　登美代
父の顔知らぬが胸に生きている　紀久子
男です父です茶碗大きめに　輝子
何も言わない何もしないが父である　大輪
蝸牛わたしが這ってきた時間　あきこ
はみ出した時が心を耕して　小雪
立ち上がるチャンスをくれたロスタイム　冨美子
残り時間へせめて畳んでおく余韻　寿子
愛少し感じる時間ジャンプする　翠子
時間から時間きっちり縛られる　美羽
日々好日やんわり溶けてゆく時間　怜
二人には二人の時間現住所　緑良
時間切れ回転寿司が捨てられる　美子
傷ついた心の窓が濡れている　准一
足濡らすことにも慣れた嫁の鍬　裕美
紫陽花の濡れて絵になる季も愛し　克子
濡れてしまえば脈打つ雨も心地よい　よりこ
裁判で濡れ衣なんて許せない　よしこ
濡れ衣を脱いだ本音がせきを切る　利治
スタッフの真ん中にある母の笛　徑子
旨みだす色とりどりの野菜たち　ほのか

目立ちすぎてやめさせられたエキストラ　保州
スタッフを盛り上げている軍資金　泰女
スタッフが元気で続く旅行会　智三
スタッフの募集年中貼ったまま　英子
スタッフの紅一点でしたたかで　三男

むらくも川柳社(島根)　毛利　幸報

変な夢冷や汗かいて眠られず　英男
夏だもの汗が出るでる絞るほど　定子
汗水を流した苦労報われず　宣雄
信号を無視し冷や汗かいている　幸
新型で無くて安堵の咳をする　信夫
約束を終えて静かに花は散る　恵美子
廃校のニュースさみしい田舎町　ます美
観光に温泉マーク揺れている　彰
慰めか一緒に歩いてくれる月　秀子
雑草と今日も明日も遊んでる　美保
人真似でない川柳へ明け暮れる　蘭水
戦して同期の桜花と散り　瑞枝
返品可殺し文句に騙される　俊夫
少子化に命の絆脆くなる　秀夫
母の日は忘れていない鳥でした　かずこ
時移り自分の好みも忘れかけ　愛子
祝杯に感謝心情久し友　喜美
年重ね二人の食事ほのぼのと　久子

岩見川柳会(鳥取)　石谷美恵子報

口数の少ない嫁に気をつかう　蟹郎
嘘ついた口を洗って知らぬ顔　孝男
見て聞いて口からもれる溜息よ　節子
口先の嘘が目元に現われる　一京
就職口ないが人生長いんだ　稔
口下手が今日は蜂蜜舐めて出る　よしえ
口喧嘩後ろを向けばもう忘れ　菖子
はよ寝よと言わないでまだ宵の口　和子
口八丁手八丁の仕事する　かつみ
青い鳥追えば追うほど遠ざかる　圭一郎
母の後追い泣く声の愛おしく　公子
万両も千両も咲く庭がある　螢
見事咲く花に鋏は入れられぬ　はるお
生きているだけでも見事ではないか　完司
采配の見事な鬼が好きになり　一瑶
真実のなみだで勝った自己主張　一粋
税務署とからくりごっこした昔　重忠
からくりは飲まず食わずのダイエット　茶子
少しずつからくりあかすサスペンス　美雪
からくりは烏賊がスルメになっただけ　忠良
からくりのない芽素直に伸びてくる　たぬ
要注意からくりきっと隠れてる　幸枝
気をつけよぼろい話にからくりが　清帆
猪が罠のからくり知っていた　幸安
からくりの糸が絡んで動けない　和枝
政治の裏でからくりが渦を巻く　雅女
追いかけるほどの器でない別れ　美恵子

川柳花の輪(大阪)　妻谷　重風報

ひと言がわたしの夜を掴みます　音成
亡き母のあのひと言で立ち直り　芽田暮
さようなら貴方のロボット電池切れ　一幸
待ちぼうけだなと笑ってる花時計　薫
相手への愛の深さが待つ時間　風
七夕のデート宇宙へ駆り立てる　克衛
握りしめ板チョコ溶けた初デート　善栄
転ぶまい踏絵の前の信仰心　泰子
八起き目の保証ないので転べない　重風
ころんでも立つまで待った親の愛　やすの

尼崎尾浜川柳会(兵庫)　田原　一兆報

不平不満一時あずかる火消壺　一兆
中元に素麺届き夏仕度　野薫
モニターにあなたが映るお越しやす　里江
静いに優しい妻も鬼の顔　五月
しんどいが義理が重たい慶弔費　亀与子
赤い傘畳んで君へ雨宿り　菜々子
しんどいな人に言えない空財布　よしひさ
掃き出してふと来客と顔が合い　イサミ
入りたくないのに開く自動ドア　雪菜

訪問先着いて気付いた忘れもの　奮水
通り雨玄関先の雨宿り　真陶
グラマンのように一匹蚊が攻める　靖鬼
玄関にドラマのような刑事くる　耕治
不満なら自分でやれと捨て台詞　かずお
寝て起きて食べて笑ってなに不満　美代子
ながながと玄関口の立ち話　朋月
玄関を出ると男は兵となる　鹿太
玄関の男の靴は泥棒よけ　江美
吠えぬ犬目だけギョロリと玄関に　キヨミ
天の声地の声よりも妻の声　美義
歯に衣きせぬひと言から亀裂　紀乃
巣作りのつばめよ玄関はあちら　求芽
小遣銭不満だらけのワンコイン　祐康
笛たいこ先祖もきっと祭り好き　章子
玄関を一歩いずれば魔女になる　義子
人間の不思議哀しいのに笑う　いわゑ
大笑いしたので今日は歳とらぬ　哲男
帰ろかな祭り太鼓が呼んでいる　孝一
子育てはしんどいけれど花が咲く　あかり
お祭りに華を添えてる泣き相撲　哲子
大らかに迎えてくれるドアのノブ　美籠

川柳塔まつえ吟社(島根)三島　淞丘報

湖の歴史を語る嫁ヶ島　叮紅
湖の町虜にされて根を下ろす　昌枝
キラキラとロマンの湖に島が浮く　蘭水
波の音湖水に寄せる四季の顔　和歌子
宍道湖がだんだん活気とり戻す　英子
波荒れる湖岸電車は風を切る　スズコ
万緑の山のホテルで深呼吸　知恵子
眠れない二十二階の部屋にいる　幸子
チェックオフ宿の感想書きしるす　禮子
安心のできるホテルは君だけだ　柳歩
河鹿鳴く山のホテルのラブソング　幸代
ラブホテル遠くで犬が吠えている　茂美
きらきらとイミテーションがよく喋る　畔
きらきらの無い本物の底光り　長吉
きらきらと光る物には裏がある　幸
いのちみつめてきらきらと目が光る　螢
収穫のトマトきらきら手にころぶ　房子
ネックレスきらきら値踏みされている　静恵
透き通るまでに悟った干し魚　紫晃
太公望鮎に嫌われ解禁日　注湖
魚拓一枚無口しっかり喋り出す　桂子
魚へん読んで書ける字二つ三つ　政子
夏祭り金魚掬いに弾む声　ちえこ
飛魚は野焼きになって名を残す　日出子
てのひらで掬った夢が逃げてゆく　治代
どのように掬ってみても洩れる幸　多喜
仕合わせを掬う手の平みてもらう　繭
踏ん張って立てよ掬われやすい足　薫
原点に戻って愛を掬いたい　たけし
渇きだす心に掬う今朝の水　淞丘

六甲川柳会(兵庫)　伊勢田　穀報

空青く裸の心こそ大事　みつ子
ウォーキングいきいき緑の風になる　いわゑ
酒三日止めたら僕は抜け殻さ　光久
酒樽を割って勝者の顔になる　千賀子
通夜の席隅へ片寄る飲み仲間　礼甫
止められた命削って隠れ酒　史郎
ほろよいの美酒のお友はあこになり　(小)孝子
晩酌は妻の笑顔で味変る　繁義
末席で下戸それなりの気をつかい　美穂
傷口が少しひらいた梅雨最中　能子
身の丈に合う生活が道ひらく　勝
ワンタッチ開いてくれる花もある　美恵子
母の愛閉じた子供の心あけ　勤
削ってもついパンドラの箱ひらく　基輔
お開きはまだかと焦る靴宥め　政一
プラス面見つけ心の窓ひらく　寛子
鍵なくし金庫たいてひらけゴマ　茂
自信なく細目にひらく通信簿　浩司
古日記ひらけば父の歴史あり　(山)弘子
胸襟を開き柳友増やしてる　穀
真ん中でデンと居座るダンゴ鼻　和郎
独り占めしたい笑った青い空　(早)孝子

温めた場所は誰にも譲れない　順子
面影が胸の余白を埋めつくす　武彦
何もかも独り占めしてバチ当る　忠貞
産直の自然が占める道の駅　洋一
うきうきとテレビの中で旅をする　悦子
早起きをしたのに雨が降っている　登美子
子供らのメールに絵文字踊ってる　利子
今だって僕の頭はあなただけ　弘
チョキを出す孫にバアバはいつもバー　(飯)弘子
一本の輪ゴムが我慢しろと言う　無限
監督が何人もいる外野席　楓楽

豊中もくせい川柳会(大阪)　藤井　則彦報

ウイルスがデータ不足をあざ笑う　啓生
急ぐから余計解けない縺れ糸　庸佑
軽く押す印の重さに今敷かれ　郁子
花ござの真ん中ひまわりが笑う　きらり
ペンネーム使えば自分変わりそう　(永)玲子
不確かな明日へ布陣を変えてみる　隆
五十年敷かれた尻もよく育ち　満子
ゆっくりと歩いたら駄目老いがくる　堅坊
ジム通い帰りの足でパン屋さん　夢
ひと滴ずつで潤す父母の墓　則彦
発明の着眼点にデータあり　早人
ときめきで少し緩んだ女帯　遠野
家計簿のデータ取ってもケセラセラ　(岩)玲子
知ったか振りデータ不足を突っ込まれ　萬的
遠い子の名前を付けて拾い猫　十八娘
箱口令敷いてもメールから洩れる　見清
湯上りのビール楽しむ一万歩　美智代
踏んぎりがついたかおかわりするご飯　求芽
病名を知った日記の字の乱れ　千代
弁解に乾いた脳がもつれ出す　美義
生きてます歩けていますありがとう　寿美子
一生に呑んだ酒代足してみる　尚士
歴然と過去まで暴き出すデータ　美籠
手を洗い顔を洗って出直すか　理恵
データは二の次ずはわたし流　志津子
海の日も黙したままの拉致の海　幸雀
敷かれた道歩いただけと蝉が鳴く　葉子

川柳塔すみよし(大阪)　岩崎　公誠報

年下の新米上司にあしらわれ　末吉
米粒を拾って食べた頃思い　舞夢
ポン菓子の音へ弾んで駆けた頃　賢子
米櫃も小さなものにして二人　かりん
いい米を使うてるなとにぎり飯　哲子
故郷の新米の味噛みしめる　庸佑
白米を貧乏人も食べられる　裕之
明日あると信じて今日も米を研ぐ　のん子
真っ白いご飯が好きで医者いらず　日の出
百歳まであと一回りある米寿　桃花
減反をさせて事故米まで輸入　美籠
おたまじゃくしの棲んでる田んぼの米美味し　シマ子
生活の中心に置く米櫃よ　半銭
米粒のひと粒毎に神おわす　いわゑ
ひと夏をイナゴバッタと遊ぶ稲　克博
だぶついた米を使ってパンパスタ　りつえ
ずぼらして買うたがまずい無洗米　章久
なさ母はダイヤモンドと米替えた　温子
一粒も残さぬ茶漬けしめくくり　蕉子
めはり寿司肴に地酒弾み出す　哲矢
八十八回手間に感謝と教えられ　定子
美少年を不良にしてた汚染米　遠野
なんでやろ斜めに田植えしてしまう　篤子
米俵知っているかと孫に聞く　チエコ
にぎり飯すこしいびつが味を増し　義子
米粒を蒔いて雀と知恵くらべ　岳人
ありがとう命繋いでくれる米　朝子
米の飯食えるだけでも御の字だ　克己
行平で愛聞きながら粥になる米　(矢)五月
米の字をゆっくり書くと米らしい　太郎
米びつが何時も気になる子沢山　(奥)五月
飽食の神の戒め穂が軽い　ばっは
粒よりもやっぱり美味い汁の米　昌紀
フィクションを重ね虚飾の米を研ぐ　柳弘
ネイルアート米を研げない手に仕上げ　美津子

川柳塔打吹（鳥取）　野口　節子報

末席に座りあぐらをかいている　芙美子
意中の人隣の席を陣取ろう　貴恵
ようやくに本妻という席が出来　勝誉
嫁が来ぬ主婦の座席もくたびれた　美知江
末席は舟をこいだり高鼾　玲子
若き日の写真は痩せた八頭身　たけ代
痩せ腕に一家の重荷のしかかる　久芽代
猛暑日に団扇涼とる痩せ我慢　清
ばあさんが痩せ衰えて口達者　富恵
痩せたねと抱きしめられた夢の中　孝恵
痩せていく財布太ってゆくお腹　龍枝
よろめいて痩せてしまった軽い口　睦子
人間が肥り地球が痩せていく　三津子
政界のドンは得意の金集め　小生
聞こえぬふりは神さまの得意技　完司
手なずけて骨を抜くのが得意です　いさお
得意気な老いの横文字誤字脱字　美代子
三重丸でいつも得意の図画だった　克枝
弁護士は得意で黒を白にする　石花菜
目も耳も口も天狗の鼻になる　美ッ千
老いてても得意な時は輝いて　滋
取り調べ故意に狂った振りをする　よしえ
古稀の坂バイク狂いで乗り越える　玲坊
百歳万歳まだ狂わない石頭　禎元
狂うほど恋して渡る天の川　みち子
地軸まで狂いはせぬか核実験　公恵
狂いだす臘を踏んだ足の裏　重忠
狂うほど人を愛したことはない　和子
朝昼晩酒に狂って妻逃げる　紀美恵
雌を焦がれて狂い死にする男　螢
川柳に狂っている人達と居る　義人
小刻みにだんだん狂う古時計　京子
人間は愚かで純でよく狂う　芳光
良妻をちょっと狂わせたのあなた　くにこ
大根の白さに狂う男達　節子

川柳大阪　長井　善純報

目標へ心一つにひかる汗　朝子
衣食住大汗かいて妻介護　章久
我が家には夫婦の汗の土台あり　喜楽
終戦日あの日の汗は忘れない　一歩
流す汗報われる日がきっとくる　美花
ひや汗が失敗したと気付かせる　功
レギュラーへ汗は決して裏切らぬ　義明
未来へと続く命に汗をかく　芳香
友を切り汗かきドンが椅子守る　司
働いた五体の汗は黄金色　照月
汗かいた分だけ温いありがとう　かよこ
ボランティアええ汗かいて笑顔の輪　和
適当に相槌打ってケセラセラ　柳弘
適当がいやでとことんバット振る　笑風
適当に折り合う知恵はあるつもり　柳昌
適当にできぬ性格損ばかり　勝弘
適当に歳はいつでも若く言う　五月
O型の血が適当にヤレと言う　まつお
紫陽花の優しい雨に色を変え　いっふみ
カゼふかば日本国中危機管理　彦太
損得で動く人だけ避けておく　信酔
意外にも常識知ってる我が子かな　とし坊
なる程ねこの服と靴バッチリや　美世子
なる程なやっぱり女やったのか　楽子
なる程ねうまい話の落とし穴　珠生
イチローがなる程と言う結果出す　紀雄
胸キュンの感動みんな息を呑む　東吉
なる程ね若さの秘訣恋ですか　花笑
なる程と何れは分かる親ごころ　善純

川柳さんだ（兵庫）　北野　哲男報

ずん胴の市松人形和の美人　哲男
胴長をコーデネーションする和服　光久
空腹にメタボ気になるバイキング　雅司
インフルにかこつけ顔を隠す人　一泉
グランドに寺建てさせた裕次郎　正和
老練な人の言葉に無駄がない　キヨミ
子守唄歌う美智子妃評判に　章子
腰痛のベテランですと自慢する　歳子

嫁はんに威厳も人気もさらわれる　祐康
書道展ベテランの作足とまる　美紗子
わらじ履く鈴虫寺の人気者　ちあき
人気者心の休む暇がない　裕美
地団駄を踏む人多く地球ひび　晃
子が生れ勘当娘里帰り　一子
へその胡麻とる快感にしばし酔う　好文
ありがとうだけは素直に聞ける耳　順子
どうしても洗いたくなる無洗米　二英
アル中にならぬ程度に呑んでいる　忠

ローズ川柳会(大阪)　山崎　君子報

もうお盆何をしたやら梅雨も明け　てる
情熱のかけら探しに蛍狩り　みつ子
蛍火で学んだ人がいとおしい　藍
大笑いしたら肩凝り解けていた　哲子
マイク奪り反論したい無税化論　貴代子
雨もよし傘はわたしの宇宙です　いわゑ
本伏せてわれに返った夕支度　年代
自然体に生きる気負は流すべし　義子
番傘で迎えられます山の宿　君子

川柳ねやがわ(大阪)　籠島　恵子報

愛犬を捜すポスター雨に濡れ　庸佑
ポスターに雨具を着せに行くバイト　頂留子
百円傘売るほど家に置いてある　敬

災いをさけて沈黙守る腹　博泉
消去法みな消えそうな顔ばかり　仁清
ユーモアのスープになった野菜屑　とし子
陽が沈みブランコだけが揺れている　たもつ
泳ぐのはよそうゆっくり古希の坂　かすみ
ユーモアがあふれいつでも人の垣　芳子
固まったあたま作句でマッサージ　ひろみ
スローライフに檸檬沈めるティータイム　弘一
ユーモアを入れた披講に座が和む　栄二
母子手帖広がる夢へ子を泳ぐ　一風
ユーモアが効いて歯車よく回る　祥昭
ボーナスカット沈む夕餉に缶ビール　麗
流れ星父の伝言かも知れぬ　ルイ子
旅行会次は何処と沸く期待　三郎
ときめきのふたりで泳ぐ夏銀河　朝子
犬かきで愚直に泳ぐ道一つ　鈍甲
焼き鳥の匂いを服に持ち帰る　弘風
幸せな時を生きたかデスマスク　賢子
扇子の手止めて身の上ばなし聞く　茜
ユーモアで解凍してる嫁姑　忠央
酒の席で固めた天下とる話　修
街が好き山や海にはよう行かん　さち子
固まると厄介モンとなる知性　ただよし
計がつづくしずしずと夏が行く　恵子

堺川柳会(大阪)　河内　月子報

あれこれと勝手に言えよ外野席　和夫

あれ以来阪神戦は見ていない　日の出
顔やないあれで結構もてている　俶子
旅カバン最後は妻がチェックする　千代
奥さまの意見とわかる電話口　りつえ
年金のつく夫です守ります　直樹
震災に備えて酒も買ってある　朋月
あれそれで通じる女房らしくなる　つづや
褒め言葉二つ三つをポケットに　みつこ
とりあえず頭を下げてあれどなた　梓
飄々と突如つまらぬこと喋る　玄也
あれからは僕の人生下り坂　としお
奥伝を取りましたので止めました　舞夢
その奥を覗きたいので酒を注ぎ　像山
先先のために慰謝料聞いておく　好
ポシェットに今日の気配り入れて出る　扶美代
長生きに備え粗食に耐えている　唯教
あれはもう時効と本人だけが言う　五月
備忘録他人の恩がよく光る　のん子
父ちゃんのあれはいつでも冷えている　月子
遺言書初版を出して二十年　山彦
万一に備えてニトロ持ち歩く　雅明
引き際がとても大事とこだわった　さくら
久々のときめきだったコンサート　かりん
言い訳を考えてから飲みにいく　天笑
同期生社長を指してあれと言う　時雄
定年の備えやっぱり甘かった　公誠

あれ以来無二の親友続いてる　八千代
貯めましたいつでもできるグッドバイ　進
厳冬の老後に備え蟻となる　政男
ひぐらしを遠くに聞いて恋破れ　健吾
ひと言に年申斐もなくこだわって　ゆきの
彦星とトンネル抜けて恋の道　綾乃
独りではとても難題越えられぬ　妻子
あれからの余生なかなかご活躍　冬虹

川柳黎明10年の集い

とき　十月十一日(日)　開場11時30分
ところ　ホテル・ルビノ京都堀川2F
交通　京都市バス・堀川下長者町下車
京阪・四条駅下車、タクシーで約10分
会費　1000円(発表誌500円)
兼題「湧く」丸山　進(瀬戸)
「あした」山本　乱(大牟田)
「跳ぶ」徳永　政二(草津)
「祭り」筒井　祥文(京都)
「帯」前田芙巳代(姫路)
「華」森中恵美子(摂津)
「十年」田中　博造(黎明舎)
締切　13時　各題2句
交歓ばあてい　会費　5000円
主催　川柳黎明舎

第59回 岸和田市民川柳大会
岸和田市文化祭参加

とき　10月18日(日)12時開場
ところ　岸和田市立福祉総合センター1階
電話072-438-2321
(南海本線岸和田駅山手へ徒歩3分)
おはなし　伊藤正哲氏(安福寺住職)
兼題　各題2句　欠席投句拝辞
「だんらん」山本　柳昌　選
「情熱」山岡冨美子　選
「利口」荻野　浩子　選
「魔法」木本　朱夏　選
「つかむ」松本初太郎　選
「リアル」雪本　珠子　選
締切　午後1時　披講　2時30分
会費　二千円(参加賞、発表誌、軽食)
懇親宴賞　文化祭賞、文化祭奨励賞　他
連絡先　四千円　TEL・FAXで申込
井伊　東吉(TEL 072-444-3227)
岩佐ダン吉(TEL 072-428-0325)
主催　岸和田市・岸和田市教育委員会他
参加団体　岸和田川柳会

第58回　東北川柳大会

日時　9月27日(日)9時30分開場
会場　仙台市情報・産業プラザ「アエル」
会費　二千円(昼食・発表誌呈)
宿題　(各題2句　雑詠二人選で同一句禁)
「義理」青森　高瀬　霜石　選
「絆」秋田　荒川　祥一郎選
「元気」山形　伊東　マコ　選
「鮮やか」岩手　吉田　成一　選
「微妙」福島　小林　左登流選
「雑詠」宮城　雫石　隆子　選
「雑詠」新潟　大野　風太郎選
席題　発表10時　出句締切11時半
賞　河北賞・宮城野賞　宮城県知事賞
仙台市長賞　他
投句　千円(現金・小為替)　9月10日迄
〒985-0031
塩釜市石堂7-27　木田比呂朗宛
前夜祭　9月26日18時ホテル法華クラブ仙台
大会事務局　〒980-0011
仙台市青葉区上杉2-4-8
朝日プラザ上杉313　川柳宮城野社
TEL・FAX　023-227-0575
主催　河北新聞社　川柳宮城野社

「美と川柳Ⅵ」観月の夕べ

と　き　10月1日(木)
ところ　兵庫県立美術館
（電話078－262－0901）
宿　題　「　波　」　山本　芳男　選
「　月　」　上野多恵子　選
「騙　す」　西口いわゑ　選
「野　菜」　大熊　純三　選
席題なし　各題2句　欠席投句拝辞
受付開始　13時30分　美術館1階
（句箋と美術館入場券をお渡しします）
投句締切　15時　句会15時30分～17時
月見の宴　17時30分（館内レストラン）
会　費　4000円　美術館観覧料・句会費
月見の宴（シルバー割引適用のため生年月日をお知らせ下さい）
申込先　中井　昭子　〒651-1123
神戸市北区ひよどり台2-2-62
（TEL078－743-6072）
主　催　兵庫県川柳協会

第43回東大阪市文化祭参加
第37回市民川柳大会

日　時　10月18日(日)正午開場
会　場　東大阪市社会教育センター3階
近鉄布施駅北口三井住友銀行北へ5分
電話０６－６７８９－４１００
ビデオ放映　「日本の城」その2
宿　題　各題2句　出席者のみ
「　彩　」　安土　理恵　選
「背　中」　奥山　晴生　選
「抱　く」　小山　紀乃　選
「根　性」　竹森　雀舎　選
「　今　」　前　たもつ　選
「　芯　」　宮崎シマ子　選
「信じる」　吉田わたる　選
会　費　二千円（軽食・発表誌　呈）
呈　賞　秀句賞　佳作賞
懇親宴　四千円　（当日受付）
問い合わせ　片岡湖風 電話 072-965-1341
主　催　東大阪市文化連盟・東大阪市川柳同好会・わかば川柳会
後　援　東大阪市・東大阪市教育委員会

お願い

川柳塔社では2010年10月に『川柳雑誌』『川柳塔』通巻1000号記念大会開催に当り『麻生路郎読本』(仮題)の出版を予定しています。

麻生路郎に関する**書簡・写真**或いはどんな些細な情報でも、お持ちの方は川柳塔事務所までご連絡下さいますようお願い致します。

川柳塔社
（06－6779－3490）

柳界展望

○6月13日、おかじょうき川柳社主催川柳ステーション2009は青森市にて開催。同人の特選。

太宰百年たっぷり掛ける味の素　高瀬　霜石

○7月12日、第12回鳥取県川柳文芸大会は118名の参加により開催。同人の天位。

先陣の我慢を思う風当たり　鈴木　公弘

日蝕を見に上海に出かけよう　新家　完司

野心まだ捨てぬ渚の潮だまり　鈴木　公弘

コンビだが役に立たない僕の影　新家　完司

原点にまだオアシスの水が湧く　両川　無限

総合準優勝に両川無限、第四位に両川洋々、第六位に新家完司、第八位に鈴木公弘、第九位に石谷美恵子、第十位に倉益一瑶の各氏が入賞。又鳥取県川柳文芸大賞を倉益一瑶氏が受賞。

さくら咲く人が死のうが生きようが　倉益　一瑶

○7月26日、創立35年川柳展望全国大会はホテルアウィーナにて開催。同人の秀句。

いざという時に飛べなくもない窓　早川　遡行

好きだからちょっと触ってみたくなる　土橋　螢

日本語しか解らないので此処にいる　新家　完司

原爆の投下に時効などはない　川端　一歩

○8月1日、第27回夜市川柳大会は113名の参加により開催。同人の天位。

転んでも笑う気力を持っている　上地登美代

夏帽子リボンを変えて飛ぶつもり　高島　啓子

無人店風を信じているんだね　太田扶美代

あの人に光ってるよと伝えたい　山田　耕治

雲ふわりいいなああしたは明日の風　村上　直樹

とんがった所を森で削ぎ落す　新家　完司

▽御芳志御礼△

○札幌市の小沢　淳氏（誌友）より、日川協札幌大会での参議院議長賞の受賞記念として、金一封を拝受。

▽出　版△

○そうりゅう会（代表世話人、村上玄也）は創立10周年を記念して合同句集「そうりゅう会句集その五」を発刊。会員30名の句を掲載。B6版62頁。

▽柳界動向△

○番傘川柳本社八月句会（水府忌）は8月6日、ホテル大阪ベイタワーに於いて開催。出席者124名。川柳塔社から18名が参加。7月路郎忌本社句会との交換選者を河内月子氏がつとめた。

▽訂正とお詫び△

8月号79頁上段、「保険」12行目、金山宣子→金**川**宣子。92頁上段21行目宮田宣子さん→宮田**宜**子さん、92頁中段1行目吉道茜さん→吉道**あか**ねさん。

新同人紹介

藤岡ヒデコ
―淑子・笑子・蘭幸推薦

馬場利子
―淑子・笑子・蘭幸推薦

岩本雅代
―淑子・笑子・蘭幸推薦

▽新誌友紹介△

奈良市　紹介者　**加門　萌子**

西宮市　紹介者　坊農　柳弘

西宮市　紹介者（右二名）奥田みつ子　**株元　玲子**

向日市　紹介者　**松本としこ**　**中山　緑**

大阪市　紹介者　都倉　求芽

篠山市　紹介者　高杉　千歩　**高杉　力**

遠山　可住　**沢山　啓子**

西脇市　紹介者　北野　哲男　**中村　裕美**

常任理事会＝出席21名。①川柳塔85周年記念大会・一〇〇〇号記念大会関連。②理事の任務・他③新年度常任理事・理事の推薦④高野山合祀祭（11月7日）関連⑤定例確認事項⑥各部報告事項⑦同人3名承認。次回＝9月7日（月）13時30分

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳 ねやがわ	20日(日) 午後2時締切 看板・吹く・鍵・自由吟	寝屋川市立総合センター　寝屋川市駅からバス 〒572-0063 寝屋川市春日町9—9　高田博泉
岬川柳会	20日(日) 午後1時半締切 添う・骨・即席	淡輪17区集会所 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
川柳 藤井寺	20日(日) 午後2時締切 参加・つくる	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺駅下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 髙田美代子
豊中 もくせい 川柳会	21日(月)午後1時50分締切 浮く・無理・そろそろ・自由吟	豊中市中央公民館　阪急曽根駅南東徒歩5分 〒561-0801 豊中市曽根西町2—8—4　江見見清
川柳クラブ わたの花	25日(金) 午前9時半から 強気・あご・柱・自由吟	八尾市生涯学習センター 〒581-0834 八尾市萱振町1-16-1-501 田邊浩三
岸和田 川柳会	26日(土) 午後1時半締切 原価・こねる・さまざま ジャンボ	岸和田市立福祉総合センター 〒596-0807 岸和田市東ヶ丘町808-586 井伊東吉
川柳塔 すみよし	26日(土) 午後2時半締切 人気・猿・家	住吉区民センター　南海高野線沢之町下車3分 〒558-0041 大阪市住吉区南住吉3-16-8-206 鶴田遠野
東大阪市 川柳 同好会	26日(土) 午後7時締切 灯り・黙る・天狗・泥	東大阪市立社会教育センター3階 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3—3—21　片岡湖風
川柳塔 わかやま 吟社	27日(日) 午前11時開場 **和歌山県川柳大会** (詳細は本誌7月号109頁)	JAビル本館5階　大ホール JR和歌山駅西口歩3分 〒640-8482 和歌山市六十谷1188—14 川上大輪
はびきの 市民 川柳会	27日(日) 午後2時締切 切手・叱る・ユニーク ぱりぱり	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8—31—11　塩満　敏
川柳 ふうもん 吟社	27日(日) 午後1時より 用が無い・サンプル・献金	鳥取駅2F　シャミネホール 〒680-0872 鳥取市宮長205—45　萩原美雪
松露 川柳会	28日(月) 午後7時半締切 コーヒー・散髪・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口757-3 小西雄々
南大阪 川柳会	28日(月) 午後6時から そっと・基礎・沈む・パンチ	住まい情報センター(大阪くらしの今昔館・5F) 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋筋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
京都 塔の会	28日(月) 午後2時締切 やっと・欠ける・丁寧	ハートピア京都 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328—202　都倉求芽

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6779-3490)へご連絡ください。

9月各地句会案内

（開催日順）

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 な　ら	3日(木) 午後1時開場 探す・面・世間	奈良市立中部公民館4F　近鉄奈良駅④番出口 〒634-0812 橿原市今井町2—1—24—901 安土理恵
堺川柳会	5日(土) 午後1時から 痛い・練習・「とくこ(折り句)」	堺市総合福祉会館 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3　河内天笑
城北 川柳会	5日(土) 午後1時開場 曲者・おっとり・イケメン 自由吟	旭区老人福祉センター3F 地下鉄千林大宮③番出口 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子
倉吉 川柳会	5日(土) 午後2時締切 卵・温度・だから	倉吉市　明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
尼崎 尾浜 川柳会	8日(火) 午後2時締切 順・まずい・縁・自由吟	尼崎女性センター　トレビエ　阪急武庫之荘駅南へ200m 事務局 〒661-0953 尼崎市東園田町2-45-8　山田耕治
ほたる 川柳 同好会	8日(火) 午後1時半締切 空気・焦る・なまじ(っか)	豊中市立蛍池公民館 阪急・モノレール　蛍池駅駅前ビル5F 〒561-0813 豊中市小曽根2—4—1　水野黒兎
川柳大阪	12日(土) 午後1時から 逆らう・昔・経験	地下鉄御堂筋線天王寺駅「東研修室」 〒533-0004 大阪市東淀川区小松1-18-24-14　長井善純
川柳塔 まつえ	12日(土) 午後2時締切 山・匂う・研ぐ・リハビリ	松江市雑賀町　雑賀公民館 〒690-0056 松江市雑賀町1388　安達幸子
川柳塔 打吹	12日(土) 午後1時から 善・育児・吊る	倉吉市上灘町9　上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637—3　牧野芳光
川柳塔 みちのく	12日(土) 午後5時締切 期待・華やか・くどくど	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ1階「川柳道場」 〒036-0161 平川市杉館宮元53—1　小寺花峯
西宮北口 川柳会	12日(土) 出句締切　午後1時 **創立35周年記念川柳大会** **（詳細は本誌7月号109頁）**	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口歩2分　プレラにしのみや 〒662-0841 西宮市両度町2—19—515　山本義子
八尾市民 川柳会	13日(日) 午後2時締切 夕暮れ・変わる・ほどほど 雑詠	八尾神社内　西郷会館 〒581-0086 八尾市陽光園1-3-12-305 宮西弥生
川柳 さんだ	15日(火) 午後1時から 奥・中年・せめて・自由吟	三田市中央公民館 〒669-1546 三田市弥生が丘5—2—4　堀　正和
富柳会	19日(土) 12時半開場 **第59回 富田林川柳大会** **（詳細は本誌8月号114頁）**	富田林市中央公民館 （近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m） 〒584-0072 富田林市高辺台3-3-18-105　古田千華
和歌山 三幸 川柳会	19日(土) 午後1時から 柔らかい・たっぷり・軽い	和歌山商工会議所4F　第2会議所 〒640-8111 和歌山市新通7—17　古久保和子

編集後記

☆川柳雑誌（昭和16年）の燈下放談という欄で麻生路郎のこんな言葉に出会いました。

―多忙で作れないという作家に＝永い人生であるから実際、のっぴきならぬ忙しさという時期はあるもので川柳も作らずに慌ただしく2ヵ月や3ヶ月が過ぎてしまうことはある。忙しさという絶縁体に妨げられて元の軌道に乗る機会を見失ってしまう者もいる。又ある人は、一寸休んでも、少しでも暇を見つけて元の軌道に乗って作句を続ける。ちょうど日記をつけているようなもので、忙しくてブランクページができても、ブランクはブランクとして、次の日から、そのつづきを書き続けるような態度で川柳にも臨んで欲しい。そうすれば、そのブランクページは、永い一生にとっては、ほんの僅かな時間でしかないと思う―

☆私自身、なかなかブランクを飛び越せぬ意志薄弱者なので自戒も込めて、この言葉を反芻している次第です。

☆三年間至らぬことばかりでしたが、私の編集人としての任期はこの号をもって終了となりました。引き続き川柳塔誌をよろしくお願い致します。（希）

★秋さらり銀の襖のものおもい　（路郎）

★来秋の『川柳雑誌』『川柳塔』通巻千号を記念して『路郎読本（仮称）』の準備に入っているので『川柳雑誌』を紐解く機会が多い。

★路郎師はヘビースモーカーだった。昭和13年9月号に「バット異変」と題して「バットを一日に六ツから八ツ喫っていた。一日に四ケくらいに減らそうと決心をして実行にかかったが、なかなか困難」と嘆く。

★また別の機会には「私のバットは仕事にホッとした時に喫うのではなくて、汽車を走らすのに石炭を焚くようなものだ。それほど私は仕事をしながら喫うのである」と書いている。

★紫煙をくゆらせながら『川柳雑誌』という貨車を引っ張って驀進した路郎をしみじみと想う秋。（朱）

▽二〇〇七年、KBS京都は「守ろう／藤袴プロジェクト」を立ち上げ、今年も十月には梅小路公園で藤袴を中心に秋の和の花の展示会を開催する。京都放送を聞くようになって一年近くよく耳にするのが「藤袴プロジェクト」▽去年の秋に大徳寺に行った時の事、門前に置かれた「藤袴」の鉢が珍しくなった花だけに、記憶に残っていた。そのころはまだこの企画を知らずラジオを聞いている内に、「藤袴プロジェクト」を知りあの時の藤袴はこの企画だったかと気がついた次第である。▽平安時代から歌で親しまれている藤袴を、また自然を守ろうと立ち上げた運動である。この花を育てようと、学校、お寺、ホテル、お店、いろんな施設等など沢山の協賛を得て育てられている。（恵）

ひとこと

良い句だと言われるような句をつくりたい

定年後、お手伝のつもりで「あかつき」の会報（句報）作成に加わり、嫌がる娘にパソコンを教えてもらいながら、「城北」「南大阪」の句報を参考にしつつ、ワードで作成しています。まだまだパソコンが思い通りに動いてくれませんが、前号よりは少しでも良くなるように心掛けているつもりです。

肝心の川柳は、始め出して三年余り、私の川柳塔同人へ推薦を頂いた川端一歩さん、大内朝子さんの名を汚さないように、現在、本社句会と勉強会を含めて月に八ヶ所前後出席しています。諸先輩にもまれながら、良い句だと言われるような句を作りたいと励んでいますが、なかなか上達できず悔しい思いをしている今日この頃です。

（江島谷勝弘）

川柳塔（同人）・水煙抄（誌友）投句用紙

種目「　　」発表（11月号）地名

都道府県市　姓雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友　マルで囲んでください。

投句先　〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201

檸檬抄投句用紙

「灯」（9月15日締切）

11月号発表

高田美代子 選 ――共選―― 牛尾 緑良 選

B　A

地名

県府 市道都

姓
雅号

切らないで下さい

B　A

地名

県府 市道都

姓
雅号

左右に同じ句を書いて下さい

川柳塔誌**新規**購読申込書

年　月　日

氏名		
住所	〒　－	
電話	－　－	
紹介者		
○　年　月から半年　5000円 ○　年　月から一年　9800円	該当の方に○をつけて下さい	

〒543-0052
大阪市天王寺区大道1丁目14番17号　花野ビル201
川柳塔社（電話　06－6779－3490）
振替　00980－4－298479

◎この用紙は新規購読申し込みのみにご使用下さい

本社9月句会

とき　9月7日(月)　午後5時開場・6時20分締切り
―開場時間、締切時間を変更しています。ご注意下さい。

ところ　アウィーナ大阪　4階　金剛
天王寺区石ケ辻町19―12　電06・6772・1441

おはなし「川柳と酒」　井丸昌紀
席題「　」　西内朋月選
兼題「縞」　奥時雄選
「産地」　伊達郁夫選
「去る」　久保田千代選
「スポット」　河内月子選
「互角」　河内天笑選
（各題2句以内）

会費　1000円　投句料　500円（切手可）

本社10月句会は第15回川柳塔まつりとして、10月12日に開催します。
（表紙裏を参照して下さい。）

作品募集

11月号発表（9月15日締切）

川柳塔（8句）　河内天笑選
水煙抄（8句）　川上大輪選
愛染帖（3句）　新家完司選
檸檬抄「灯」（2句）　（牛尾緑良　高田美代子共選）
一路集（3句）「丸い」　川本畔選
「詩人」　中居善信選
「記憶」　小谷集一選
初歩教室「探す」（3句）　鈴木公弘担当

12月号
檸檬抄「おさめる」
一路集「僅か」「まとめ」「カタログ」
初歩教室「くどい」

「川柳塔」への投句について

(1)川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。

(2)愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集は川柳塔柳箋（本社事務所取り扱い）、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。

(3)各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。

(4)各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。

川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いいたします。

第28年度　夜市川柳募集

第4回「弛む」　高瀬霜石選
ハガキに3句　**9月末日**締切

投句先　〒593-8305　堺市西区堀上緑町2-16-3
河内天笑方　**堺川柳会**

定価　八百円（送料76円）
半年分　五千円（送料共）
一年分　九千八百円（同）

二〇〇九年（平成二十一年）九月一日発行
発行人　河内權治
編集人　山本希久子
印刷所　美研アート
発行所　川柳塔社
〒543-0052
大阪市天王寺区大道一―一四―一七
花野ビル201号室
TEL・FAX（〇六）六七七九―三四九〇番
振替〇〇九八〇―四―二九八四七九番

ホームページアドレス　http://www.senryutou.join-us.jp/

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
平成二十一年九月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻九八八号 ●柳塔 九月号 定価 八百円●（送料 七十六円）

第7回とりアート（鳥取県総合芸術文化祭）

第33回 鳥取県川柳大会

とき　11月8日（日）　10時開場　披講　13時30分

ところ　さざんか会館（鳥取市役所駅南庁舎隣）5階大会議室
鳥取市富安2丁目　鳥取駅下車　南口徒歩4分
駐車場完備　TEL 0857－29－7151

兼題と選者（各題2句・席題なし・出句締切11時半）

「スーパー」　前　たもつ　選（大阪府）
「　鏡　」　小島　蘭幸　選（広島県）
「自　慢」　生駒　聖天　選（岡山県）
「三　角」　松本　文子　選（島根県）
「　食　」　土橋　螢　選（鳥取市）
「どっさり」　谷口　次男　選（北栄町）
「天　使」　門脇　かずお　選（米子市）

表彰　鳥取県知事賞ほか

会費　2、000円（作品集・昼食呈）

欠席投句　1、000円（小為替）10月10日〆切　用紙自由

ジュニア部門（事前投句）
「遊　ぶ」（2句・無料）牧野　芳光　選

投句先　〒689－0216　鳥取市気高町宝木1561－113
福西　茶子　方
第33回 鳥取県川柳大会実行委員会　宛
TEL 0857－82－1314

主催　鳥取県川柳作家協会・文化団体連合会

後援　鳥取県・鳥取市・新日本海新聞社 他

オニザキの すりごま

自宅の台所で始めた手洗いのごま加工・販売から50余年。
オニザキでは、手作りの風味にこだわり、独自に開発した製法で、ごまの香りと味わいを最大限に引き出し、美味しいすりごまを作り続けています。

株式会社 オニザキコーポレーションセールス
〒862-0951 熊本市上水前寺1-6-41 OCOビルディング
TEL（フリーダイヤル）0120-30-5050

雑誌 05703－9